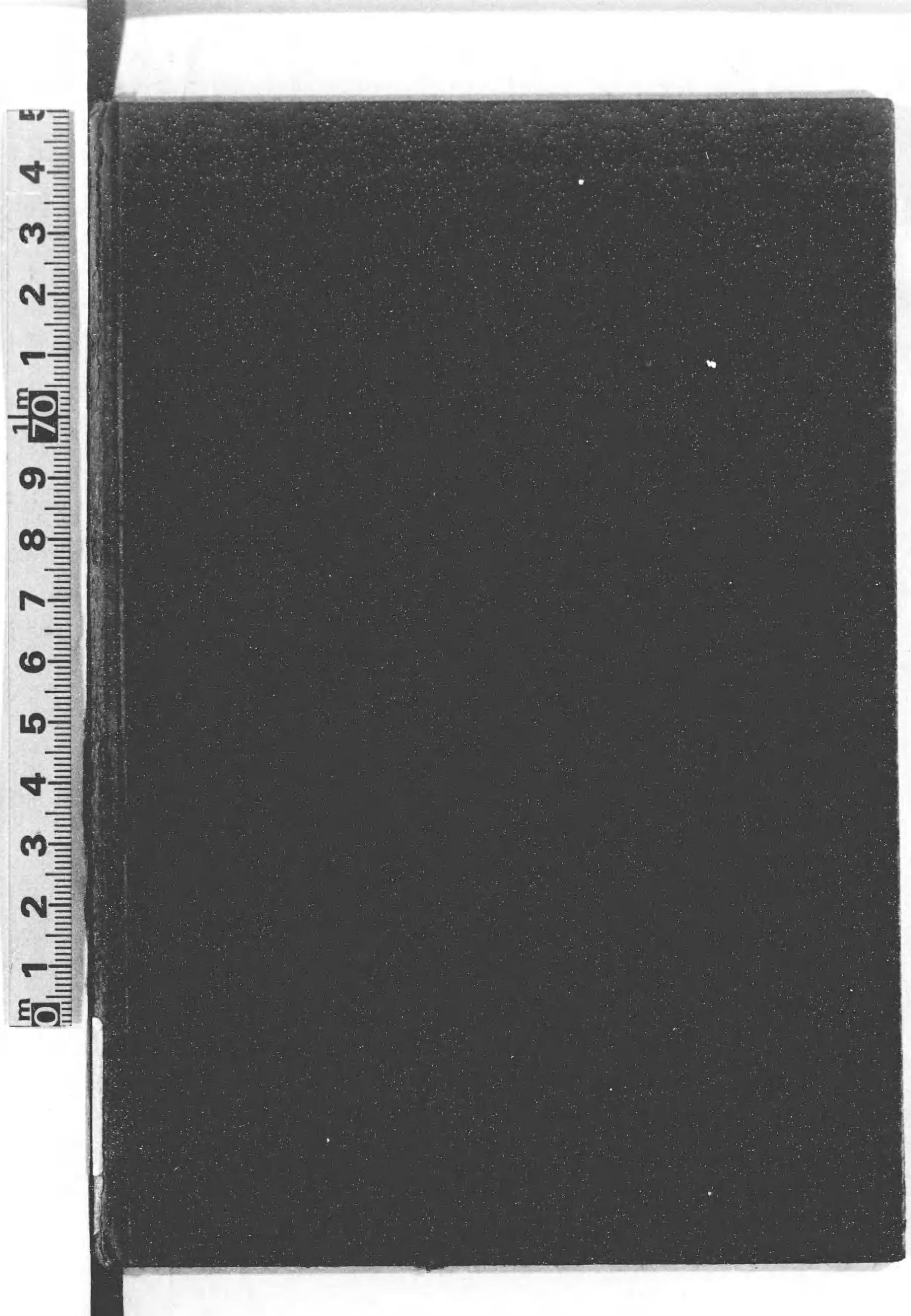
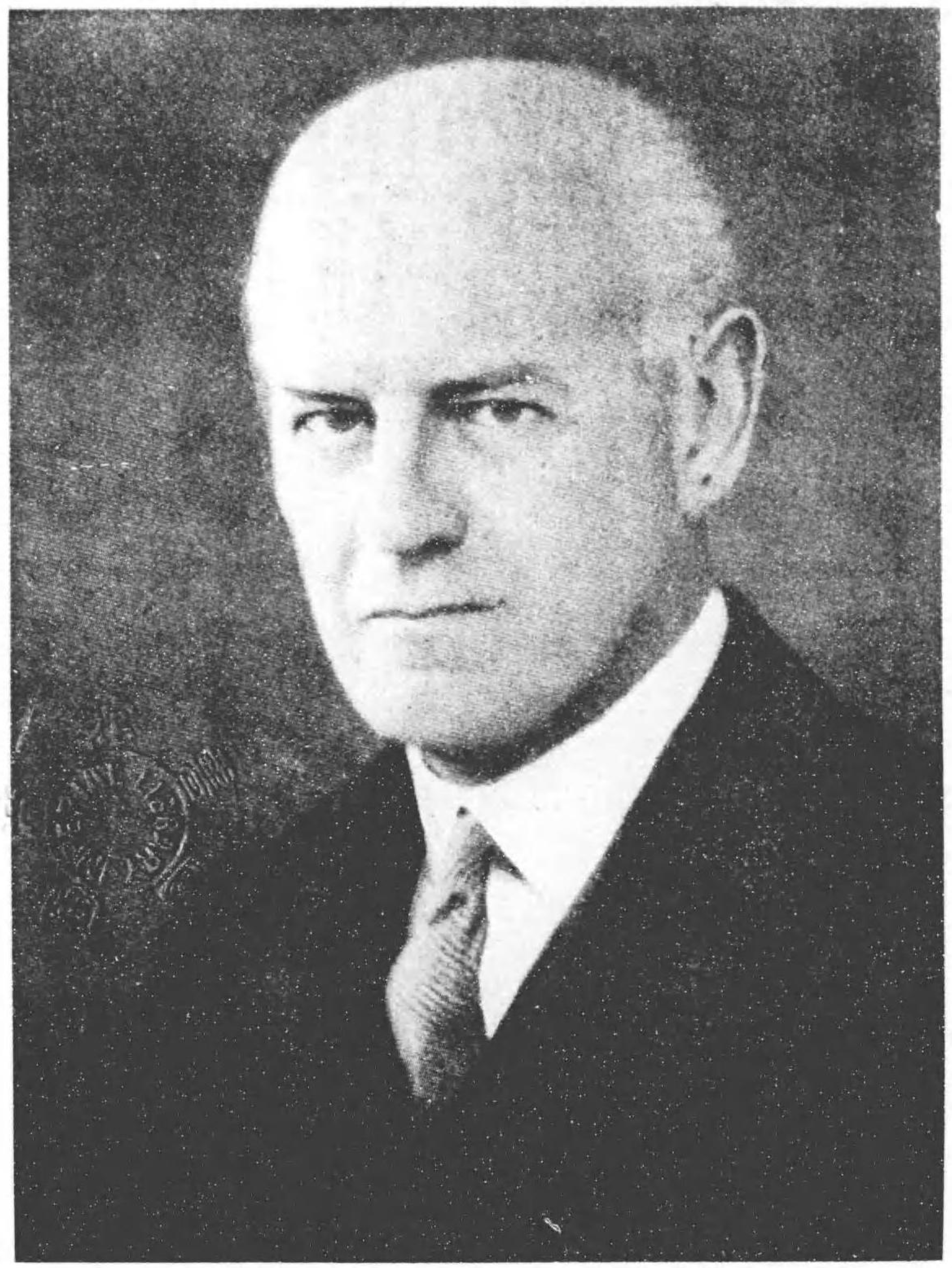
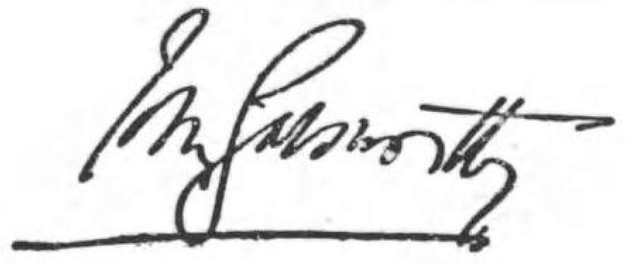
始







譯　者　言

John Galsworthy 程の多藝多能の作家を捉へて、その全豹を紹介し批判することは、本書の解說としてのこの短文では、到底不可能でもあり、又敢てその必要もない。それ故に玆には唯だこの一篇を理解する上に必要と思はるゝ點にのみ一瞥を與へることにして置かう。

彼れは 1867 年八月十四日、英蘭 Surrey 州の Kingston Hill に生れた。彼れの父も矢張り John Galsworthy と云つて、當時知名の辯護士で、且つ數種の事業會社の社長として實業界に相當羽振りをきかせてゐた人であつた。彼れは實にその長男として生れ、裕福な境遇の下にその豐かな天稟を思ふ存分に延ばすことが出來たのである。

彼れは一種の紳士敎育を以て有名な Harrow 中學の出身である。彼れ自身、英國の Public School で敎育されると大抵の人は旅行と競技とが好きになつて、文學や藝術で身を立てやうなどと云ふ氣持は消えて了ふと云つてゐるが、彼れも二十八歲まではその氣がなかつた樣である。在學中は學業の成績も優秀であつたが、運動競技に於ても儕輩を拔いてゐたことは特筆に價する。彼れが文學者としては稀に見る健全な身體の持主であり、異常なる努力の生活を送つて六十二歲の今日尙矍鑠として壯者を凌ぐ慨あるのは、この頃から絕えず身體を鍛錬した賜物であるとも見られる。

Harrow を了へてから、Oxford の New College に入學し、父の後を繼ぐ積りで法律を學んだ。玆でも彼れは優秀な成績を

示して、1889 年に優等で大學を卒業した。そして豫定通りその翌年ロンドンで辯護士を開業はしたが、彼れの性格はかうした職業の無味に堪へ得べくもないので、遂に 1891 年から 1893 年まで世界各地の漫遊に旅び立つたのである。彼れの一生を通じての道樂である旅行癖はこの頃から始つたものである。或は南洋に濠洲に、或は南阿に南米に、足掛け四ヶ年の歳月を旅に暮したが、その間に於ける彼れは自然や人生のあらゆる事象に就いて、深く且つ博く學びもし考へもしたのである。彼れが後年文豪——當時は Torrens 號の一船員であつた Conrad と相知るに至つたのも、この放浪の旅路——濠洲から南阿へ渡る途中であつたと云ふ。

如何に生活上の心配はなくても、斯樣に何時までも悠遊してゐる譯にも行かないので、1895 年二十八歳の頃から小説に筆を染め始めた。尤もさうした方面に多少の自信があつたからではない。實は不承不承に——彼れ自身に云はせれば、後年の Mrs. Galsworthy を悦ばせる爲めに——筆を執り始めたのである。そして約二ケ年間に九篇ばかり書いた。1898 年はそれ等を一書に纒めて "From the Four Winds" と題して John Sinjoh と云ふ penname で出版した。併しこれは彼れ自身 "my first sins" と呼んでゐるもので、後に絶版にされたのである。彼れが漸く自信を以て書き初めたのは、實に 1900 年彼れ年三十三の頃からのことであつて、この點に於ては彼れの生涯の親友 Conrad と同樣に、文壇に於ける start の晩い方である。爾來彼れの努力は年一年と酬ゐられて、數年にして英文壇に押しも押されもせぬ地歩を占むるに至つた。彼れが今日までに發表した小説や論文や小品等二十六卷、劇十八卷、詩二卷と云ふ驚くべき分量は、實はこの比較的遲れて出發した彼れの健鬪を物語

る所の金字塔なのである。

彼れの本領は小説と劇とであることは云ふまでもないが、同時に彼れは又詩人でもあり、文明批評家でもある。彼れは一方に美の熱烈な憧憬者であると共に、道理の聰明な審判者でもある。彼れは談義を厭ふと共に、美に耽溺することをも排斥した。中庸は蓋し彼れの生活の指導原理である。彼れの論集 "The Inn of Tranquillity" の卷頭に "L'excès est toujours un mall" (過度は常に惡なり) と云ふ Anatole France の言を掲げてゐるが、これは軈て彼れの生活狀態度を表明したものと看做してよい。かうした態度はその作品の上にも表はれてゐる。彼れはよく笑ひよく泣くと共に、飽くまでも眞摯なる態度を失はない。この樂んで淫せず悲んで亂れざる態度こそは彼れ自らも云つてゐる樣に英國民の特質なのである。健全なる常識と豐富なる實際的智識とは彼れの凡ての思想を特色附けてゐる。

彼れ自身は富裕に生れ富裕に育つて、而かも靜寂な高蹈的生活を送つてゐるが、彼れは富を以て單なる出生の偶然事と看做し、世の貧しき者不幸なる者に對しては熱い同情の涙を濺ぎ、絶えず社會の害惡や人間の不幸に鋭い注意を拂つてゐる。彼れの書齋の小さな机の前には次の motto が掲げてあると云ふ。

> "I shall pass through this world but once : any good thing, therefore, that I can do, or any kindness that I can show to any human being, or dumb animal, let me do it now. Let me not defer it or neglect it, for I shall not pass this way again."

(自分がこの世界を通るのは一遍切りだ。だから自分で出來る善事は何事でも、又自分が人間なり啞の動物なりに對して示すことの出來る親切は何でも、いま直ぐ行ふことにしやう。それを思ひ止まつたり、等閑に附したりしない樣にしやう。自分は二度と再びこの途を通らないから。)

これに依つて彼れの平素の心掛けが窺はれる。彼れの小說や劇に社會的正義やその他社會的の諸問題を取扱つたものゝ際立つて多いのは、單に時流に媚びんが爲めではなく、かうした深い人道感からおのづからにじみ出たものである。

彼れの平生の起居は極めて几帳面で、日常の小事と雖も決してゆるがせにしない。彼れが容易に他の追隨を許さぬ程までに多方面的で、且つ多產的で、而かも彫琢を極めた作品のみを公にしてゐるのは、一面彼れの惠まれた健康にも依らうが、他面又かうした性格の賜物でもあることは否まれない。

本書は彼れが大戰直後米國に渡つて、各地で爲した講演の選集である。彼れは生粹の英國人——彼れには英國人以外の血は一滴も傳はつてゐないと自ら證言してゐる——ではあるが、彼れの世界に跨がる絕えざる旅行は、彼れに各國の人と自然とに接觸する機會を與へ、彼れの胸におのづから一種の國際心を發達せしめた。加之大戰當時彼れ夫妻は志願して巴里に赴き、身親ら赤十字の事業に助力して得た體驗から、戰爭に對する憎惡心が高まつてゐた。これ等の原因から彼れは人類愛に基く平和主義を提唱するに至つたのである。本書全篇を一貫する思想は實にこの主張である。而かもそれが空漠たる理想論ではなくて、

英語國民の文化と勢力とを中心にし基礎にした世界平和論である所に、現實を離れない英國人流の傾向が看取される。この點は英米國に强く訴ふる所でもあるが、同時に又容易に他民族の共鳴を得難い點でもあらう。

昭和四年十月秋晴の或る日

譯　　者　　誌

CONTENTS

		PAGE
I.	AT THE LOWELL CENTENARY	2
II.	AMERICAN AND BRITON	22
III.	FROM A SPEECH AT THE LOTUS CLUB, NEW YORK	84
IV.	FROM A SPEECH TO THE SOCIETY OF ARTS AND SCIENCES, NEW YORK	96
V.	ADDRESS AT COLUMBIA UNIVERSITY	102
VI.	TO THE LEAGUE OF POLITICAL EDUCATION, NEW YORK	128
VII.	TALKING AT LARGE	140

特210
503

ADDRESSES IN AMERICA

I

AT THE LOWELL CENTENARY

We celebrate to-night the memory of a great man of Letters. What strikes me most about that glorious group of New England writers—Emerson and Longfellow, Hawthorne, Whittier, Thoreau, Motley, Holmes, and Lowell—is a certain measure and magnanimity. They were rare men and fine writers, of a temper simple and unafraid.

I confess to thinking more of James Russell Lowell as a critic and master of prose than as a

---

James Russell Lowell=1819年二月二十二日 Massachusetts 州の Cambridge に生れ、1891 年八月十二日同處で死んだ詩人、評論家、學者、外交家である。彼れは 1838 年 Harvard 大學を卒業し、1855 年 Longfellow の後を繼いで Harvard の敎授に選任されたが、就任に先立つて二年間佛國に留學し、歐來文學の講座を擔當した、1857—62 は Atlantic Monthly の主筆、1863—72 は North American Review の主筆をしてゐた、それから外交官の生活に入つて 1877—80 は西班牙、1880—85 は英國に米國公使として活動した、彼れの活動は多方面で從つて詩の外に文藝批評や政治や外交に關する評論が澤山ある。

Ralph Waldo Emerson=1803 年五月二十五日 Massachusetts 州の Boston に生れ、1882 年四月二十七日同州 Concord で死んだ有名な思想家、文學者、Concord の聖者と云はれてゐる。

Henry Wordsworth Longfellow=1807年二月二十七日 Maine 州の Portlandに生れ、1882 年三月二十四日 Cambridge で死んだ有名な詩人。

Nathaniel Hawthorne=1804 年七月四日 Massachusetts 州の Salem に生れ 1864 年五月十九日 New Hampshire 州の Plymouth で死んだ有名な小說家。

John Greenleaf Whittier=1807 年十二月十七日 Massachusetts 州

第一

ローウエル百年祭に於て

今夕吾々は一人の偉大なる文人の紀念式を擧げてゐる。米國文學者のあの光輝ある一團——エマースン、ロングフエロー、ホーソン、ウイツチヤー、ソーロー、モツトリー、ホームズ、ローウエルの諸星に就いて、私の心に一番强く響くものは、或る種の程合ひと宏潤さとである。彼等は稀代の人物で、美しい筆を有つた人であり、單純で物に恐れない氣性を有つてゐた。

私はジエームズ・ラツセル・ローウエルを、一詩人としてよりは、寧ろ一個の批評家、散文の大家として一層重んじてゐるこ

の Haverhill に生れ、1892 年九月七日 New Hampshire 州の Hampton Falls で死んだ詩人改革者評論家である。彼れは奴隷廢止論の急先鋒で、米國奴隷反對同盟の幹事長をしてゐた、その爲めに mob の襲擊を受けたこともあつた。

Henry David Thoreau=1817 年七月十二日 Concord に生れ 1862 年五月六日同所で死んだ思想家である。Concord の Walden Pond の岸邊に獨り生活して瞑想の生活を送つてゐた。"Walden, or Life in the Woods" は最も有名である。

John Lothrop Motley=1814 年四月十五日 Massachusetts 州の Dorchester (今は Boston 市に編入されてゐる)に生れ 1877 年五月二十九日英國の Dorset で死んだ歷史家で外交家であつた、彼れは初め法律を學び一時辯護士を開業してゐたが後歷史の硏究に入り、晚年を英國で送つた、彼れは 1861—67 は駐墺、1869—70 は駐英の米國公使であつた。

Oliver Wendell Holmes=1809 年八月二十九日 Massachusetts 州の Cambridge に生れ、1894 年十月七日同所で死んだ詩人、論文家、小說家である、彼れは元來は醫者で Harvard 大學醫學部の解剖學及び生理學の敎授で後日大學の名譽敎授になつた人であるが、本職よりに文名で不朽になつてゐる、閱歷だけは日本の森鷗外に類似してゐる。

poet. His single-hearted enthusiasm for Letters had a glowing quality which made it a guiding star for the frail barque of culture. His humour, breadth of view, sagacity, and the all-round character of his activities has hardly been equalled in your country. Not so great a thinker or poet as Emerson, not so creative as Hawthorne, so original in philosophy and life as Thoreau, so racy and quaint as Holmes, he ran the gamut of those qualities as none of the others did; and as critic and analyst of literature surpassed them all.

But I cannot hope to add anything of value to American estimate and praise of Lowell—critic, humorist, poet, editor, reformer, man of Letters, man of State affairs. I may, perhaps, be permitted however to remind you of two sayings of his: "I am never lifted up to any peak of vision—but that when I look down in hope to see some valley of the Beautiful Mountains I behold nothing but blackened ruins, and the moans of the down-trodden the world over.... Then it seems as if my heart would break in pouring out one glorious song that should be the Gospel of Reform, full of consolation and strength to the oppressed—that way my madness lies." That was one side of the youthful Lowell,

---

barque=bark.

humour=寧ろ「ユーマー」と云つて置いた方が間違がないかも知れない、wit の智的なるに對して情的なものを謂ふ。

as none of the others did=他に誰れもそれ等の諸性質を兼備してゐた人がなかつたのに對しての意。

cannot hope to add=加へ得る見込がない意。

editor=雜誌には限らないが彼れが事實主筆をやつてゐたのは雜誌

とを告白する。彼れの文學に對する心からの熱意は白熱の性質を帶びてゐて、文學を以て脆き文化の船の道知るべの星とまでもなしたのである。彼れの諧謔、彼れの眼界の廣さ、彼れの聰明、彼れの活動の多方面的な特質は、先づ諸君の國に於てこれまで匹儔を見ない。彼れは、エマースン程に偉大なる思想家乃至詩人でもなく、ホーソン程に創造的でもなく、ソーロー程に哲學や生活に於て獨創的でもなく、ホームズ程に痛快でそして警抜でもないが、併し彼れは他の誰にもなかつた樣に、これ等の諸性質の全範圍に渡つてゐた。そして文學の批評家として又分析者としては彼れは彼等の凡てを凌駕してゐたのである。

併し私は、ローウエルに對する——批評家であり、諧謔家であり、詩人であり、雜誌の編輯者であり、改革者であり、文學者であり、政治家であつたローウエルに對する米國人の評價と賞讚との上に、更に幾分でも價値を加へ得やうとは思はない。併し私は恐らく私が彼れの云つた言葉の中の二つに諸君の記憶を喚起する位のことは差支ないと思ふ。彼れ曰く、私は如何なる觀察の峯に登つて見ても何時も必ず、——美しい山々のどこかの谷間を見やうと思つて下を見ると、唯だ眞黑になつた廢墟と世界全體に渡つて踏み躙られた者の呻きのみしか見られない……そこで恰も私の胸が破れて、抑壓された者に與へられる慰めと力とに充ち滿ちた改革の福音ともなるべき所の一つの光輝ある歌を注ぎ出すに至るかの樣に思はれる、—— そこに私の狂熱が存するのである」と。それが青春の頃のローウエル、即ち

であつたから、

I am never lifted up......but that......=することの外は決して登らない、：登れば何時でも必ず......する。

peak of vision=大觀する時の立脚地即ち觀點のこと。

that way my madness lies=私の狂氣じみた熱心はさうした方面即ち抑壓された者の救濟、改革の福音に存在する。

the generous righter of wrongs, the man. And this other saying: "The English-speaking nations should build a monument to the misguided enthusiasts of the plains of Shinar, for as the mixture of many bloods seems to have made them the most vigorous of modern races, so has the mingling of divers speeches given them a language which is perhaps the noblest vehicle of poetic thought that ever existed." That was the other side of Lowell, the enthusiast for Letters; and that the feeling he had about our language.

I am wondering, indeed, Mr. President, what those men who in the fourteenth, fifteenth, sixteenth centuries were welding the English language would think if they could visit this hall to-night, if suddenly we saw them sitting here among us in their monkish dress, their homespun, or their bright armour, having come from a greater Land even than America—the Land of the Far Shades. What expression should we see on the dim faces of them, the while they took in the marvellous fact that the instrument of speech they forged in the cottages,

---

the generous righter=the noble-minded righter.

build a monumen to=……の爲めに記念碑を建てゝその遺德を偲ぶ意。例へば Ye build the tombs of the prophets. (Luke XII. 47.)

the misguided enthusiasts of the plains of Shinar=舊約聖書の傳ふる所に依ればノアの洪水後地上の人類は皆ノアの子孫で「全地皆一つの言語一つの音で」あつたがそれがシナルの地に邑を建て人々の分散を防ぐ爲めに天にまで達する塔を建設しやうと企てた、それをエホバの神が見て「彼等の言語を淆だし互に言語を通ずることを得ない」樣にしやうと、「彼等を全地の表面に散らしたまひければ彼等邑を建てることを止め」たと云はれてゐる。神が言語を混亂せしめた所からその塔を

不義の俠氣ある匡正者、即ち人としての一面であつた。それから今一つの言葉はかうである、曰く「英語國民は宜しくサイナールの平野の惑はされた熱情家に對して紀念碑を建つべきである。何故なれば、幾多の人種の混合が、英國民をして近代民族の中で最も力强き民族たらしめた樣に思はれると同樣に、樣々な言語の混合も、亦恐らく詩想の古今未曾有の高貴なる傳達器である樣な言語をば彼等に與へたからである」と。それはローウエルの今一方の方面、即ち文學に對する熱情家としての一面であつた。そしてそれが又彼れの吾々の國語に就いて抱いてゐた感情であつたのである。

會長閣下、實は私は、十四、十五、十六世紀に於て、英語をば鎔接してゐたあの人達が、若しも今夕この講堂に出席することが出來たならば、若しも彼等が、米國よりすらも大きい國遠い冥路の國から現はれて來て、その僧服の樣な着物や、その手織の着物や、或はその輝く甲冑を着てこゝに吾々の間に腰掛けてゐるのを、吾々が突然見た場合に、彼等は果してどう考へるだらうか知らと思つてゐる。彼等がその霧深かき小さな島の小舍や宮廷や僧院や城の中で鑄造した言語が、世界の半分の日常語

バベル(淆亂)と名付けた。その時以來人類は互に異つた言語を有つ樣になつたと傳へられてゐる、(詳しくは創世記第十一章第一節——第九節參照)爰ではそのシナルの平野に邑を建てやうと誤つて計劃した熱心家があつたが爲めに言語が樣々に分かれたのであるから、種々の言語の混成に依つて優秀な言語を有つことになつてゐる英語を話す國民は Babel 塔の計劃者に感謝すべきだと云ふ意である。序に Babel の塔は混亂の原とか架空の計劃を象徵する。

welding= 金を鎔かして接合せること、諸國諸地方の言語を混合して英語を作つたことを云ふ。

take in=realize.

courts, cloisters, and castles of their little misty island had become the living speech of half the world, and the second tongue for all the nations of the other half! For even so it is now—this English language, which they made, and Shakespeare crowned, which you speak and we speak, and men speak under the Southern Cross, and unto the Arctic Seas!

I do not think that you Americans and we English are any longer strikingly alike in physical type or general characteristics, no more than I think there is much resemblance between yourselves and the Australians. Our link is now but community of language—*and the infinity which this connotes.*

Perfected language—and ours and yours had come to flower before white men began to seek these shores—is so much more than a medium through which to exchange material commodities; it is cement of the spirit, mortar linking the bricks of our thoughts into a single structure of ideals and laws, painted and carved with the rarities of our fancy, the manifold forms of Beauty and Truth. We who speak American and you who speak English are

---

crown=put finishing touch to.

the Southern Cross=南方十字星座は北斗七星と相對して航海者の指針である、玆では濠洲を指してゐる。

the infinity=the infinite quantity of meanings 千萬無量の意味。

these shores=the American shores.

is so much more than=……よりも遙か以上のもの：よりも遙かに重いものとの意。

となり、後半分の凡ての國民の第二の國語となつたと云ふ驚くべき事實が彼等に吞み込めた時に、彼等の朦朧たる額の上に、吾々は如何なる表情を見ることであらうか。と云ふのは現に事實はさうでさへもあるからである——卽ちこの英語は曾て彼等が製造し、沙翁が仕上げをしたもの、それは現に諸君も話し吾々も話し、南方十字星座の下でも、北氷洋に至るまでも人々が話してゐるものだからである。

私は、諸君米國人と吾々英國人とが、身體の型や一般の特質に於て、今日でも尙著しく類似してゐるとは思はない。それは私が、諸君自身と濠洲人との間に非常に類似した點があるとは思はないのと同樣である。吾々の間の連鎖は只今の處、言語の共通と云ふことと——この言語の共通性が含蓄する所の無限の意義とだけである。

完成せられた言語——そして吾々の言葉も諸君の言葉も、白人がこゝいら海岸をあさり始める前に既に花を開いてゐたものであつたが——それは物品を交換する爲めに用ゆる媒介物よりも遙かに重大な意義を有つてゐるものである。それは精神のセメントであり、吾々の空想の稀代の產物、卽ち美と眞と樣々な形態で以つて描かれ彫刻された理想と法則との一箇の建築に、吾々の思想の煉瓦を接合する所の漆喰なのである。米語を話す

---

a medium……material commoditis=貨幣若しくは貨幣に代はる交換手段。

liking the bricks……and laws=吾々の思想の斷片をつぎ合はせて理想と法則とに依つて組立てられた渾然たる一統體と爲す卽ち文學的作品は言語と云ふ繪具で繪かれた一幅の繪畫である。

rarities of our fancy=things of uncommon excellence produced by our imagination.

conscious of a community which no differences can take from us. Perhaps the very greatest result of the grim years we have just been passing through is the promotion of our common tongue to the position of the universal language. The importance of the English-speaking peoples is now such that the educated man in every country will perforce, as it were, acquire a knowledge of our speech. The second-language problem, in my judgment, has been solved. Numbers, and geographical and political accident have decided a question which I think will never seriously be reopened, unless madness descends on us and we speakers of English fight among ourselves. That fate I, at least, cannot see haunting the future.

Lowell says in one of his earlier writings: "We are the furthest from wishing to see what many are so ardently praying for, namely, a National Literature; for the same mighty lyre of the human heart answers the touch of the master in all ages and in every clime, and any literature in so far as it is national is diseased in so much as it appeals to some climatic peculiarity rather than to universal nature." That is very true, but good fortune has now made of our English speech a medium of *internationality*.

---

difference=disagreement in opinion or interest.

grim=sinister, ghastly.

perforce=of necessity.

geographical and political accident=英米が偶々地理的にも政治

所の吾々英國人と、英語を話す所の諸君米國人とは、如何なる不和も吾から取り去ることの出來ない一つの共同社會を意識してゐる。吾々恰度經過して來たばかりの物凄い年月の唯一最大の結果は、恐らく吾々の共通の言葉が世界語の位置にまで昇進したと云ふことであらう。英語國民の重要さは今や非常なものであつて、如何なる國に於ても苟も教育ある人は、謂はゞ否應なしに、吾々の言葉の智識を習得しなければならぬ程である。第二國語の問題は、私の判斷に依れば、既に解決されて了つた樣である。狂氣が吾の上に降りて來て、吾々英語を話す者が吾々同志の間で戰ふ樣なことのない限り、今後再び重大問題となることは決してないと思はれる問題をば、數と地理的及び政治的偶然出來事とが決定して了つた。そして今云つた吾々同志で戰ふと云ふ樣な運命は、少くとも私には、未來に附纏つてゐるとは思はれない。

ローウエルはその初期の文章の一つで云つてゐる。「吾々は、多くの人々が極めて熱烈に要求してゐるもの、即ち國民的文學なるものが出來ることを望んでゐる者では決してない。何故なれば、人心と云ふ同樣な偉大なる竪琴は、有らゆる時代有らゆる地方の名人の手の冴へに響應するものである。そして如何なる文學でも、それが國民的である限りに於て、それは普遍的な人間性に訴へるよりは、寧ろ或る地方的の特質に訴へるものであるだけそれだけ病的である」と。それは如何にもその通りであるが、幸なことには、吾々の英語は今や、國際間の媒介物となつたのである。

的にも優越して殆ど最後の決定權を握つてゐることを指す。

that fate=we speakers of English fight among ourselves. のことを指す。

the furthest=the farthest.

Henceforth you and we are the inhabitants and guardians of a great Spirit-City, to which the whole world will make pilgrimage. They will make that pilgrimage primarily because our City is a market-place. It will be for us to see that they who come to trade remain to worship. What is it we seek in this motley of our lives, to what end do we ply the multifarious traffic of civilisation? Is it that we may become rich and satisfy a material caprice ever growing with the opportunity of satisfaction? Is it that we may, of set and conscious purpose, always be getting the better of one another? Is it even, that of no sort of conscious purpose we may pound the roads of life at top speed, and blindly use up our little energies? I cannot think so. Surely, in dim sort we are trying to realise human happiness, trying to reach a far-off goal of health and kindliness and beauty; trying to live so that those qualities which make us human beings—the sense of proportion, the feeling for beauty, pity, and the sense of humour—should be ever more exalted above the habits and passions that we share with the tiger, the ostrich, and the ape.

And so I would ask what will become of all our reconstruction in these days if it be informed and guided solely by the spirit of the market-place? Do Trade, material prosperity, and the abundance of

---

is this motley of our lives=this motley lives of ours.
ply=work vigorously at.
pound=run heavily.
in dim sort=though it is in dim sort.

今後諸君と吾々とは、一つの大なる魂の都の住民であり保護者なのである。そして全世界はこの心の都へ巡禮を爲すであらう。彼等は何よりも第一に吾々の都が市場であるが故に、さうした巡禮を爲すであらう。併し商賣に來る人達と雖も矢張り禮拜すると云ふことが吾々に分るであらう。吾々が吾々のこの雜駁な生活の中に求むるものは何であらうか。何の爲めに吾々は樣々な文明の取引に精を出すであらうか。それは吾々が金持になり、滿足の機會ある毎に益々增長し行く所の物質的氣まぐれを滿さんが爲であらうか。それは吾々が、一定の意識的な目的から、常にお互に他を凌がんとする爲であらうか。それは何等意識的目的もなく、唯だ全速力で人生の行路をよたよたと駈り、盲目滅法に吾々のなけなしの精力を使ひ果たさんが爲めであらうか。私にはさうは考へ得られない。確に吾々は、朧氣ながらも人類の幸福を實現しやうと努めてゐるのである。健康と親切と美と云ふ遼遠の目標に到達しやうと努めてゐる。吾々をして人間たらしめてゐる所の諸性質——即ち均齊の感、美に對する憧憬、憐憫の情、洒落の感——をして吾々が虎や駝鳥や猿と共有してゐる所の習慣や愛慾の上に益々高く向上せしむる樣な、さうした生活をしやうと努めてゐるのである。

それであるから、私は敢て問ひ度い。若しも近頃行はれてゐる吾々の改造が、凡て唯だ單に市場の精神に依つてのみ鼓吹され指導されるならば、それは果してどうなるであらうか。商業や、物質的繁榮や、動物的快樂の潤澤は、果して吾々が吾々の

---

what will become of=……から何が出來るであらうか……はどうなるだらうか。
be informed=be inspired.

creature comforts guarantee that we advance towards our real goal? Material comfort in adundance is no bad thing; I confess to a considerable regard for it. But for true progress it is but a flighty consort. I can well see the wreckage from the world-storm completely cleared away, the fields of life ploughed and manured, and yet no wheat grown there which can feed the spirit of man, and help its stature.

Lest we suffer such a disillusion as that, what powers and influence can we exert? There is one at least: The proper and exalted use of this great and splendid instrument, our common language. In a sophisticated world speech is action, words are deeds; we cannot watch our winged words too closely. Let us at least make our language the instrument of Truth; prune it of lies and extravagance, of perversions and all the calculated battery of partizanship; train ourselves to such sobriety of speech, and penmanship, that we come to be trusted at home and abroad; so making our language the medium of honesty and fair-play, that meanness, violence, sentimentality, and self-seeking become strangers in our Lands. Great and evil is the power of the lie, of the violent saying, and the calculated appeal to base or dangerous motive; let us, then, make them fugitives among us, outcast

---

a flighty consort=何時相手を見棄てるかも知れない様な手頼にならない配偶者。

we cannot watch......too closely=we should watch our winged words as closely as possible.

眞の目標に向つて前進してゐることを保證するものであらうか。潤澤なる物質的快樂は決して惡いことではない。私はそれを相當に重んじてゐることを白狀する。併し眞正なる進歩に取つては、それは唯だ輕薄なる伴侶たるに過ぎない。私は、世界の嵐の爲めに難破した漂流物が完全に取片付けられ、人生の原野が耕され施肥されて、而かも尙も、人間の精神を養ひその成長を助け得る麥が、そこに一本も生えてゐないのを、明かに見ることが出來るのである。

然らば吾々がさうした幻滅に陷らない樣にする爲めには、吾吾は果して如何なる力を働かせ如何な勢力を及ぼし得るであらうか。少くとも一つはある。即ち吾々の共通言語と云ふこの偉大なる立派な道具をば正當に且つ高尙に用ゆることである。口で誤魔化しの利く世界に於ては、言論は行動であり、言葉は行爲である。吾々の千里を走る言葉は如何程嚴重に監視してゐても決して嚴重過ぎることはない。少くとも吾々は吾々の國語をして眞理の道具たらしめやうではないか。吾々の國語から虛僞と無法とを摘み去り、曲用することと凡て黨派根性に基いて爲めにする所ある攻擊に用ゆることとを除かうではないか。吾々が國の內外に於て信頼せられる樣になる程度まで言語と文章との謹嚴を保つ樣に自ら訓練し、斯くして吾々の國語をして正直と公平との媒介物たらしめ、以つて卑劣や、亂暴や、感情論や、自分勝手なことなどが吾々の國には見られなくなる樣にしやうではないか。虛言の力や、亂暴な言葉の力や、野卑な若しくは危險な動機に爲めにする所あつて訴へることなどは、實に大なる害惡である。さればそれ等をして吾々の間の亡命者たらしめ、

---

winged words=獨りでに傳はつて行く言葉。
great and evil=great evil.

from our speech.

I have often thought during these past years what an ironical eye Providence must have been turning on National Propaganda—on all the disingenuous breath which has been issued to order, and all those miles of patriotic writings dutifully produced in each country, to prove to other countries that they are its inferiors! A very little wind will blow those ephemeral sheets into the limbo of thin air. Already they are decomposing, soon they will be dust. To my thinking there are but two forms of National Propaganda, two sorts of evidence of a country's worth, which defy the cross-examination of Time: The first and most important is the rectitude and magnanimity of a Country's conduct; its determination not to take advantage of the weakness of other countries, nor to tolerate tyranny within its own borders. And the other lasting form of Propaganda is the work of the thinker and the artist, of men whose unbidden, unfettered hearts are set on the expression of Truth and Beauty as best they can perceive them. Such Propaganda the old Greeks left behind them, to the imperishable glory of their Land. By such Propa-

be issued to order=ready-made の反對で、その時その場合の必要に應じ出されろ。

the disingenuous breath=the dishonest talk.

miles of=long rolls of.

defy=resist openly endure.

unbidden=not commanded.

be set on=be absorbed in.

吾々の言語から除け者にしやうではないか。

私が最近數年間屢々考へて來たことであるが——神は、國家的宣傳なるものに對して——即ち各國互に他の國が自分の國よりも劣等國であると云ふことを他の國に立證する爲めに、注文に應じて出されて來た凡ての不正直な話や、各國に於て忠實に製作されたあの澤山の愛國的の著作文章の凡てに對して、果しどんなに嘲笑の眼を向けてゐたことであつたらうか。これ等の果敢ない紙片は、極めて微かな風でも一吹き吹けば、薄靄の忘却の中に消え去るであらう。もう現にそれ等は朽ちつゝある。軈ては塵に歸するであらう。私の考へる所では、「時」の嚴密なる檢討を物ともしない國家的宣傳、即ち一國の價値の證明には二形式乃至二種類しかない。第一の最も重要なものは、一國の行動の公正と大度とである。即ち他の國の弱味にも付け込まないし、又自國の境界內に於ても壓制は容さないと云ふその堅き決意である。そしても一つの永續的形式の宣傳は、思想家及び藝術家の作品、即ち自發的の、束縛されざる心持を以つて、眞理と美とを自分が知覺し得る限り立派に表現することに專念してゐる人達の作物である。其樣な宣傳をば古代希臘人は彼等の後に殘して、それは彼等の國の不滅の光榮となつてゐる。斯樣な宣傳

Marcus Aurelius=121 年四月二十日 Rome に生れ 180 年三月十七日 Pannonia で死んだ有名な羅馬の皇帝である彼れは同時にストア派の哲學者でその「瞑想錄」は今日でも讀まれてゐる。

Plutarch=46 年頃希臘の Boeotia の Chaeronea で生れた希臘の歷史家で、その死んだ年月は詳でない、その "Parallel Lives"「英雄列傳」實は「並列傳」は有名な著述で古來幾多の名士をその少年時代に感奮せしめたものである。

ganda Marcus Aurelius, Plutarch; Dante, St. Francis; Cervantes, Spinoza; Montaigne, Racine; Chaucer, Shakespeare; Goethe, Kant; Turgenev, Tolstoi; Emerson, Lowell—a thousand and one more, have exalted their countries in the sight of all, and advanced the stature of mankind.

You may have noticed in life that when we assure others of our virtue and the extreme rectitude of our conduct, we make on them but a sorry impression. If on the other hand we chance to perform some just act or kindness, of which they hear, or to produce a beautiful work which they can see, we become exalted in their estimation though we did not seek to be. And so it is with Countries. They may proclaim their powers from the housetops—they will but convince the wind; but let their acts be just, their temper humane,

---

Alighieri Dante=1265 年五月伊太利の Florence に生れ、1321 年九月十四日 Ravenna で死んだ有名な詩人、その "Divina Commedia' (神曲)は彼れの名を不朽ならしめてゐる。

St. Francis of Assisi のことで 1182 年に伊太利の Assisi に生れ 1226 年十月四日同所で死んだ有名な宗教家、禁慾主義的な Franciscan 教團の開祖である。

Saavedra Cervantes=1547 年十月九日(?)に西班牙の Alcala de Henares に生れ、1616 年四月二十三日 Madrid で死んだ詩人小說家である。その "Don Quixote" は我國でも親しまれてゐる。

Benedict Spinoza=1632 年十一月二十四日 Amsterdam に生れ、1677 年二月二十一日 The Hague で死んだ哲學者、彼れは眼鏡磨きを生業として思索に耽つてゐた、その主著は "Ethics"

Michel Eyquem de Montaigne=1533 年二月二十八日佛國 Dordogue の Château Montaigne に生れ、1592 年九月十三日(?)に死んだ有名な論文家、彼れの論文は佛國は因より英國にても讀まれ、Bacon や沙翁はそれを熱心に讀んだものらしい。

Jean Baptiste Racine=1639 年十二月十二日 La Ferté-Milon に生れ、1699 年四月二十六日 Paris で死んだ有名な悲劇詩人。

に依つて、マーカス・オーレリアスやプルターク、ダンテや聖フランシス、セルヴアンテスやスピノーザ、モンテイヌやラシーヌ・チョーサーやシエクスピヤー、ゲーテやカント、ツルゲネフやトルストイ、エマースンやローウエル——その外無數の人々が、その國々を萬人瞻仰の的たらしめ、人類の偉大さを進めたのである。

吾々が他人に自己の美德や、自己の行動の極めて公正であることを吹聽する時に、吾々はその人達に、極めて惡い印象を與へるものだと云ふことは諸君がこれまで人生に於て氣付かれて來たことであらう。これに反して、若しも吾々が、偶々何か正しい行や親切な振舞をして、それを彼等が耳にするとか、或は彼等の見得る美しい作品を製作するとか云ふ樣なことがあれば、吾々は自ら求めずとも、彼等の吾々に對する評價は高まつて來るのである。國家の場合もそれと同樣である。國家は如何にそのも力を屋根の上から宣傳しても——それは空吹く風を信ぜしむるに過ぎない。併し若しその行動が公正であり、その氣質にして

Geoffrey Chaucer
William Shakespeare } は爰に贅するまでもない程英語を讀む人には耳慣れてゐる英國の文豪

Johann Wolfgang von Goethe=1749 年八月二十八日 Frankfurt am Main に生れ、1832 年三月廿二日 Weimar で死んだ獨逸最大の文豪。

Immanuel Kant=1724 年四月廿二日 Prussia の Königsberg に生れ、1804 年二月十二日同所で死んだ有名な哲學者で、批判哲學を打建て近代の思想に最も大なる影響を與へてゐる。

Ivan Sergeyevich Turgenev (or Turgenieff)=1818 年十一月九日ロシヤの Orel に生れ、1883 年九月三日 Paris の近くの Bongival で死んだ小說家でその作品は我國にも喧傳されてゐる。

Count Leo Nikolaievich Tolstoi=小說家として社會改革者として宗敎家として我國に最もよく紹介されてゐるロシヤの文豪で敢て贅するまでもあるまい。

a thousand and one more=and many others.

though we did not to be=の次に exalted in their estimation が略してある。

the speech and writings of their peoples sober, the work of their thinkers and their artists true and beautiful—and those Countries shall be sought after and esteemed.

We, who possess in common the English language—"best result of the confusion of tongues" Lowell called it—that most superb instrument for the making of word-music, for the telling of the truth, and the expression of the imagination, may well remember this: That, in the use we make of it, in the breadth, justice, and humanity of our thoughts, the vigour, restraint, clarity, and beauty of the setting we give to them, we have our greatest chance to make our Countries lovely and beloved, to further the happiness of mankind, and to keep immortal the priceless comradeship between us.

the setting we give to them＝吾々が思想に與へる背景、即ち言

人情味あり、その國民の言論文章に於て眞面目であり、その思想家藝術家の著作作品にして眞であり美であるならば、それ等の國々は必ずや持囃され敬重されることになる。

英語を共有してゐる吾々、ローウェルの所謂「言語混合の最良の結果」たる英語を共有し、言葉の音樂を作る爲めの、眞理を語る爲めの、想像を表現する爲めのあの最も優秀な道具を共有してゐる吾々は宜しく次のことを記憶すべきであらう。それは、吾々が英語を用ゆるに際して、吾々の思想の博大と公正と人間味にと於て、吾々がその思想を映し出す背景の力强さと、抑制と、透明さと美しさとに於て、吾々は、吾々の國を愛らしい又人に愛せられものとなし、人類の幸福を增進し、吾々の間に存する測り難き價値を有つた戰友關係を不滅ならしめて置く上に、最大の機會を有つてゐると云ふことである。

語のことで、言語の上に吾々の思想が織込まれ鏤められる。

II

AMERICAN AND BRITON

On the mutual understanding of each other by Americans and Britons, the future happiness of nations depends more than on any other world cause. Ignorance in Central Europe of the nature of American and Englishman tipped the balance in favour of war; and the course of the future will surely be improved by right comprehension of their characters.

Well, I know something at least of the Englishman, who represents four-fifths of the population of the British Isles.

And, first, there exists no more unconsciously deceptive person on the face of the globe. The Englishman does not know himself; outside England he is only guessed at.

Racially the Englishman is so complex and so old a blend that no one can say precisely what he is. In character he is just as complex. Physically, there are two main types; one inclining to length of limb, bony jaws, and narrowness of face and

---

the balance=the weighing of actions or opinions. 爰では戰爭をやらうかやるまいかとの利害の商量を云ふ。

第　二

米國人と英國人

諸國民の將來の幸福は、他の如何なる世界的原因に依るよりも、米國人と英國人との相互の理解に依る所が遙かに多い。中央歐羅巴が英米人の本性を知らなかつたことが戰爭をやる方に天秤を傾かせたのである。從つて將來の進程は英米人の性格を正しく理解することに依つて必ずや改善されるに相違ない。

さて、私は少くとも、英國人——英本國の人口の五分の四を代表する所の英國人に就いては多少知る所がある。

そして第一に、彼等程無意識的に僞瞞的な人間は、地球上にない。英國人は自分自身を知らない。英國以外に於ては彼は唯だ推量されてゐるのに過ぎないのである。

人種的には、英國人は極めて複雜で、且つ極めて古い雜種であつて、誰れも英國人の本質を正確に云ひ得るものはない。性格に於ても恰度同じ樣に複雜である。體格から云へば二種の主要型がある。甲は、四肢の長い、顎の骨張つた、顔と頭の細長

---

in favour of war=戰爭贊成に。
what he is=his true nature.

head (you will nowhere see such long and narrow heads as in our island); the other approximating more to the legendary John Bull. The first type is gaining on the second. There is little or no difference in the main mental character behind these two.

In attempting to understand the real nature of the Englishman, certain salient facts must be borne in mind.

THE SEA. To be surrounded generation after generation by the sea has developed in him a suppressed idealism, a peculiar impermeability, a turn for adventure, a faculty for wandering, and for being sufficient unto himself in far and awkward surroundings.

THE CLIMATE. Whoso weathers for centuries a climate that, though healthy and never extreme, is, perhaps, the least reliable and one of the wettest in the world, must needs grow in himself a counterbalance of dry philosophy, a defiant humour, an enforced medium temperature of soul. The Englishman is no more given to extremes than his climate; and against its damp and perpetual changes he has become coated with a sort of protective bluntness.

John Bull=英國人の渾名であるが、普通繪畫に出る John Bull はでつぷり肥滿した人物になつてゐる。
gain on=encroach.
little or no=almost no.
impermeability=dull sense の意。
a turn=a tendency or disposition.

い（私共の島に於ける程細長い頭は何處にも見られないだらう）傾がある。乙は傳說的なジョンブルに一層近似した型である。甲の型は次第に乙の型を侵蝕してゐる。但しこれ等二種の型の背後に在る主要な心的特質には、殆ど差異はない。

英國人の眞の性質を理解しやうと試みるに當つて、或る顯著なる若干の事實を念頭に置いてゐる必要がある。

海——代々海に依つて取圍まれてゐると云ふことは、英國人の內に一種の抑制された理想主義と、一種獨特の不滲透性と冒險的傾向と、放浪の能力と、遠く離れた不便な環境に在つても自足する力とを發達させて來た。

氣候——健康にもよく、決して酷しくもないが、恐らく世界中で最も不確實な、又最も濕氣が多いと謂はれてゐる樣な氣候に、數世紀に亙つて堪へてゐる人は誰れでも、必ずやその人の內に、平衡錘として冷嚴な哲學、挑戰的な氣分、餘儀なくされた生溫い精神を生ずるに相違ない。英國人は、その氣候と同樣に、決して極端に走らない。そして氣候のじめじめした絕間なき變化に對して、彼れは一種の保護的鈍感の衣を着せられる樣になつて來たのである。

---

being sufficient unto himself=自己に對して滿足してゐる。
weathers=be exposed.
a counterbalance of=as a counterbalance. counterbalance は平均を取る爲めの重りを云ふ。
dry philosophy=hard and cold view of life.
be given to=陷入る、耽ける意。

THE POLITICAL AGE OF HIS COUNTRY. This is by far the oldest settled Western power politically speaking. For 850 years England has known no serious military incursion from without; for nearly 200 years she has known no serious political turmoil within. This is partly the outcome of her isolation, partly the happy accident of her political constitution, partly the result of the Englishman's habit of looking before he leaps, which comes, no doubt, from the climate and the mixture of his blood. This political stability has been a tremendous factor in the formation of English character, has given the Englishman of all ranks a certain deep, quiet sense of form and order, an ingrained culture which makes no show, being in the bones of the man as it were.

THE GREAT PREPONDERANCE FOR SEVERAL GENERATIONS OF TOWN OVER COUNTRY LIFE. Taken in conjunction with generations of political stability, this is the main cause of a growing, inarticulate humaneness, of which however the Englishman appears to be rather ashamed.

The other chief factors have been;

THE ENGLISH PUBLIC SCHOOLS.

THE ESSENTIAL DEMOCRACY OF THE GOVERNMENT.

THE FREEDOM OF SPEECH AND THE PRESS (at pres-

---

has known=has experienced.

Taken in conjunction with=If this be considered in conjunction with.

Public School=公立學校ではあるがその課程の內容及び程度は我

英國の政治的年齡——英國は政治上から云へば、遙かに群を拔いて最も古くから安定した西歐强國である。八百五十年來英國は、外國からの重大な軍事的侵入を一度も受けたことがない。殆ど二百年來英國は、國內に於ける重大なる政治的騷擾を一度も經驗したことがない。これは、一部は、英國が大陸から孤立してゐることの結果であり、一部は、英國の政治組織の好運な偶然事でもあり、一部は又、疑もなく氣候と英國人の混血とから生じてゐると思はれる所の、飛躍する前に熟視すると云ふ英國人の習慣の結果でもある。この政治的安定と云ふことが、英國人の性格を形作る上に重大な要素となつて居り、有らゆる階級の英國人に、一種の深い落着いた形式と秩序との觀念、謂はゞ人間の骨の中にあつて、少しも外には見せない一種の拔くべからざる敎養を與へて來てゐたのである。

數代に亙る都市生活の田園生活に對する大なる優越——これを數代に亙る政治的安定と結び合せて考へると、これは益々つのり行く、口には云へない一種の人情味の主なる原因である。但し英國人はこれを以つて、どちらかと云へば稍や恥としてゐるらしい。

この外主なる要素は

英國の中學校。

政府の本質的民主制。

言論及び出版の自由。（現在では少々雲がかゝつてゐる）

國の中學乃至高等學校に當る、大學への準備敎育を主とする所で人格淘冶に重きを置いてゐる。

the essential Democracy=形式的には君主國であるが政治の實際の運用は議會に反映せる國民多數の政治である。

ent rather under a cloud).

THE OLD-TIME FREEDOM FROM COMPULSORY MILITARY SERVICE.

All these, the outcome of the quiet and stable home life of an island people, have helped to make the Englishman a deceptive personality to the outside eye. He has for centuries been licensed to grumble. There is no such confirmed grumbler—until he really has something to grumble at; and then, no one perhaps who grumbles less. An English soldier was sitting in a trench, in the act of lighting his pipe, when a shell burst close by, and lifted him bodily some yards away. He picked himself up, bruised and shaken, and went on lighting his pipe, with the words: "These French matches aren't 'alf rotten."

Confirmed carper though the Englishman is at the condition of his country, no one perhaps is so profoundly convinced that it is the best in the world. A stranger might well think from his utterances that he was spoiled by the freedom of his life, unprepared to sacrifice anything for a land in such a condition. If that country be threatened, and with it his liberty, you find that his grumbles have meant less than nothing. You find, too, that behind the apparent slackness of every arrange-

---

for centuries=for many or some centuries.
when a shell......=and then a shell......
lifted him bodily=lifted his body.
pick oneself up=raise oneself from a fall.

古くから强制的徵兵制度を免かれてゐること。

これ等のものは、凡て島國民の靜かな安定した國內生活より生ずる結果であつて、英國人をば、外部の人の眼には僞瞞的な人格に作り上げることに與つて力のあつたものである。英國人は不平をこぼすことを、これまで數世紀に亙つて免許されてゐる。世の中に英國人の樣な常習的不平家は決してない。——但しそれは何か實際に不平をこぼすべきことが出來るまでのことなのである。そしてそれが出て來た曉には、恐らく英國人程不平をこぼさない人間はあるまい。英國の一兵士が塹壕の中に坐つて、パイプに火を點けてゐた最中に、榴彈がすぐ側で破裂して彼れの身體を數ヤード吹き飛ばした。打撲傷を受け、こづき廻はされながらも身を起して、相變らず煙草に火を點けながら云つた。「この佛蘭西マッチの奴半分駄目になつてゐやがんだわい」と。

英國人は自分の國の狀態に對しては、病膏盲に入つた小言屋ではあるが、併し恐らく誰れも彼れ程に自分の國が世界中で一番よい國だと深く確信してゐる者はあるまい。知らぬ他人が英國人の言葉から、彼れはその生活の自由の爲めに增長させられて、斯樣な狀態の國土の爲めには何物をも犧牲にする覺悟は有つてゐないと推測してもそれは尤もである。處で、さうした國が一度脅かされ、それ共に彼れの自由も脅かされる段になると、諸君は、彼れの不平は全然意味がなかつたことを見られる

---

aren't 'alf rotten=are not half rotten.
Confirmed carper though the Englishman is=Though the Englishman is a confirmed carper.
be spoiled=つけ上つて我儘になつてゐる.

ment and every individual, are powers of adaptability to facts, elasticity, practical genius, a spirit of competition amounting almost to disease, and great determination. Before this war began, it was the fashion among a number of English to lament the decadence of their race. Such lamentations, which plentifully deceived the outside ear, were just English grumbles. All this democratic grumbling, and habit of "going as you please," serve a deep purpose. Autocracy, censorship, compulsion destroy the salt in a nation's blood, and elasticity in its fibre; they cut at the very mainsprings of a nation's vitality. Only if reasonably free from control can a man really arrive at what is or is not national necessity and truly identify himself with a national ideal, by simple conviction from within.

Two words of caution to strangers trying to form an estimate of the Englishman: He must not be judged from his Press, which, manned (with certain exceptions) by those who are not typically English, is too hectic to illustrate the true English spirit; nor can he be judged entirely from his literature. The Englishman is essentially inexpressive, unexpressed; and his literary men have been for the

"going as you please"=being unfettered by regulations. 思ふ存分にやつて行く意。

the salt in a nation's blood=Matt. V. 13 に在る「汝等地の鹽なり」と云つた基督の言葉の the salt を取つたもので、腐敗を防ぐもの、活力を與へるものゝ意。

であらう。更に又、有らゆる設備と、有らゆる個人のさうした表面上の弛みの脊後に、事實に對する順應力と、彈力と、實際的天才と、殆ど病的とまでも思はれる程の競爭心と、大なる決心とが存在をすることをも見られるであらう。今度の戰爭の始まる前には自分達の民族の頽廢を嘆くことが、多數の英國人の間の流行であつた。斯様な嘆聲は外部の人の耳を隨分欺いたものであつたが、これこそ正しく英國式の不平であつたのである。凡てかうした平民的に不平を鳴らすことゝ、「規則に拘泥しない」と云ふ習慣とは深い目的に役立つものである。專制や、檢閲や、强制やは國民の血潮の中にある鹽を破壞し、國民の性格の彈力性を壞はし、國民の活力の中樞發條そのものを切斷するものである。唯だ適度に統制から解放されてゐる場合に於てのみ、初めて人は何が國家的必要であるかないかと云ふことを眞に了解することが出來、從つて胸底からの單純な信念に依つて、眞に自らを國家の理想と一體化することが出來るものである。

外國人で英國人の評價をして見やうとする人達に對して二つの警告がある。その新聞紙から判斷を下してはならない。英國の新聞紙は、(若干の例外はあるが)、類型的には英國人的でない人達が記者となつてゐるので、餘りに興奮的で、到底眞の英國精神を說明するものとはなり得ない。又その文學からも全然批判を下してはならない。元來英國人は本質的には表白もしない、又表白されもしない人間である。そして英國人の文學者は

its fibre=a nation's character.

if reasonably free=if he is reasonably free.

arrive at=understand.

hectic=(slang) exciting, impassioned.

most part sports—Nature's attempt to redress the balance. Further, he must not be judged by the evidence of his wealth. England may be the richest country in the world in proportion to its population, but not ten per cent of that population have any wealth to speak of, certainly not enough to have affected their hardihood; and, with few exceptions, those who have enough wealth are brought up to worship hardihood.

I have never held a whole-hearted brief for the British character. There is a lot of good in it, but much which is repellent. It has a kind of deliberate unattractiveness, setting out on its journey with the words: "Take me or leave me." One may respect a person of this sort, but it's difficult either to know or to like him. An American officer said recently to a British Staff Officer in a friendly voice: "So we're going to clean up Brother Boche together!" and the British Staff Officer replied: "Really!" No wonder Americans sometimes say: "I've got no use for those fellows!"

The world is consecrate to strangeness and discovery, and the attitude of mind concreted in that: "Really!" seems unforgivable till one remembers

---

sport=突然變異の動植物で詰り造物主の戯れの意。

to redress the balance=英國人の非表白的性格を文學者の表白的性格で相殺し埋め合せしやうとの意。

evidence=indication or sign.

enough to have affectedt heir hardihood=瘦我慢を緩和する程の、即ち意志薄弱の徒たらしめる程の。

hold a whole-hearted brief for=argue whole-heartedly in favour of.

これまで大部分は變り種であつた。——これは不平均を直さうと云ふ大自然の企でもあらう。更に英國人の富の徵候から判斷を下してもならない。いかにも英國は、その人口に比例しては、世界中で、最も富んだ國であるかも知れない。併しその人口の一割も、何等云ふに足る程の富は有つてゐないし、況して彼等の瘦我慢に影響を及ぼすに足る程の富は確かに有つてゐない。否さうするだけの富を有つてゐる人達でも少數の例外を除けば、實は瘦我慢を崇拜する樣に育てられてゐる。

私はこれまで決して英國人の性格をば專心辯護しやうと思つたことはない。英國人の性格の中にはよい所も隨分あるが、いやらしい所も澤山ある。それには、一種の故意の無愛想がある。「伴れて行つてくれなきあ、獨りで行く」と云つて旅行に旅立つ樣な。人はかうした種類の人物を尊敬はするかも知れないが、その人を知ることも、又その人を好くこともむづかしい。最近ある米國の士官が一人の英國の參謀將校に、親しい聲で「さあ、一緒に獨逸兵の奴を仕末しに行かうぢやないか」と云つた。參謀將校は「さうですか」と答へた。米國人が時々「俺はあんな奴は要らない」と云ふのも不思議はない。

世の中は不可思議と發見との殿堂である。さればその「さうですか」と云ふ言葉の中に具體化されてゐる心の態度こそは、吾が英米兩國人の心情を區別するものが、事柄よりは寧ろ態度

---

a lot of=much.

repellent=distasteful.

clean up=clear away. 一掃する。

Brother Boche (bɔʃ)=獨逸兵のこと(輕蔑の意を含めて云ふ俗語)。

I've got no use for=I have no use for.

is consecrate to=is consecrated to, is devoted to...... を崇拜する場所だとの意。

that it is *manner rather than matter* which divides the hearts of American and Briton.

In your huge, still half-developed country, where every kind of national type and habit comes to run a new thread into the rich tapestry of American life and thought, people must find it almost impossible to conceive the life of a little old island where traditions persist generation after generation without anything to break them up; where blood remains undoctored by new strains; demeanour becomes crystallised for lack of contrasts; and manner gets set like a plaster mask. Nevertheless the English manner of to-day, of what are called the classes, is the growth of only a century or so. There was probably nothing at all like it in the days of Elizabeth or even of Charles II. The English manner was still racy not to say rude when the inhabitants of Virginia, as we are told, sent over to ask that there might be despatched to them some hierarchical assistance for the good of their souls, and were answered: "D——n your souls, grow tobacco!" The English manner of to-day could not even have come into its own when that epitaph of a Lady, quoted somewhere by Gilbert Murray, was written: "Bland, passionate, and deeply religious, she was second cousin to the Earl of Leitrim; of such is the Kingdom of Heaven."

---

be undoctored=be unadulterated.

the classes=the upper classes.

D——n your souls=Damn your souls. Damn は非常に下等な言葉で口にするのを恥づると云ふ意味から D——n! 或は D——! と云ふ。

であると云ふことを思ひ起すまでは、許すべからざるものである様に思はれる。

諸君の尨大な、而かも未だ半分しか開發されてゐない國は、有らゆる種類の國民の型や習慣が、米國の生活と思想の豐麗な織物に、新しい絲を織り込みに來る所であるが、さうした國に於ては人々が、一つの古い小島國の生活を理解することは、殆ど不可能であることが分るに相違ない。その小島國に於ては傳統はそれを破るものもなく代々持續して居り、血統は新らしい種の混入することもなく續いて居り、動作は比較すべきもののない爲めに結晶して了つて居り、習慣は石膏製のマスクの樣に固まつてゐる。併し猶、今日の英國の習慣、所謂上流階級なるものの習慣は、僅か一世紀そこそこの發達である。エリザベス女王の時代否、チャールズ二世の時代に於てすらも、恐らくこれに類似したものは全然なかつたであらう。曾てヴァージニヤ州の住民が、自分達の魂の爲めに、いくらか宗教的方面の援助をして貰ひ度いと云ふことを本國に申送つた所が「魂なんかどうでもいゝ、煙草でも作れ」と云ふ返事を貰つたさうであるが、その頃には英國の習慣は、粗野と云ふ程ではないが、未だきびきびしたものであつた。ギルバート・マーレーが、何處かで引用してゐた所の一貴婦人の墓碑銘——「柔和にして情に厚く、且つ敬神の念篤き彼女は、レートリム伯爵の又從姉妹なりき。天國はかゝる人のものなり」と云ふあの墓碑銘が書かれた頃にさへも、今日の英國形氣が、固まつてゐたとは、未だ云は

この文は May God damn の省略文である。

of such is the Kingdom of Heaven=Matt. 5. 10. の Blessed are they which are persecuted for righteousness' sake: for *their's is the Kingdom of Heaven.* をもぢつたもの。

系圖

About that gravestone motto you will admit there was a certain lack of self-consciousness; that element which is now the foremost characteristic of the English manner.

But this English self-consciousness is no mere fluffy gaucherie; it is our special form of what Germans would call "Kultur." Behind every manifestation of thought or emotion, the Briton retains control of self, and is thinking: "That's all I'll let myself feel; at all events all I'll let myself show." This stoicism is good in its refusal to be foundered; bad in that it fosters a narrow outlook; starves emotion, spontaneity, and frank sympathy; destroys grace and what one may describe roughly as the lovable side of personality. The English hardly ever say just what comes into their heads. What we call "good form," the unwritten law which governs certain classes of the Briton, savours of the dull and glacial; but there lurks within it a core of virtue. It has grown up like callous shell round two fine ideals—suppression of the ego lest it trample on the corns of other people; and exaltation of the maxim: 'Deeds before words.' Good form, like any other religion, starts well with some ethical truth, but in due time gets commonised, twisted, and petrified till at last we can hardly trace its origin, and watch with surprise its denial

---

fluffy gaucherie (go:ʃri)=soft or light tactless manners.
Kultur (kultuə)=獨逸理想主義の體現形態で單なる culture よりは哲學的に一層深い背景を有つてゐるもの。

れなかつた。諸君は、あの墓碑銘には確かに自意識の缺くる所があることを承認するだらう。そしてこの自意識と云ふ要素こそは、現今英國形氣の第一の特質なのである。

併しこの英國人の自意識は、決して單なる生易しい無調法ではない。それに獨逸人が所謂「文化」と呼び習はしてゐるものの英國人特殊の形態である。英國人は、思想乃至感情の有らゆる表現の背後に、自己の統制を保つて、「自分には、これだけしか感ぜしめない、自分には兎に角、これだけしか表面に現はさしめない」と考へてゐる。この抑制主義は、それが斷乎としてぐらつかされないと云ふ意氣組みに於てはよいが、それが偏狹な見方を養成し、情緒や、天眞の流露性や、率直な同情心を枯死せしめ、溫雅性やその他世人が大づかみに、人格の愛すべき方面として形容し得るものを破壞すると云ふ點に於て惡い。英國人は、自分の頭に浮んだことをその儘口にする樣なことは殆どない。英國人の或る階級を支配してゐる不文律である所の、吾々の所謂「禮義作法」なるものは、味のない氷の樣な人々の氣味がある。併し實はその內に美德の核心が潛んでゐるのである。それは二つの立派な理想——即ち他の感情を害しない爲めの自我の抑制と「言に訥にして行に敏」と云ふ格言の高揚との二つの理想の周圍に硬結した殼の如くに生じて來てゐる。禮儀作法は、他の宗敎の孰れもの樣に、堂々と相當の倫理的眞理に基いて始まつてゐるが、その內に、月並になり、歪められ、化石にされて終には吾々がその淵源をたづねることも殆ど出來なくなり、それが根本觀念を否定し、それと矛盾するのを吾々は

---

trample (or tread) one's corus=hurt one's feeling. 序に愛の trample は Subjunctive Present である。
in due time=よい加減時間が經過すると。

and contradiction of the root idea.

Without doubt, before the war, good form had become a kind of disease in England. A French friend told me how he witnessed in a Swiss Hotel the meeting between an English-woman and her son, whom she had not seen for two years; she was greatly affected—by the fact that he had not brought a dinner-jacket. The best manners are no "manners," or at all events no mannerisms; but many Britons who have even attained to this perfect purity are yet not free from the paralytic effects of "good form"; are still self-conscious in the depths of their souls, and never do or say a thing without trying not to show how much they are feeling. All this guarantees perhaps a certain decency in life; but in intimate intercourse with people of other nations who have not this particular cult of suppression, we English disappoint, and jar, and often irritate. Nations have their differing forms of snobbery. At one time, if we are to believe Thackeray, the English all wanted to be second cousins to the Earl of Leitrim, like that lady bland and passionate. Now-a-days it is not so simple. The Earl of Leitrim has become etherialised. We no longer care how a fellow is born, so long as he behaves as the Earl of Leitrim would have; never makes himself conspicuous or ridicu-

a dinner-jacket=a tailless dress coat で大戰前から若い人達の流行着になつてゐたがそれは英國では所謂 good form に違犯する着物だと見られてゐた。

never do or say......they are feeling=一言一行彼等は必ず自己

驚異の目を以て見る様になるのである。

疑もなく大戰前に於ては、禮儀作法は英國に於て一種の病氣になつてゐたものである。佛蘭西の一友人が、スキスの一客舍で一英國婦人とその息子との會合を目撃した時の模樣を私に話したことがある。その婦人が息子に會つたのは二年ぶりであつて、彼女は非常に感動させられてゐた——但しそれは息子が尾のない燕尾服を着て來なかつたことの爲であつたさうである。抑も最善の作法は「マナーズ」のない、即ち詰り癖のないことなのである。併し、この完全な純粹の域にさへも既に到達してゐる英國人にして、未だ「禮儀作法」の痲痺的影響から免かれてゐない者が多い。即ち彼等の心の奥底に於て未だ自意識的であつて、彼等の感じてゐる程度を人に見せない樣にしやうと努めずには、決して物を爲したり云つたりしないのである。凡てかうした事は、恐らく人生に於て或る一定の禮節を保證するものであらう。併しかうした特殊な抑制宗を有つてゐない他の國民に屬する人々との親しい交際に於ては、吾々英國人は相手に失望せしめ、相手の氣持を惡く、往々にして相手に腹を立てさせる。諸國民はそれぞれ異つた形の氣取根性を有つてゐる。若し吾々がサッカリーを信用するとすれば、曾て英國人は皆、あの柔和にして情に厚き婦人の樣に、レートリム伯爵の又從兄弟でありたがつてゐたものである。當今ではそれはしかく單純ではない。レートリム伯爵は今は靈化されて來てゐる。

吾々は、その男にして、レートリム伯爵がふるまつた樣にふるまふ限り、その男の生れがどうであるかはもう眼中にない。即ちその男が決して自分を目立たせたり、滑稽に見せたりせず、

の感情を或る程度まで隱さうとする。

cult of suppression=宗教的に無條件に抑制を尊重すること。

it is not so simple=の it は英國人の snobbery を指す。

lous, never shows too much what he's really feeling, never talks of what he's going to do, and always "plays the game." The cult is centred in our Public Schools and Universities.

At a very typical and honoured old Public School, he to whom you are listening passed on the whole a happy time; but what an odd life educationally speaking! We lived rather like young Spartans; and were not encouraged to think, imagine, or see anything we learned, in relation to life at large. It's very difficult to teach boys, because their chief object is not to be taught anything; but I should say we were crammed, not taught. Living as we did the herd-life of boys with little or no intrusion from our elders, and they men who had been brought up in the same way as ourselves, we were debarred from any real interest in philosophy, history, art, literature, and music, or any advancing notions [illegible] social life or politics. We were reactionaries almost to a boy. I remember one summer term Gladstone came down to speak to us, and we repaired to the Speech Room with white collars and dark hearts, muttering what we would do to that Grand Old Man if we could have our way. But, after all he contrived to charm us. Boys are not difficult to charm. In that queer life we had all sorts of unwritten

---

"**play the game**"=behave honourably, observe the rules.
he to whom you are listening=I, 講演者自身。
I should say=I should say if I could (permitted), as it were.
Living as we did......=Although we lived......

自分の眞に感じてゐることを決して外に出し過ぎたりせず、自分がしやうと思つてゐることに就いても決して喋り散らしたりせず、そして何時でも「堂々たる振舞をする」限りは、その男の生れはどうでもよい。即ち崇拜は今や吾々の中學校と大學とに集中されてゐるのである。

或る極めて典型的な、非常に尊重せられてゐる古い中學校で私自身は、大體に於て、幸福な時を送つたものである。併し敎育上から云つて、それは何と云ふ奇體な生活であつたらう。吾吾は寧ろスパルタの少年の様な生活をした。そして吾々の學んだ事を少しも、一般人生と關聯して考へたり想像したり見たりする様には奬勵されなかつた。一體少年にものを敎へると云ふことは極めて困難である。何故なれば彼等の目的は、何かを敎へて貰はうといふのではないからである。それでまあ云つて見れば吾々は敎へられたのではなくて、詰め込まれたのである。いかにも吾々は目上の人達からは、(尤も、彼等とても吾々自身と同様に育てられた人達であるが)、それ等からは殆ど何等の侵害をも受けずに、少年の集團生活を送つたにも拘らず、吾々は哲學や、歴史や、美術や、文學や、音樂にいくらかでも眞の興味を感じ、若しくば社會生活なり政治なりに何等か進歩した觀念を抱くことをば全く阻止されて了つたのである。吾々は殆ど一人も殘らず反動家であつた。私は今に覺えてゐるが或る夏季の學期にグラッドストーンが吾々に演說をしに來た。吾々は、白いカラーを着け、暗い心を抱いて、その「老偉人」に對して若し吾々の儘になるなら爲し度いと思ふことをつぶやき乍ら講堂に行つた。併し結局矢張彼れはどうにかして吾々の心を魅し

---

with little or no intrusion=with almost no forcing.
dark hearts=gloomy hearts.
that Grand Old Man=the G. O. M. とも略稱する、Gladstone 翁のこと。

rules of suppression. You must turn up your trousers; must not go out with your umbrella rolled. Your hat must be worn tilted forward; you must not walk more than two abreast till you reached a certain form; nor be enthusiastic about anything, except such a supreme matter as a drive over the pavilion at cricket, or a run the whole length of the ground at football. You must not talk about yourself or your home people; and for any punishment you must assume complete indifference.

I dwell on these trivialities, because every year thousands of British boys enter these mills which grind exceeding small; and because these boys constitute in after life the great majority of the official, military, academic, professional, and a considerable proportion of the business classes of Great Britain. They become the Englishmen who say: "Really!" and they are for the most part the Englishmen who travel and reach America. The great defence I have always heard put up for our Public Schools is that they form character. As oatmeal is supposed to form bone in the bodies of Scotsmen, so our Public Schools are supposed to form good sound moral fibre in British boys. And there is much in this plea. The life does make

---

more than two=は two を含まないが、日本語で二人以上を云へば二人をも含むことになるから三人以上と譯す。

the professional=自由職業者とは醫師辯護士の類を云ふ。

put up for=……の爲めに提出されてゐる、爰では past participle

て了つた。尤も少年と云ふものは魅するのに難しいものではない。さうした奇妙な生活に於ては、吾々は抑制の有らゆる種類の不文律を有つてゐたのである。ヅボンの裾は折り返さなければならぬ。蝙蝠傘を卷いたまゝで外出してはならぬ。帽子は前低くに被らなければならぬ。一定の學年に達するまでは三人以上並んで歩いてはならぬ。又何事に就いても熱狂してはならぬ。但しクリケツトで觀覽席を越えた大ドライヴとか、フツトボールで一擧全野を突破して一點を得たとかの様な無上飛切の事柄に就いては別である。自分自身のことや、自分の宅の人のことを話してならぬ。如何なる罰を受けやうとも全然冷然たる態度を取らねばならぬ。

私がこれ等の些事を詳述するのは、詰り幾千百の英國の少年が極めて細いひき方をする所のこれ等の臼に年々這入つてゐるからである。そしてそれ等の少年が後年に於て、英國の官吏や軍人や、學者や、自由職業の大多數と、實業界の相當大きな部分とを形成するからである。彼等は例の「さうですか」と云ふ所の英國人となる。そしてその大部分は、米國に旅行して來る英國人なのである。私が吾々の中學校の爲めに提唱せられてゐるのをこれまで常に耳にしてゐる大辯護論は、中學校は品性を形作ると云ふことである。オートミールが蘇國人の身體に骨を形作ると想はれてゐる様に、吾國の中學校は、英國の少年に善良にして健全な道德的纎維を形作るものと想はれてゐる。成程この辯明には相當道理がある。斯樣な生活はいかにも少年を、辛棒強い、自恃心のある、濫に怒らない、廉恥心のある人に仕

で前に being がある積りで譯す。

oatmeal=は Scotland の常食で小い時からそれで育てられる所から蘇國人の骨は oatmeal で出來てゐると云ふ輕口がある。

much in this plea=much reason in this plea.

boys enduring, self-reliant, good-tempered, and honourable, but it most carefully endeavours to destroy all original sin of individuality, spontaneity, and engaging freakishness. It implants, moreover, in the great majority of those who have lived it the mental attitude of that swell, who when asked where he went for his hats, replied; "Blank's; is there another fellow's?"

To know all is to excuse all—to know all about the bringing-up of English Public School boys makes one excuse much. The atmosphere and tradition of those places is extraordinarily strong, and persists through all modern changes. Thirty-eight years have gone since I was a new boy, but cross-examining a young nephew who left not long ago, I found almost precisely the same features and conditions. The War, which has changed so much of our social life, will have some, but no very great, effect on this particular institution. The boys still go there from the same kind of homes and preparatory schools and come under the same kind of masters. And the traditional unemotionalism, the cult of a dry and narrow stocism, is rather fortified than diminished by the times we live in.

Our Universities, on the other hand, have lately been but the ghosts of their old selves. At my old

---

original sin=本來は人間の始祖 Adam, Eve の犯した罪が傳つて吾吾人間は誰れも皆罪の子だと云ふ中世記の基督敎神學說に用ゐられてゐる原罪であるが、玆では人間に自然具つてゐる「缺點」(實は美點でもある)のことを云つてゐる。

立てはする。併し斯樣な生活は、個性や、天眞の流露や、愛嬌ある茶目氣分と云ふ凡て祖先傳來の罪をば破壞しやうと、最も周到なる注意を以つて努める。加之、それは、さうした生活を送つた者の大多數者に、彼の氣取屋の心的態度を植ゑ込む。その氣取屋と云ふのは、何處へ帽子を買ひに行くのかと訊かれた時に、「ブランク屋さ、他に店があるのかね」と答へた樣な男のことである。

凡てを知ることは、凡てを赦すことである——即ち英國の中學校の敎育法に就いて凡てを知ることは人に隨分赦す氣を起させるものである。これ等の場所の空氣と傳說とは非常に强いものであつて、近代の有らゆる變化を經て微動だもしない。私が新入生であつた頃から旣に三十八年を經過してゐるが、近頃卒業した年若い甥をよく吟味して見ると、私は殆ど正に同一の特色と狀態であることを見出したのである。大戰は、吾々の社會生活の非常に澤山な部分を變化させたものであるが、この特定の制度の上には、幾分の影響はあつたであらうが、決して非常に大な影響を及ぼしてはゐない。生徒は今日でも尙、同樣な家庭、同樣な豫備校からそこに入學し、同樣な敎師の敎を受けてゐる。そして傳統的非感情主義、乾枯びた偏狹な抑制主義の禮讚は、吾々が現に生活してゐる時代の爲めに減ぜられるよりは寧ろ堅固にされてゐる。

他面吾國の諸大學は、近來その昔の大學の幽靈に過ぎないものとなつてゐる。昨年オツクスフオードの私の元ゐた學部には

---

a swell=(colloq.) a person of smart and fashionable appearance.

Blank's=London か New York の一流の帽子店であらう、始終そこで買ひつけてゐるので他の帽子屋は眼中にないと云つた態度。

preparatory schools=primary schools.

College in Oxford last year they had only two English students. In the Chapel under the Joshua Reynolds window, through which the sun was shining, hung a long "roll of honour," a hundred names and more. In the College garden an open-air hospital was ranged under the old City wall, where we used to climb and go wandering in the early summer mornings after some all-night spree. Down on the river the empty College barges lay stripped and stark. From the top of one of them an aged custodian broke into words: "Ah! Oxford'll never be the same again in my time. Why, who's to teach 'em rowin'? When we do get undergrads again, who's to teach 'em? All the old ones gone, killed, wounded and that. No! Rowin'll never be the same again—not in my time." That was *the* tragedy of the War for him. Our Universities will recover faster than he thinks, and resume the care of our particular 'Kultur,' and cap the products of our public schools with the Oxford accent and the Oxford manner.

An acute critic tells me that Americans hearing such deprecatory words as these from an Englishman about his country's institutions would say that this is precisely an instance of what an American means by the Oxford manner. Americans whose

---

the Joshua Reynolds window=Sir Johua Reynolds (1723—1792) は英國の有名な肖像畫家でその畫の掛つてゐる所の窓をかう呼び慣はしてゐる。

a "roll of honour"=名譽の戰死を遂げた人々の名簿。

who's=who is.

たつた二人の英國學生しかゐなかつた。禮拜堂の中には、日光の射してゐたジョシュア・レイノールヅの窓の下に、百以上もの名を書き連ねた長い戰死者名簿が掛つてゐた。學部の庭には野外病院が舊市の城壁の下に軒を並べてゐた。そこは曾て吾々が、何か徹夜の大浮かれをやつた後、初夏の朝、よく登つて逍遙した所である。下の方の川には、空の學部の船が、船具をはづされて死んだ樣になつて浮んでゐた。その一隻の船首から、年老いた番人が突然云つた「あゝオツクスフオードも俺の生きてる中には、二度と昔に歸ることはあるまい。一體誰れが漕ぐことを敎へると云ふんだ。又學生が這入つて來た時に、誰れがその人達に敎へるのだ、上級生は皆、死んだり、殺されたり、負傷したりなどして了つた。本當に、漕ぐことは二度と昔の樣にはなるまい——俺の一生の中には」。それが彼れに取つては大戰の所謂悲劇であつた。吾國の諸大學は、この番人の考へてゐるよりは速く回復し、そして再び吾々の特殊な「文化」の手入をする樣になつて、吾國の中學校の畑で作つた人間に、オツクスフオード訛や、オツクスフオード式の仕上げをかけることであらう。

銳い批評家は私に告げて云ふ、若し米國人が英國人の口から今言つた樣な自國の學校にけちを附ける言葉を聞けば、それこそ正に米國の所謂オツクスフオード式なるものゝ一例だと云ふだらうと。自國に對する態度が、戀する男のその愛人に對するそれ、若しくば子供のその母に對するそれであるか樣に思はれ

---

undergrads=undergraduates.

'em=them.

gone=前に are が略されてゐる、病死した意。

resume the care=take the charge or protection again.

cap=かぶせてやるの意から仕上をしてやる意。

attitude towards their own country seems to be that of a lover to his lady or a child to its mother, cannot—he says—understand how Englishmen can be critical of their own country, and yet love her. Well, the Englishman's attitude to his country is that of a man to himself; and the way he runs her down is rather a part of that special English bone-deep self-consciousness of which I have been speaking. Englishmen (the speaker amongst them) love their Country as much as the French love France, and the Americans America; but she is so much a part of us that to speak well of her is like speaking well of ourselves, which we have been brought up to regard as impossible. When Americans hear Englishmen speaking critically of their own country I think they should note it for a sign of complete identification with their country rather than of detachment from it. But to return to English Universities: They have, on the whole, a broadening influence on the material which comes to them so set and narrow. They do a little to discover for their children that there are many points of view, and much which needs an open mind in this world. They have not precisely a democratic influence, but taken by themselves they would not be inimical to democracy. And when the War is over they will surely be still broader in philosophy and teaching. Heaven forefend that we should see vanish all that is old, all that has as

---

Heaven forefend=God keeps off. 斷じてならぬ。

る所の米國人は——その批評家は云ふ——英國人がどうして自國に對して惡口を云ひながらも自國を愛し得るのか、到底理解し得ない。いかにも、英國人の自國に對する態度は、男子が自己に對するそれである。英國人が自國をくさす癖は寧ろ、私がこれまで述べて來た、あの英國人獨特の骨にまで徹してゐる自意識の一部なのである。英國人が（かく云ふ論者もその一人であるが）その國を愛する程度は、佛蘭西人が佛蘭西を愛し、亞米利加人が亞米利加を愛する程度と少しも變りはないが、併し英國そのものが吾々英國人の一部分にまでもなつてゐるので、英國のことを讃めて云ふのは、自分のことを讃めて云ふ樣なものであつて、吾々はそんなことは到底爲し得べきものでないと見做す樣に育てられて來てゐる。米國人にして、英國人が自國をこき下ろしてゐるのを聞いた時には、それを以て英國人が自國と分離してゐる徵候と見做すよりは、寧ろ自國との完全なる一心同體觀の徵候と見做すべきであると私は考へてゐる。それはさて措き、英國の大學の話に戻らう。英國の大學は、全體として見れば、非常に型に嵌つた偏狹なものになつてやつて來る新入生に對して廣濶ならしむる影響を與へてゐる。大學はこの世の中に幾多の見方があり、廣濶な心境を必要とするものが隨分多いと云ふことをその新入生の爲めに發見してやるのに、多少資する所がある。大學は必ずしも民主的影響を及ぼすものではないが、併しそれ自體だけを考へれば、民主々義に有害でもあるまい。そして大戰が終つて了つた曉には、大學は必ずや思想に於ても、又教授法に於ても一層博大になるに相違ない。古いものは、謂はゞ蔦蔓の生えてゐるもの、その上に年代を經

---

it were the virginia-creeper, the wistaria bloom of age upon it; there is a beauty in age and a health in tradition, ill dispensed with. But what is hateful in age is its lack of understanding and of sympathy; in a word—its intolerance. Let us hope this wind of change may sweep out and sweeten the old places of my country, sweep away the cobwebs and the dust, our narrow ways of thought, our mannikinisms. But those who hate intolerance dare not be intolerant with the foibles of age; they should rather see them as comic, and gently laugh them out.

The educated Briton may be self-sufficient, but he has grit; and at bottom grit is, I fancy, what Americans at any rate appreciate more than anything. If the motto of my old Oxford College: "Manners makyth man," were true, I should often be sorry for the Briton. But his manners don't make him, they mar him. His goods are all absent from the shop window; he is not a man of the world in the wider meaning of that expression. And there is, of course, a particularly noxious type of travelling Briton, who does his best, unconsciously, to take the bloom off his country wherever he goes. Selfish, coarse-fibred, loud-voiced—the sort which thanks God he is a Briton—I suppose because nobody else will do it for him!

---

ill dispensed with=棄てれば惡いと云ふ意。

mannikinism=mannikin girls から來たもの、表面を取り繕ふことを理想とすること。

た藤の花の咲いてゐるものは皆、これを消滅させやうと云ふ樣なことは斷じてしてならない。古いものには棄て難い美があり、傳統には棄て難い健全な所がある。併し古いものゝ厭ふべき點は、その理解と同情との缺如、一言にして云へばその不寬容にある。希くば今度の變化の大風が、吾が英國の古い場所を、掃除し淸めて、蜘蛛の巣や塵芥を、即ち吾々の偏狹な考へ方や、吾々の人形主義を一掃する樣になり度いものである。が併し不寬容を憎む人達は古い物の欠點に對しても敢て不寬容であつてはならぬ。彼等は寧ろ、古い物の欠點をば宜しく喜劇として見、穩かに一笑にすべきである。

教育ある英國人は或は自惚が强いかも知れないが、彼等には骨がある。結局、米國人が値打を兎も角も最もよく理解するものは、この骨だらうと想ふ。若しもオックスフオードの私の出身學部の「作法は人を作る」と云ふ標語が眞實であるとすれ、私は英國人の爲めに屢々殘念に思ふ者である。併し實を云ふと人の作法はその人を作らない。却つてその人を害ふものである。その人の商品は皆、店の窓から無くされてゐる。彼れは、比較的廣い意味に於ける世なれた人ではないのである。無論旅行する英國人には一種特別な有害な型の人がある。彼れは到る處で自分の國の美點を そぐことに、知らず識らず全力を盡してゐるのである。即ち利己的で、神經の粗大な、聲の高い男である——自ら英國人たることを有り難く思つてゐる類の人物——蓋し他に誰れも彼れの爲めに有り難く思つてくれるものがないからのことであらう。

---

grit=(slang) the strength of character.

makyth=make の古體。

goods=美點と長所との兩方の意味を有たせてある。

We live in times when patriotism is exalted above all other virtues, because there have happened to lie before the patriotic tremendous chances for the display of courage and self-sacrifice. Patriotism ever has that advantage as the world is now constituted; but patriotism and provincialism of course are pretty close relations, and they who can only see beauty in the plumage of their own kind, who prefer the bad points of countrymen to the good points of foreigners, merely write themselves down blind of an eye, and panderers to herd feeling. America is advantaged in this matter. She lives so far away from other nations that she might well be excused for thinking herself the only country in the world; but in the many strains of blood which go to make up America, there is as yet a natural corrective to the narrower kind of patriotism. America has vast spaces and many varieties of type and climate, and life to her is still a great adventure.

I pretend to no proper knowledge of the American people. It takes more than two visits of two months each to know the American people; there is just one thing, however, I *can* tell you: You seem easy, but are difficult to know. Americans have their own form of self-absorption; but they appear to be free as yet from the special com-

write themselves down=record themselves as.
blind of an eye=一方は盲目、即ち物事の一面しか見へない、偏狭な。

吾々は今や、愛國心が他の有らゆる美德以上に高揚されてゐる時代に生活してゐる。何故なれば偶然にも愛國者の前に、勇氣と犧牲獻身とを見せる非常な好機會が存することになつて來てゐるからである。世界が現在の組織である限り。愛國心には何時でもさうした有利な點がある。併し愛國心と地方的感情とは無論かなり密接な關係を有つてゐる。自分達の同類の羽毛にしか美を見得ない人達、外國人の美點よりは自國人の缺點の方を優れりとする人達は、唯だ自らを片盲目であり、群衆感情に囚はれたる者として銘を打つのに過ぎない。米國はこの事に於ては有利である。米國民は他の諸國民とは極めて遠く離れて生活してゐるので、自ら世界に於ける唯一の國と考へても、そこに充分の言譯も立ち得る譯であるが、併し米國を構成してゐる所の幾多の血統の中には、まだ、比較的偏狹な愛國心に對する自然の矯正劑が存在してゐる。米國は廣大な場所と、樣々な型と氣候を有つてゐるので、米國民に取つて人生は今尙一大冒險である。

私は米國民に就いて敢て充分な智識を有つてゐるとは決して思はない。米國人を知るのには、二ケ月位宛の訪問を數回しなければならない。併し私が諸君に云ひ得ることが唯だ一つある。即ち諸君を知ることは容易な樣で、實は難しいと云ふことである。米國人には米國人獨特の自分の事に夢中になるところはある。併し彼等は、歐洲大陸に於ける無數の競爭や戰爭が、過去數世紀に亘つて英國人に强制して來た所の、特殊な競爭的

panderer to=those who minister to.
strain of blood=血統。
adventure=運よく行けば大成功を齎らすもの。

petitive self-centrement which has been forced on Britons through long centuries by countless continental rivalries and wars. Insularity was driven into the very bones of our people by the generation-long wars of Napoleon. A Frenchman, André Chevrillon, whose book: "England and the War" I commend to anyone who wishes to understand British peculiarities, justly, subtly studied by a Frenchman, used these words in a recent letter to me: "You English are so strange to us French; you are so utterly different from any other people in the world." It is true; we are a lonely race. Deep in our hearts, I think, we feel that only the American people could ever really understand us. And being extraordinarily self-conscious, perverse, and proud, we do our best to hide from Americans that we have any such feeling. It would distress the average Briton to confess that he wanted to be understood, had anything so natural as a craving for fellowship or for being liked. We are a weird people, though we look so commonplace. In looking at photographs of British types among photographs of other European nationalities, one is struck at once by something which is in no other of those races—exactly as if we had an extra skin; as if the British animal had been tamed longer than the rest. And so he has. His political, social, legal

---

generation-long 約三十年。
And being...... = And as we are......
weird = incomprehensible.

自己中心の傾向には、未だ囚はれてゐない様である。島國根性は、一代に亙る奈翁戰爭の爲めに、英國人の骨の中にまでも打ち込まれた。アンドレ・シエヴリヨンと云ふ佛蘭西人の書いた「英國と大戰」と云ふ書物は、私が、佛蘭西人の手で公平に精緻に硏究された英國人の特質を理解したいと云ふ人には誰れにでも推薦してゐるものであるが、彼れが最近私に寄せた手紙の中でかう云つてゐた。「君達英國人は、吾々佛蘭西人に極めて不可思議である。君達は世界の他の如何なる國民とも全然類を異にしてゐる」と。いかにもその通りである。吾々は類のない民族である。想ふに、吾々は胸の奥に深く、苟も眞に吾々を理解し得る者は、唯だ米國人あるのみと感じてゐる様である。而かも吾々は、並はづれて自意識強く、剛腹で、且つ自尊心が強いので、吾々に少しでもさうした感じのあることを米國人に見せない様にと最善を盡してゐる。自分を理解して貰ひたいと云ふこと、即ち仲間が欲しい、好かれたいと云ふ慾求の様な極めて自然的なものを自分が抱いてゐると云ふことを自白することは、普通の英國人には迷惑であらう。吾々は極めて平凡に見へるが、實は掴み所のない國民である。他の歐洲の諸國民の寫眞の間で狹まつてゐる英國型の人間の寫眞を見てゐると、直ちに歐洲民族の他の孰れにもない或る物に氣が付く——正に吾々には餘分な皮膚でもあるかの樣な、英國の動物は他國のそれよりもずつと以前から馴されてゐると云つた様な、さうした感じがする。そして又事實さうでもあつたのである。英國の政治的、

And so he has = and, in fact, he has been tamed longer than the rest.

life was fixed long before that of any other Western country. He was old before the *Mayflower* touched American shores and brought there avatars, grave and civilised as ever founded nation. There is something touching and terrifying about our character, about the depth at which it keeps its real yearnings, about the perversity with which it disguises them, and its inability to show its feelings. We are, deep down, under all our lazy mentality, the most combative and competitive race in the world, with the exception perhaps of the American. This is at once a spiritual link witn America, and yet one of the great barriers to friendship between the two peoples Whether we are better than Frenchmen, Germans, Russians, Italians, Chinese, or any other race, is of course more than a question; but those peoples are all so different from us that we are bound, I suppose, secretly to consider ourselves superior. But between Americans and ourselves under all differences there is some mysterious deep kinship which causes us to doubt, and makes us irritable, as if we were continually being tickled by that question: Now am I really a better man than he? Exactly what proportion of American blood at this time of day is British, I know not; but enough to make us definitely cousins—always an awkward relationship. We see in Americans a sort of image of ourselves; feel near enough,

avatar=梵語から來たもので「化身」「權化」のこと。

社會的、法律的生活は、他の孰れの西歐諸國のそれよりもずつと前に確定されたものである。英國は、メーフラワー號が米國の海岸に着いて、そこに、これまで國を建て者にない程眞面目で且つ開けた理想家達を齎らした以前に、既に古い國であつた。吾々の性格に就いては、自分の本當の憧憬を隱して置く深さに就いては、その憧憬に假面を被せる剛腹さと、その感情を示す無能力とに就いては、人を感動せしめ人を驚かせる物がある。吾々は、心の奧底、凡て吾々の不活潑な心性の奧では、世界中で、恐らく米國人を除けば、最も鬪爭的な競爭的な民族である。これが、米國との精神的連鎖でもあり、而かも同時に兩國民間の友情に對する大なる障碍の一つでもあるのである。吾々が果して、佛蘭西人や、獨逸人や、露西亞人や、伊太利人や、支那人や、その他如何なる民族よりも優れてゐるかどうかは、無論問題以上の問題ではあるが、併しそれ等の國民は皆、吾々とは非常に異つてゐるので、吾々が心私かに自らを優越してゐると考へるのも當然である樣に私には想はれる程である。然るに米國と吾々との間には、有らゆる相異の下に、何か一種神秘的な深い親類關係があつて、それが、恰も吾々が絕えず「さて自分は眞に彼れよりも優れた人間だらうか」と云つた樣なさうした疑問で擽られてゞもゐるかの樣に、吾々に疑を起させて、吾々をいらいらさせるのである。今日此頃、果して米國人の血の正確に何分が英國人の血であるかは無論私は知らない。併し吾々をして確かに從兄弟たらしむるに足る位の分合はある——尤も從兄弟と云ふものは何時でも仕末の惡い親類關係ではあるが。吾々は米國人の中に、一種の自己の像を見てゐる。相異點

at once=at the same time.

yet far enough, to criticise and carp at the points of difference. It is as though a man went out and encountered, in the street, what he thought for the moment was himself; and, decidedly disturbed in his self-love, instantly began to disparage the appearance of that fellow. Probably community of language rather than of blood accounts for our sense of kinship, for a common means of expression cannot but mould thought and feeling into some kind of unity. Certainly one can hardly overrate the intimacy which a common literature brings. The lives of great Americans, Washington and Franklin, Lincoln and Lee and Grant are unsealed for us, just as to Americans are the lives of Marlborough and Nelson, Pitt and Gladstone, and Gordon. Longfellow and Whittier and Whitman can

---

account for=be responsible for, explain the cause of.

can hardly overrate=can hardly estimate too high.

Robert Edward Lee (1807—1870)=南北戰爭の時の南軍の總司令官。

Ulysses Simpson Grant (1822—1885)=これは北軍の總師で、南北戰爭後二回大統領に選擧された、世界漫遊の途次我國にも立寄つたことがある。

just us to Americans are the lives......=just as the lives......are unsealed to Americans.

Marlborough (the first Duke of) (1650－1722).=原名は John Churchill で (70) 年 Marlborough の侯爵に封ぜられた有名な將軍.

Horatio Nelson=Trafalgar の海戰で有名な The First Viscount Nelson のこと。

Willlam Pitt (1759—1806). 父 William Pitt (the first Earl of Chatham) と共に有名な政治家で、父子共に宰相となつたが、子の方は大陸に奈翁を相手として活躍しただけ有名である。それに年僅かに二十

を批評し惡口が云へる位に近かくて、而かも遠い感じがする。それは恰度、人が外出して、街頭で、彼れが寸時と自分自身ではないかと思ふ樣な人に出會はし、明かに自分の自愛心を攪き亂されて、即刻その男の風采をこき下ろし始める樣なものである。恐らく血液の共同と云ふことよりは寧ろ言語の共同と云ふことが、吾々の血緣感の起る所以であらう。何故なれば、共通な發表手段は、思想及び感情を、或種の統一の型に嵌めずには置かないからである。共通の文學が齎らす所の親密感は、確かに如何程高く見積つても先づ間違はあるまい。偉大なる米國人、ウオシントンとフランクリンや、リンカンとリーとグランドやの生涯が吾々に少しも分らぬ所がないのは、恰度マールバローとネルソンや、ピツトとグラツドストーンや、ゴルドンやの生涯が米國人に分らぬ所がないのと同じである。ロングフエローとウイツチヤーとウイツトマンとは、英國の子供でも恰度

四で大英國の宰相となり、十七年の長い間内閣の首班であつたと云ふレコードを有つてゐる。

William Ewart Gladstone (1809—1898).=その殆ど九十年の長い生涯を政治家として始終した人で、四度大英國宰相の印綬を帶び、the Gland Old Man 或は The Great Commoner として朝野から敬重された自由黨の政治家。

Charles George Gordon (1833—1885).=“Chinese Gordon” 或は “Gordon Pasha” と稱ばれてゐる英國の將軍で、支那の洪秀全の長髮賊反亂の時英軍を率ゐて「Ever-Victorious Army」の名を博し、後 Nubia の Khartum で土軍の爲めに殺された人格高き軍人。

Longfellow=前出。

Whittier=前出。

Walt (or Walter) Whitman=1819 年五月卅一日 New York 州、Long Island の West Hills に生れ、1892 年三月二十六日 New Jersey 州、Camden で死んだ米國近代の詩人で “Leaves of Grass” や “Democratic Vistas” 等は有名である。

Robert Burns=1759 年一月二十五日 Scotland の Alloway に生れ、1796 年七月二十一日 Dumfries で死んだ有名な田園詩人。

be read by the British child as simply as Burns and Shelley and Keats. Emerson and William James are no more difficult to us than Darwin and Spencer to Americans. Without an effort we rejoice in Hawthorne and Mark Twain, Henry James and Howells, as Americans can in Dickens and Thackeray, Meredith and Thomas Hardy. And, more than all, Americans own with ourselves all literature in the English tongue before the *Mayflower* sailed; Chaucer and Spenser and Shakespeare, Raleigh, Ben Jonson, and the authors of the English Bible Version are their spiritual ancestors as much as ever they are ours. The tie of language is all-powerful—for language is the food formative

---

Percy Bysshe Shelley=1792 年八月四日英蘭 Sussex の Field Place に生れ、1822 年七月八日伊太利の Bay of Spezia で船遊中船が顚覆して溺死した有名な耽美派の詩人である。

John Keats=17 5 年十月二十九日ロンドンに生れ、1821 年二月二十三日羅馬で客死した有名な耽美派の詩人で Shelley などとも親交があつた。

Emerson=前出。

William James 米國 Harvard 大學の心理學哲學の教授でその認識論 Pragmatism は我國にも輸入された思想である。

Charles Darwin 說明するまでもなく進化論を打ち建てた生物學者。

Herbert Spencer 進化論を哲學に入れて大な綜合哲學を組織した英國の哲學者。

Hawthorne 前出。

Mark Twain 米國近代の有名な Humorist.

Henry James William James の兄で小說家批評家であるが、弟が哲學を小說の如く讀ませたのに對して彼れは小說を哲學をの如く考へさせると謂はれてゐる程內部描寫の深い作家である。

William Dean Howells 米國近代の小說家詩人であるが他方彼れは Venice 駐在の米國領事であつたり、雜誌の主幹をしたり、相當實際社會にも活動した人。

バーンズとシエリーとキーツと同樣に無造作に讀むことが出來る。エマーソンとウイリヤム・ジエームズが吾々に取つて困難でないのは、ダーウインとスペンサーが米國人に取つて困難でないと同じである。吾々が骨を折らずに、ホーソンとマーク・ツエン、ヘンリ・デエームズとハウエルズとに悅びを感ずるのは、恰度米國人がデツケンズとサツカリー、メレディスとトマス・ハーディーに悅を感じ得るのと同樣である。否、それ處ではない、米國人は、メーフラワー號の航海よりも以前に英語で書かれた有らゆる文學を、吾々と共有してゐる。即ちチヨーサーとスペンサーとシエクスピーヤや、ロレーやベン・チヨンソンや、英譯聖書の譯者やは、吾々の精神的祖先であると同樣に米國人の精神的祖先でもある。言語の紐帶は全能である——何故なれば言語は精神を構成する所の食物である

Charles Dickens 英國十九世紀前半期を飾る偉大なる小說家で說明するまでもあるまい。

William Makepeace Thackeray Dickens と相並んで當時の英國文壇に文名を馳せた小說家。

George Meredith 英國十九世紀後半期の偉大なる小說家、詩人。

Thomas Hardy 現在我國に最も親まれてゐる小說家劇作家でその作品は相當澤山紹介されてゐる。

Edmund Spenser 1552 年頃ロンドンに生れ、1599 年一月三十日同所で死んだ有名な詩人で、"Faerie Queene" や "The Shepherd's Calendar" などは博く喧傳されてゐる。

Sir Walter Raleigh 1552 年 Devonshire の Hayes に生れ、1618 年十月二十九日ロンドンで死刑に處せられた人で詩人でもあるが、宮廷の大官として殖民地經營者として又海軍司令官としてより多く活動した、彼れは Spenser を Elizabeth 女王に紹介した人である。

Ben (本名 Benjamin) Jonson 1573 年頃 Westminster に生れ、1637 年八月六日に死んだ有名な劇作家で沙翁と時代を同くしてゐたが餘り親しくもなかつた樣である。

the authors of the English Bible Version=Johnson Wyclif (1324—1384) や Miles Coverdale (1488—1568) や Thomas Bentham (1513—1578) 等を指したもの。

of minds. Why! a volume could be written on the formation of character by literary humour alone. It has, I am sure, had a say in planting in American and Briton, especially the British townsman, a kind of bone-deep defiance of Fate, a readiness for anything which may turn up, a dry, wry smile under the blackest sky, an individual way of looking at things, which nothing can shake. Americans and Britons both, we must and will think for ourselves, and know why we do a thing before we do it. We have that ingrained respect for the individual conscience, which is at the bottom of all free institutions. Some years before the War, an intelligent and cultivated Austrian who had lived long in England, was asked for his opinion of the British. "In many way," he said, "I think you are inferior to us; but one great thing I have noticed about you which we have not. You think and act and speak for yourselves." If he had passed those years in America instead of in England he must needs have pronounced the very same judgment of Americans. Free speech, of course, like every form of freedom, goes in danger of its life in war time. In 1917 an Englishman in Russia came on street meeting shortly after the first revolution had begun. An Extremist was addressing the gathering and telling them that they were fools to go on fighting, that they ought to refuse

a volume could be written on=if I would が省略されてゐる積りで譯す、一巻の書物になる程澤山材料があるとの意。
have a say=發言權があると云ふ意味から譯文の樣な意となる。

からである。無論、文學上の氣持に依つて性格が形作られることに就いてだけでも書かうと思へば一卷の書物が書ける。それは確かに、米國人と英國人、殊に英國の都會人に、運命に對する一種の骨にまで徹してゐる挑戰的氣持や、どうならうと直ちにそれに應ずるだけの覺悟や、如何に暗い空の下にあつても冷然と微苦笑をしてゐることや、何物も動かすことの出來ない獨自の物の見方を植ゑ付けることに與つて力があつたと私は確信してゐる。米國人も英國人も共に、吾々は、自分獨りで考へること、及び或る事を爲す前には先づ何故にそれを爲すかを知ることを必要とし、又事實常にさうしてゐる。吾々は個人の良心に對するさうした牢乎として拔くべからざる尊重心を有つてゐる。そしてこの尊重心こそは有らゆる自由なる制度の根柢に存ずるものである。大戰の起る數年前のことであるが、長らく英國にゐた或る聰明にして敎養ある墺國人が、英國人に就いての意見を徵された。彼れの云ふには、「僕は、幾多の方面で君達は吾々よりも劣つてゐると考へてゐるが、一つ吾々の有つてゐない大切な事が君達に具つてゐることに氣が付いてゐる。君達は自分獨りで考へ、獨りで行ひ、獨りで物を云つてゐる」と。若しも彼れがそれ等の年月を、英國に於てゞはなくて、米國に於て過ごしたとしても彼れは必ずや、米國人に就いて正に同一の判斷を下したに相違ない。言論の自由なるものも無論、有らゆる形式の自由の如く戰時にはその生命が危くなるものである。一九一七年露西亞にゐた一英國人が、第一革命の始まつた直後、街頭の集會に偶然出會した。一人の過激派の者が、群衆に呼び掛けて、彼等が戰爭を繼續するのは馬鹿である、彼等は宜しく

the first revolution 1917 年三月革命のこと、現勞農革命はその年の十月革命に依つて成立したものである。

and go home, and so forth. The crowd grew angry, and some soldiers were for making a rush at him; but the Chairman, a big burly peasant, stopped them with these words: "Brothers, you know that our country is now a country of free speech. We must listen to this man, we must let him say anything he will. But, brothers, when he's finished, we'll bash his head in!"

I cannot assert that either Britons or Americans are incapable in times like these of a similar interpretation of "free speech." Things have been done in my country, and perhaps in America, which should make us blush. But so strong is the free instinct in both countries, that it will survive even this War. Democracy, in fact, is a sham unless it means the preservation and development of this instinct of thinking for oneself throughout a people. "Government of the people by the people for the people" means nothing unless the individuals of a people keep their consciences unfettered, and think freely. Accustom the individual to be nose-led and spoon-fed, and democracy is a mere pretence. The measure of democracy is the measure of the freedom and sense of individual responsibility in its

---

"Government of the people by the people for the people"＝これは 1863 年六月三日南北戰爭に於て北軍が決定的勝利を得た Gettysburg (四日間の戰鬪に北軍の死傷者 2,3186人、南軍 3,1621人であつたと云ふ) 戰死者記念式を同年十一月九日同所に於て擧げた時に爲した大統領 Abraham Lincoln の演說中の "That this nation, under God, shall have a new births of freedom, and that *government of the people, by the people, and for the people*, shall not perish from the earth." から來た有

戰爭に行くことを拒絕して歸鄉すべきであるなどゝ云つた樣なことを演說してゐた。群衆は憤激して來た。そして數名の兵士はその男を目掛けて正に突擊しやうとしてゐた。處が司會者である大きな圖體の倔强な一農民はかう云つて彼等を止めた「兄弟よ、知つての通り吾々の國は今や言論の自由な國である。吾々はこの男の云ふことを聽かなければならぬ。吾々は彼れに思ふことを何でも云はしめなければならぬ。併し兄弟よ、彼れが話を終へた時には、吾々は彼れの頭を打碎かうではないか」と。

私は、英國人でも米國人でもこれに類する時代にも、「言論の自由」に就いてこれと同樣の解釋を下し得ないとは、斷言し得ない。私の國に於いては、又恐らく米國に於ても、吾々をして冷汗をかゝせる樣な事が隨分行はれて來てゐる。併し自由の本能は、兩國に於ては極めて强烈であるので、今度の大戰を經てもそれは滅びることはあるまい。民主々義なるものも、若しそれが國民全體を通じて、自分獨りで考へるこの本能の保存と發達と云ふことを意味するのでなければ、事實上喰はせ物なのである。「人民の爲めにする人民に依つて行はるゝ人民の政治」と云ふことも、若し國民の個々人が、その良心を無拘束に保持して自由に考へることがなければ、畢竟無意味なのである。若し個人を鼻で引き廻はされ、匙で食はせられる樣に習慣附けるならば民主々義も單なる見せかけの口實に過ぎない。民主々義の

名な句であるが、それは曾て Daniel Webster が 1830 年一月二十六日元老院に於て政敵 Robert Young Hayne に對する答辯の中で "The people's government, made for the people, made by the people, and answerable to the people" と云つたのを取つて、一層簡潔な力强い表現に變へたものである

measure＝extent or quantity.

humblest citizens. And democracy is still in the evolutionary stage.

An English scientist, Dr. Spurrell, in a recent book, "Man and his Forerunners," thus diagnoses the growth of civilisations: A civilisation begins with the enslavement by some hardy race of a tame race living a tame life in more congenial natural surroundings. It is built up on slavery, and attains its maximum vitality in conditions little removed therefrom. Then, *as individual freedom gradually grows,* disorganisation sets in and the civilisation slowly dissolves away in anarchy. Dr. Spurrell does not dogmatise about our present civilisation, but suggests that it will probably follow the civilisations of the past into dissolution. I am not convinced of that, because of certain factors new to the history of man. Recent discoveries have so unified the world, that such old isolated successful swoops of race on race are not now possible. In our great Industrial States, it is true, a new form of slavery has arisen (the enslavement of men by their machines), but it is hardly of the nature on which the civilisations of the past were reared. Moreover, all past civilisations have been more or less Southern, and subject to the sapping influence of the sun. Modern civilisation is essentially

And democracy......evolutionary stage=これに依つて觀ると民主々義は尙未だ幼稚であるとの意。

its maximum vitality=文明の生活力の最高潮。

anrchy=無政府狀態と譯した、が實は無政府ばかりでなく一切の統制、一切の秩序のない狀態のことである。

程度如何はその公民の最下層者に於ける自由と個人的責任感との程度如何である。そして民主々義は今尙進化の段階に在る。

英國の科學者スパレル博士は、近著「人間とその先驅者」の中で、文明の發達を次の樣に診斷してゐる。即ち文明は、比較的快適な自然的環境の中でおとなしい生活を送つてゐるおとなしい民族が、或る頑强な民族に依つて奴隷にされることから始まる。文明は奴隷制度の上に築かれるものであつて、奴隷制度から餘り離れない狀態に於て、その最大限度の活力に到達する。それから、個人の自由が漸次發達するに從つて、分解作用が始まる。そして、文明は徐々に崩壞し去つて無政府狀態に這入ると云ふのである。スパレル博士は、吾々の現文明に就いては、獨斷してゐないが、恐らく現文明も過去の諸文明の跡を辿つて崩壞するだらうと云ふことを暗示してゐる。私は、人間の歷史にこれまで存在してゐなかつた所の或る新要素の存在するの故を以つて、この說には服しない。最近の諸發見は、世界を非常に統一化して了つたので、昔の樣に、或る民族が或る民族の上に單獨に突然襲ひかゝつて成功する樣なことは、今日では不可能である。成程、今日の諸々の大產業國に於ては、一つの新形式の奴隷制度が起つて來てゐる（即ち人々が自分達の機械の爲めに奴隷にされてゐること）。併し、それは過去の諸文明が打建てられた基礎とは殆ど性質を異にしてゐる。加之、過去の諸文明は凡て、多かれ少かれ南方のものであつて、從つて太陽の徐に破壞し行く影響を蒙つてゐた。ところで、近代文明は本質的に

swoop=鷲などが餌物の上に空中から舞ひ下りること。

of the nature on which......=of the same nature as the one on which......

Southern=羅馬の文明、希臘の文明、埃及の文明、その他古代文明は皆歐洲南部乃至アフリカ、アジヤに起つた文明である。

Northern. The individualism, however, which according to Dr. Spurrell, dissolved the Empires of the past, exists already, in a marked degree, in every modern State; and the problem before us is to discover how democracy and liberty of the subject can be made into enduring props rather than dissolvents. It is, in fact, the problem of making democracy genuine. If that cannot be achieved and perpetuated, then I agree there is nothing to prevent democracy drifting into an anarchism which will dissolve modern States, till they are the prey of pouncing Dictators, or of other States not so far gone in dissolution—the same process in kind though different in degree from the old descents of savage races on their tamer neighbours.

Ever since the substantial introduction of democracy, nearly a century and a half ago with the American War of Independence, I would point out that Western Civilisation has been living on two planes or levels—the autocratic plane with which is bound up the idea of nationalism, and the democratic, to which has become conjoined in some sort the idea of internationalism. Not only little wars, but great wars such as this, come because of inequality in growth, dissimilarity of political institutions between States; because this State or that is

---

Northern＝源流は羅馬希臘等にあるとしても、その文明を採つて近代の文明を建設したものは Germania 民族である。

substantial＝practical.

は北方のものである。個人主義は、スパレル博士に依れば、過去の諸帝國を分解したものであるが、併しそれは、有らゆる近代の國家に、既に著しい程度に於て存在してゐる。それで吾々の當面の問題は、如何にすれば臣民の民主々義と自由とが分解劑ではなくて却つて恒久的の支柱となる樣に爲され得るかと云ふことを發見することである。それは實は、民主々義を眞正のものとなす問題である。若しもそれが成し遂げられ永續されることが出來ない場合には、その時こそは私も、民主々義が漂流して近代諸國家を分解する所の無政府主義となり、遂には鷲の如く掴みかゝる獨裁者か、乃至は分解作用のそれ程まで進んでゐない處の國家かの餌食となり了ること——即ち野蠻民族がその比較的おとなしい隣邦に對して爲したあの昔の襲來とは、程度の差こそあれ、種類に於ては同一な過程をば防止すべきものは何にもないと云ふ意見に贊成する者である。

殆ど一世紀半以前米國の獨立戰爭と共に、民主々義が事實上採用されて以來、西歐文明は二つの平面乃至水平線上に生きて來てゐることを私は指摘し度い。——それは國家主義の思想と結び付いてゐる所の專制主義的平面と、或る程度までは國際主義の思想に結合することになつて來てゐる所の民主々義的平面とである。啻に小さな戰爭ばかりでなく、今度の樣な大戰爭にしても、諸國家間の發達の不平均、政治上の諸制度の不同性の爲めに起るものである。即ち、どれかこれかの國がその生存の

---

in some sort＝to a certain extent.

because this State or that＝の because は前の come にかゝつてゐる。this State or that は「どこかの國が」の意。

asing its life on different principles from its neighbours.

We fall into glib usage of words like democracy and make fetiches of them without due understanding. Democracy is certainly inferior to autocracy from the aggressively national point of view; it is not necessarily superior to autocracy as a guarantee of general well-being; it might even turn out to be inferior unless we can improve it. But democracy is the rising tide; it may be dammed or delayed but cannot be stopped. It seems to be a law in human nature that where, in any corporate society, the idea of self-government sets foot it refuses ever to take that foot up again. State after State, copying the American example, has adopted the democratic principle; and the world's face is that way set. Autocracy has, practically speaking, vanished from the western world. It is my belief that only in a world thus uniform in its principles of government, and freed from the danger of pounce by autocracies, have States any chance to develop the individual conscience to a point which shall make democracy proof against anarchy, and themselves proof against dissolution; and only in such a world can a League of Nations to enforce peace succeed.

---

fall into=get into the habit of.

glib usage=何の考もなしにすらすらと用ゐること。

make fetiches of them=それ等を fetishes にする、fetish (or fetiche) は野蠻人の庶物崇拜の對象物で、皆無生物を神として禮拜するのであるが、玆では唯だ make idols of them 位の意。

基礎を、その隣邦とは異つた原則の上に置いてゐるからのことである。

我々は民主義と云つた樣な言葉を口に委せて用ゆる癖が付いて、然るべき理解もなしにそれ等の言葉をば偶像視してゐる。元來民主々義は侵略的國家主義の見地から見れば、確かに專制主義よりも劣つてゐる。又それは、一般國民の福祉の保證としても、必ずしも專制主義に優つてゐるとは云はれない。否若し我々にしてそれを改善することが出來なければ、福祉の保證としてそれは、事に依ると專制主義よりも劣つてゐることになる恐れさへもある。併し民主々義は上げ潮である。それは或は堰かれ、延期されることは出來るかも知れないが、差し止めることは到底出來ない。如何なる政治團體に於ても、自治の思想が一度足を踏み入れた所では、それはその足を決して再び拔かうとはしないと云ふのが、人間性の法則であるらしい。諸國家は米國の範を採つて、續々民主的原則を採用して來た。世界はさうした方向に向つて進んでゐる。專制主義は、事實上西歐の社會からは消滅して了つたのである。斯くその政治の原則に於て一樣になり、專制政治の爲めに攫ばれる危險もなくなつた世界に於てこそ初めて、諸國家は、民主々義をして無政府狀態に陷らざらしめ、國家自體をして崩壞に到らしむる程度にまで個人の良心を發達せしめ得る見込も立つ譯であり、斯樣な世界に於てこそ初めて、平和を强制すべき國際聯盟も成功し得る譯であると云ふのが私の信念である。

---

turn out to be=prove to be.

corporate society=society forming a body politic. 政治體を構成する社會。

the world's face......set=世界は皆その方向に向いてゐる。

make proof against=......の爲めに侵されない狀態にする。

But though we have now secured a single plane for Western civilisation and ultimately, I hope, for the world, there will be but slow and difficult progress in the lot of mankind. And for this progress the solidarity of the English-speaking races is vital; for without that there is but sand on which to build.

The ancestors of the Amesican people sought a new country, because they had in them a reverence for the individual conscience; they came from Britain, the first large State in the Christian era to build up on the idea of political freedom. The instincts and ideals of our two races have ever been the same. That great and lovable people the French, with their clear thought and expression, and their quick blood, have expressed those ideals more vividly than either of us. But the phlegmatic tenacity of the English and the dry tenacity of the American temperament have ever made our countries the most settled and safe homes of the individual conscience. And we must look to our two countries to guarantee its strength and activity. If we English-speaking races quarrel and become disunited, civilisation will split up again and go its way to ruin. The individual conscience is the heart of democracy. Democrary is the new order; of the new order the English-speaking nations are

---

lot=destiny or condition.
sand=unstable ground の意。
the heart=the vital part.

併し我々が今日、西歐文明に對して——そして私は究極は全世界に對してと云ふことにもなるだらうと思ふが——單一平面を獲得したとしても、人類の狀態には、徐々たるそして困難な進步しかないであらう。そしてこの進步の爲めには英語を話す諸民族の連帶と云ふことが大切なのである。何故なれば、それなくしては、建設すべき基礎は砂しかないからである。

米國人の祖先は新しい國を求めた。何故なれば、彼等はその胸に、個人の良心に對する崇敬心を抱いてゐたからである。彼等は、基督紀元以來最初の大國をば政治的自由の觀念に基いて築き上げる爲めに英國から來たのである。我々兩民族の本能と理想とは、爾來常に同一である。彼の偉大にして愛すべき國民である佛蘭西人は、その明晰な思想と表現、及びその鋭敏な氣性を以つて、その理想をば我々の孰れより一層生々と表現してゐる。然るに英國人の氣質の鈍重な固執性と、米國人の氣質の淡々たる固執性とは、我々の國をして常に個人の良心の最も落着いた、安全な棲家たらしめて來たのである。そして我々は、個人の良心の力と活動とを保證することをば、吾々兩國に對して期待しなければならない。若し我々英語民族が抗爭して不和になつたならば、文明は再び分裂して、破滅への途を辿るであらう。個人の良心は民主々義の心臟なのである。民主々義は新

---

the ballast=船の安定を保つ爲めに船底に入れる砂囊若しくは砂利。玆では新秩序の安定を保たしむるもの。

the ballast.

I don't believe in formal alliances, or in grouping nations to exclude and keep down other nations. Friendships between countries should have the only true reality of common sentiment, *and be animated by desire for the general welfare of mankind* We need no formal bonds, but we have a sacred charge in common, to let no petty matters, differences of manner, divergencies of material interest, destroy our spiritual agreement. Our pasts, our geographical positions, our temperaments make us beyond all other races, the hope and trustees of mankind's advance along the only line now open—democratic internationalism. It is childish to claim for Americans or Britons virtues beyond those of other nations, or to believe in the superiority of one national culture to another; they are different, that is all. It is by accident that we find ourselves in this position of guardianship to the main line of human development; no need to pat ourselves on the back about it. But we are at a great and critical moment in the world's history—how critical, none of us alive will ever realise to the full. The civilisation slowly built since the fall of Rome has either to break up and dissolve into jagged and isolated fragments through a century of revolutions and wars; or, unified and reanimated by a single idea, to move forward on one plane and attain greater

---

that is all＝それだけで他に意味はない。
no need to......＝there is no need to......する必要は少しもない......

秩序の底荷であり、英語國民は實にその新秩序なのである。

私は、形式上の同盟や、他の國民を排除し抑へ付ける爲めに數國民を一團とすることには信頼しない。國と國との間の友誼は共通感情と云ふ唯一の眞の實在を有つべきでありそして人類一般の福祉に對する慾求に依つて鼓舞さるべきものなのである。我々は何等形式的紐帶を必要としない。併し我々は、些々たる事柄や、習慣の差違や、物質的利害の相違をして、我々の精神的一致を破壞せしめないだけの神聖なる責任を共通に有つてゐる。我々の過去の經歷や、我々の地理的位置や、我々の氣質は我々をして、凡ての他の民族以上に、只今開かれてゐる唯一の方向に即ち民主的國際主義の途に、沿うて進み行く人類の進歩の希望と信頼とをつなぐ者たらしめてゐる。米國人なり英國人なりに、他の諸國民の美德以上の美德があると主張することとか、若しくは一國民の文化を他の國民の文化よりも優れたるものと信ずることは稚氣を帶びゐる。彼等は互に相違してゐる。それだけのことである。吾々が、斯く人間の發達の主なる方向の保護者たるの位置にあると云ふことは實は偶然の事なのである。それに就いて何にも自惚れるには當らない。併し吾々は世界の歷史に於ける一大危期に際會してゐる——それが果して如何程危急であるかは、現存せる吾々の誰れもが完全には理解しない所であらう。羅馬の滅亡以來徐々に築き上げられて來た文明は必然的に、一世紀に亙る革命と戰爭とに依つて瓦壞してぼろぼろの離れ離れな斷片に分解するか、或は或る單一の觀念に依つて統一され、再び力附けられて、一平面上を前進し高さと廣さとを更に增す樣になるか、その孰れかでなければなら

するに及ばない。

[library stamp]

height and breadth.

Under the pressure of this War there has often been, beneath the lip-service we pay to democracy, a disposition to lose faith in it, because of its undoubted weakness and inconvenience in a struggle with States autocratically governed; there has even been a sort of secret reaction towards autocracy. On those lines there is no way out of a future of bitter rivalries, chicanery, and wars, and the probable total failure of our civilisation. The only cure which I can see, lies in democratising the whole world, and removing the present weaknesses and shams of democracy by education of the individual conscience in every country Good-bye to that chance, if Americans and Britons fall foul of each other, refuse to make common cause of their thoughts and hopes, and to keep the general welfare of mankind in view. They have got to stand together, not in aggressive and jealous policies, but in defence and championship of the self-helpful, self-governing, 'live and let live' philosophy of life.

Who would not desire, rushing through the thick dark of the future, to stand on the cliffs of vision—two hundred years, say—hence—and view this world?

---

pat cneself on the back=自己を褒める。
Good-bye to that chance=さうした機會にもおさらばである、そうなる見込は永遠にない。
fall foul of=come into collision.

ない。

吾々が民主々義に對して空念佛を唱へてゐる口の下で、專制的に支配されてゐる國家との鬪爭に於ては民主々義に疑ふべくもない弱點と不便とがある所から、世間にはこれまで屢々今度の大戰の壓迫の爲めに、それに對する信仰を失はんとする傾向があつた。否、專制政治への一種の內密の反動さへもあつたのである。かうした方向に於ては、激烈なる抗爭や、術策や、戰爭や、最後には恐らく現文明全體の潰滅と云ふ樣な未來の運命から免れる途は全然ない。私の見得る唯一の救治策は全世界を民主化し、そして有らゆる國に於て個人の良心を敎育することに依つて民主々義の現在の弱點と粉飾とを除き去ることに存する。若しも英米兩國人が互に衝突し、彼等の思想及び理想上に於て相提携して常に一般人類の福祉を念頭に置くことを拒否するならば、さうした機會は永遠に去る。彼等は、侵略的排他的政策に於てゞはなく、自助的、自治的、「共存共榮」的の人生觀の擁護と主張とに於て相提携して立たなければならない。

未來の暗澹たる闇黑を走り拔けて、今後の——例へば二百年後の——見通しの出來る斷崖の上に立つて、この世界を大觀することを誰れか望まないものがあらうか。

---

make common cause=共同の立場(主張)をする。
championship=先頭に立つて主張すること。
'live and let live'=自分も生き人をも生かしむる、即ち共存共榮。

Will there then be this League for War, this caldron where, beneath the thin crust, a boiling lava bubbles, and at any minute may break through and leap up, as of late, jet high? Will there still be reek and desolation, and man at the mercy of the machines he has made; still be narrow national policies and rancours, and such mutual fear, that no country dare be generous? Or will there be over the whole world something of the glamour that each one of us now sees hovering over his own country; and men and women—all—feel they are natives of one land? Who dare say?

The guns have ceased fire and all is still; from the woods and fields and seas, from the skeleton towns of ravaged countries the wistful dead rise, and with their eyes question us. In this hour we have for answer only this: We fought for a better Future for Mankind!

Did we? Do we? That is the great question. Is our gaze really fixed on the far horizon? Or do we only dream it; and have the slain no comfort in their untimely darkness; the maimed, the ruined, the bereaved, no shred of consolation? Is it all to be for nothing but the salving of national

---

this League for Was=The League of Nations が平和の爲めの聯盟であるのに對して、戰爭の爲めの聯盟であるかの觀を呈してゐる現國際關係を皮肉つたもの。

this caldron=地獄の大釜のこともあるが、玆では League for War の同格。

Who dare say?=今後戰雲依然として棚引くかそれとも平和の光遍

さうした曉にも、この主戰聯盟は——即ち薄い地殼の下には沸き立ちかへる熔岩が泡立つて居り、いつ何時地殼を破つて先達の樣に飛び出して中空高く噴出するかも知れないこの大釜は存するであらうか。さうなつても尙依然して硝煙と荒廢と、自分の作つた機械の手に翻弄されてゐる人間とが存するだらうか。さうなつても尙依然として偏狹なる國家政策と遺恨と、如何なる國と雖も敢て鷹揚であり得ない樣な相互的恐怖心が存するであらうか。それとも又、現在吾々各自が自分の國の上に高く漂つてゐるのを見てゐる魅力に滿ちた或る物が全世界を光被し、男も女も皆が自ら單一の國土の里人であると感ずる樣になるだらうか。誰れか敢て斷言し得やう。

砲火は熄んで萬籟寂としてゐる。森から、野から、海から、又荒廢に歸した國の形骸計りの都市から、思ひ惱める死者は頭を擡げて、その眼に物云はせて吾々に訊く。差當り今の處吾々は答としてはこれだけしか有つてゐない。即ち吾々は人類のよりよき未來の爲めに戰つたのだと。

果して吾々はその爲めに戰つたのか。果してその爲めに戰ふのか。これこそ大問題である。吾々の眼は眞に遙かなる地平線に注がれてゐるのか。それとも吾々は唯だそれを夢想してゐるのか。そして殺された者はその時ならぬ冥路の闇の中で何の慰安をも與へられず、不具にされた者、落魄させられた者、愛する者を奪はれた者も、一片の慰籍すらも與へられないのか。これ等は皆國家的誇示慾を滿足させる外何の役にも立つぬことに

く照らすかは誰れも斷言し得ないとの意。

with their eyes question us=口はないから眼で吾々に問ふ。「俺等は何の爲めに死んだのか」と云つた樣なことを問ふ。

in their untimely darkness=その天壽ならぬ死出の闇路で。

be for nothing=何の爲めにもならぬ。

the saving=和げること、一部分滿足させること。

prides? And shall the Ironic Spirit fill the whole world with his laughter?

The house of the Future is always dark. There are few cornerstones to be discerned in the Temple of our Fate. But, of these few, one is the brotherhood and bond of the English-speaking races; not for narrow purposes, but that mankind may yet see Faith and Good Will enshrined, yet breathe a sweeter air, and know a life where Beauty passes, with the sun on her wings.

We want in the lives of men a "Song of Honour," as in Ralph Hodgson's poem:

"The song of men all sorts and kinds
As many tempers, moods and minds
As leaves are on a tree,
As many faiths and castes and creeds
As many human bloods and creeds
As in the world may be."

In the making of that song the English-speaking races will assuredly unite. What set this world in motion we know not; the Principle of Life is inscrutable and will for ever be; but we do know, that Earth is yet on the upgrade of existence, the mountain top of man's life not reached, that many centuries of growth are yet in front of us before

Ironic Spirit＝人間の不運不幸を從ぶ妖精。
shall fill＝will let fill.
Ralph Hodgson＝英國の相當有名な詩人で、五十前後の人である。

なつてゐるのか。そして皮肉の妖精をしてその嘲笑を以て全世界を滿たさしめるであらうか。

「未來の家」は何時でも暗黑である。吾々の「運命の殿堂」に於て認められ得べき礎石は僅かしかない。併し、それ等僅少のものゝ中の、その一つは英語民族の友愛と紐帶とである。それは偏狹なる目的の爲めではなくて、人類がまだ信頼と善意との奉安されあるのを見得る爲め、人類がまだ、もつと快き空氣を吸ひ、美の女神がその翼に太陽を乘せて通り過ぎる樣な生活を知り得る爲めなのである。

吾々は人々の生活に於て、ロルフ・ホヂスンの詩にある樣な、「譽の歌」を要求してゐる。曰く

「有らゆる類の人々の歌、
木の葉の樹に生える程にも多き
樣々な氣質や氣持や心の、
世の中にあり得る限りの
樣々な信仰や階級や主義の
樣々な民族や育ちの人々の歌。」

さうした歌を作ることには、英語民族は確かに一致するであらう。一體この世界を動かしてゐるものゝ何であるかは吾々は知らない。人生の原理は測り知るべからざるものでもあり、又永遠にさうでもあらう。併し吾々は、地球は未だ存在の登坂の途中であり、人間の生活の山頂は未だ達せられてゐないと云ふこと、「時」がこの遊星を冷却して、終に空間にも一つの月を浮

Romantic な詩風ではあるが極めて醇な高い味を有つてゐる。先年來東北帝國大學文學部に聘せられて英文學を講じてゐる。

Time begins to chill this planet, till it swims, at last, another moon, in space. In the climb to that mountain top, of a happy life for mankind, our two great nations are as guides who go before, roped together in perilous ascent. On their nerve, loyalty, and wisdom, the adventure now hangs. What American or British knife would sever the rope?

He who ever gives a thought to the life of man at large, to his miseries, and disappointments, to the waste and cruelty of existence, will remember that if American or Briton fail in this climb, there can but be for us both, and for all other peoples, a hideous slip, a swift and fearful fall into an abyss, whence all shall be to begin over again.

We shall not fail—neither ourselves, nor each other. Our comradeship will endure.

---

neither ourselves, nor each other= 吾々自身でも失敗せず又お

動せしむるに至るまでには、吾々の前途に尚幾世紀にも亘る發達があると云ふことだけは知つてゐる。人類の幸福なる生活のその山頂への攀登に於て吾々米英の二大國民は、危險な登りに綱で互に結び合つて先頭を行く所の先達の如きものである。この冒險は今や兩國民の氣力と忠實と、智慧との上にかゝつてゐる。如何なる米國乃至英國のナイフがその綱を切斷するだらうか。

苟も、一般人間の生活に、彼等の不幸と失望とに、生存の浪費と殘忍とに思を馳せる人は、若しも米國人か英國人かがこの攀登に失敗するならば、我々兩國民に取つては、從つて又他の有らゆる國民に取つては恐ろしい足滑りとなり、深淵の中に急速度の恐るべき墜落となり、そしてその深淵から萬事もう一度遣り直すことになる外はあり得ないと云ふことを記憶するであらう。

我々は失敗はしない。我々自身にも又お互にも、決してしくじりはしない。我々の戰友關係は永續するであらう。

互に相手を失敗せしめもしないとの意。

III

FROM A SPEECH AT THE LOTUS CLUB, NEW YORK

I wonder whether you in America can realise what an entrancing voyage of discovery you represent to us **primeval** Anglo-Britons. I prefer that term to Anglo-Saxon, for even if we English glory in the thought that our seaborne ancestors were extremely blood-thirsty, we have no evidence that they brought their own women to Britain in any quantities, or had the power of reproducing themselves without aid from the other sex!

Can you, I say, realise how much more enticing to my English mind America is, than the Arabian Nights were to your fascinating fabulist, O. Henry? One longs to unriddle to oneself the significance

primeval [praimí:vəl]＝元からの、他國の風に染まない。
prefer A to B＝B よりも A を取る。
glory in＝be proud of.
reproduce onself＝自己を再生產する、生殖する。
Anglo-Briton－**Anglo-Saxon**＝佛蘭西の Brittany 地方の民族の一分派が既に英國に定住してゐた所へ五世紀から Teuton 民族の一派である Angles が同族の Saxons や Jutes や Friesians と一緒に英國に移住して先着の Britons と混合したのが現在の Anglo-Saxon である。併し講演者の考ではその名稱は新移住者の Anglo-Saxons と混血した先着の Britons の要素――而かも重要な要素を現はしてゐないから寧ろ Anglo-

第三

紐育ロータス倶樂部に於ける講演抄

我々昔ながらのアングロ•ブリトン人に、諸君が何と云ふ魅惑的な發見航海を見せてくてゐるかと云ふことは、米國に居る諸君に果して本當に分かるかどうか知らと私は思つてゐる。私はアングロ•ブリトンと云ふ言葉が、アングロ•サクソンと云ふ言葉よりもよいと思つてゐる。何故ならば、我々英國人は、我々の海を渡つて來た祖先が、極めて殺伐であつたと云ふことを考へて誇りを感じてはゐるが、併し彼等が英國に同族の女を多少でも伴れて來たとか、乃至は女性の助けを借りずに生殖する能力を有つてるたとかと云ふことの證據を我々は一つも有つてゐないからである。

今も云ふ通り、諸君は、英國育ちの私の心に、米國と云ふものがどれ程魅惑的であるか、それは「アラビヤ夜話」が諸君の魅力ある小說家オー•ヘンリーに魅惑的であつたよりも、どれ程甚しいかを、果して本當に理解することが出來るであらうか。人

Briton と云つた方がよいと云ふのである。
I say＝as I said. 話が岐路に入つたので改めて繰り返して念を押す心持。
my English mind＝英國育ちの私の心。
O. Henry＝(1862—1910) 米國近代一流の小說家で前半生は數奇なる暗黑の生涯であつたが刑餘の人たるを隱して、自ら西南部地方の一牧夫たりしと僞稱して盛に小說を書いた、中頃からは都市の社會相の描寫に盛名を博した人氣作家である。彼れは少時 "Arabian Nights" に魅せられたと云はれてゐる。
unriddle to oneself＝自分に謎となつてゐるものを解く。

and sense of America. In the English-speaking world to-day we need understanding of each others' natures, aims, sympathies, and dislikes. For without understanding we become doctrinaire and partizan, building our ship in compartments very water-tight, and getting into them and shutting the doors when the ship threatens to go down.

We English have a reputation for self-sufficiency. But speaking for myself, who find no name that is not English in my genealogy, I never can get up quite the interest in my own race that I can in others. We English are so set and made, you Americans are yet in the making. We at most experience modification of type; you are in process of creating one. I have often asked Americans: What is now the American type? and have been answered by—a smile. When I go back home my countrymen will ask me the same question. I would I could sit down and listen to you telling me what it is.

It will not have escaped you, at all events, that for four years the various branches of the English-speaking peoples have been credited with all the virtues—a love of liberty, humanity, and justice has, as it were, been patented for them on both

---

For without understanding......= 大意は一旦危急に際會すると自國の利害のみを考へて他國がどうならうと知らぬ顔をするとの意。
get up=make rise, produce 起す、催す。
that I can in others=that I can get up in other nations.
at most=at best.
experience=undergo.

は米國と云ふものゝ意義を自分の頭にはつきりさせたいと希つてゐる。今日の英語を話す社會に於ては。我々はお互の性質や目的とするものや、同情するものや、嫌惡するものに就いて理解し合ふことを必要とする。何故なれば、理解なくしては、我々は空論家となり、黨派根性を有つ様になり、我々の船を極めて嚴密な防水區劃に仕切つて、船が沈沒せんとする氣配が見へる際には、その中に這入つて戸を閉める様になるからである。

我々英國人は自惚が强いので有名である。併し私自身だけのことを云へば、——私の系圖には英國以外の人の名前は一つもないのだが——私は、他の民族に對して感じ得るだけの關心を私自身の民族には決して感じ得ない。我々英國人は非常に固まつて出來上がつてゐるが、諸君米國人は未だ出來かゝりである。我々はせいぜいの處、型の修正を受ける位のものであるが、諸君は型を創造する途中である。私はこれまで屢々米國人に「現在アメリカタイプと云ふのは何か」と訊ねて、唯だ微笑を以つて答へられたことがある。私が本國に歸へつた時には私の國の人達も同様の質問を私に發することであらう。私は出來るならば、ゆつくり腰を下ろして、諸君がその何たるかに就いて御話して下さるのを拜聽したいものだが。

兎に角、過去四年間に英語國民の様々の分派が有らゆる美德を有つてゐると思はれて來たこと——即ち自由や、人道や、正義やを愛するの念は大西洋の兩岸に於ても、南方十字星座の下に於ても謂はゞ彼等の專賣特許になつて來て、今日では人がそ

---

answer by——a smile=返事に困る時にニヤニヤ笑ふ、笑つて答へずと云つた場合である。
I would I could=I wish I could. 事實出來ないので殘念だと云ふ意味を含む。
what it is=アメリカ•タイプの何であるか、アメリカ•タイプなるもの。
be credited with=......であると云ふ信用を博する。

sides of the Atlantic, and under the Southern Cross, till one has come to listen with a sort of fascinated terror for those three words to tinkle from the tongue. I am prepared to sacrifice a measure of the truth sooner than pronounce them to-night. Let me rather speak of those lower qualities which I think we English-speaking peoples possess in a conspicuous degree: Commonsense and Energy. From those vulgar attributes, I am sure, the historian of the far future will say that the English-speaking era has germinated; and that by those vulgar attributes it will flourish. Deep in the American spirit and in the English spirit is a curious intense realism—sometimes very highly camouflaged by hot air—an instinct for putting the finger on the button of life, and pressing it there till the bell rings. We are so extraordinarily successful that we may expect the historian of the far future to write: 'The English-speaking races were so rapid in their subjugation of the forces of Nature, so prodigal of inventions, so eager in their use of them, so extremely practical, and altogether so successful, that the only thing they missed was—happiness.'

When I read of some great new American in-

---

under the Southern Cross=濠洲のこと。

sacrifice......pronounce= それ等を口にするよりは寧ろ多少眞實を犠牲にする、事實に忠實であれば當然云はなければならぬがとの意。

hot air=(slang) excited or boastful talk.

れ等三つの言葉が舌の先からりんりんと響き出るのをば、一種の魅せられたる恐怖心を抱いて傾聽する様になつて來てゐることは、諸君も見逃さなかつた所であらう。尤も今夜は私は事實を多少犠牲にしてもこの三つの言葉は云はない覺悟である。寧ろ私は我々英語國民が際立つた程度に有つてゐると私には考へられる比較的低級な特質、即ち常識と精力とに就いてお話しやう。遠き未來の歴史家は必ずや云ふであらう、英語時代なるものゝ發芽して來たのは、實にこれ等の卑俗な屬性からであり、それが花を開くのも實にこれ等の卑俗なる屬性の爲であると。アメリカ魂の底に深かく、又イギリス魂の底にも深かく、妙な强烈な現實主義が存してゐる。——尤も時には大言壯語で極度に僞裝されてゐることもあるが。——詰り人生のボタンに指を當てゝ鈴がなるまでそれを押してゐやうとする本能なのである。我々は極めて異常な成功を贏ち得てゐるので、遠き未來の歴史家は多分かう書くものと思つてゐてよい。曰く「英語民族はその自然力の征服に於ても極めて急速であり、發明も極めて澤山であり、その發明品を利用することに於ても極めて熱心であり、極端に實際的であり、且つ全體から見て非常に成功してゐたので、唯だ一つ彼等が求めて得なかつたものは實に幸福の一事に過ぎなかつた」と。

私が、米國の何か或る偉大なる新發明の記事なり、或はレヴ

---

an instinct for putting......= 成功するまで何時までも執拗に執着する本能のこと。

altogether=on the whole.

miss=fail in one's object.

vention, or of a Lord Leverhulme converting an island of Lewis into a commercial Paradise, I confess to trembling. Gentlemen, it is a melancholy fact that the complete man does not live by invention and trade alone. At the risk of being laughed out of Paradise, I dare put in a plea for Beauty. Both our peoples, indeed, are so severely practical that I do feel we run the risk of getting machine-made, and coming actually to look down on those who give themselves to anything so unpractical as the love of Beauty. Now, I venture to think that the spirit of the old builders of Seville cathedral: 'Let us make us a church such as the world has never seen before!' ought to inspire us in these days too. 'But it does, my dear Sir.' I shall be answered: 'We make flying machines, and iron foundries, Palace hotels, stock-yards, self-playing pianos, film pictures, cocktails, and ladies' hats, such as the world has never seen before. A fig for the Giralda,

---

a Lord Leverhulme=a certain Lord Leverhulme. Viscount Leverhulme は英國有名な事業會社 Lever Brothers and Company の社長で未だ貴族に列せられない以前には國會議員となつたこともあるが、この人が 1918 に蘇國の西方海上に在る Hebrides 群島の一つである the Isle of Lewis を買ひ占めて一大商港を作らうとしたことがある、心ある人はこの名勝の地を俗化することに反對した。

the complete man does not......=Matt. 4. 4 の "Man shall not live by bread alone" を作り更へたもの。

be laughed out of Paradise=be laughed out of court (法廷で一笑に附せられて問題とされない)をもぢつたもので、Paradise は a commercial Paradise である。

put in a plea for=法廷に抗訴を提起する。即ち無視されてゐる「美」の爲めに抗訴する。

do feel=feel の emphatic form.

ヲーハルム卿なる人がリユーキス島を變じて一つの商業的樂園を作らうとする計畫なりを新聞で讀む時に、私は實は身慄をすることを白狀する。諸君、完全なる人間は、發明と商賣とのみで生活するものでないと云ふことは、實に憂鬱なる事實である私は、一笑に附せられて樂園から追はれる危險を冒して、敢て玆に「美」の爲めに抗訴を提起する。英米兩國民共に實は餘りに甚しく實際的なので、私は、我々が次第に機械製となり、苟も「美」の愛と云つた樣な非實際的なものに夢中になつてゐる人達を本當に馬鹿にする樣になる虞がある樣な氣持が事實する程である。どうも私には、昔セヴィルの大伽藍を建築した人達が「世界にこれまでなかつた樣な敎會堂を我々に造らうではないか」と云つたあの精神は、現代に於ける我々をも亦鼓舞すべきものであると考へられる。これに對して人はかう答へるだらう。「御尤であるが、事實さうしてゐるのではないか。我々は飛行機や、製鐵所や宮殿式のホテルや、家畜集散場や、自働ピアノや、活動寫眞や、コクテーイルや、婦人帽など、これまで世界になかつたものを作つてゐる。ヒラルダや、スフィンクス

---

machine-made=hand-made に對して粗製品のことを云ふ。

look down on=despise.

give oneself to=devote oneself to, or addict to.

I venture to think=I should think.

Seville cathedral=Spain 一流の商業都市 Seville の町にある大伽藍で第十五世紀に建てられたものである、今日でも尙ほ昔ながらの雄大と壯麗とを保つてゐる。

But it does=But it inspires us.

stock-yards=大規模の家畜の取引及び屠殺を行ふ場所。

self-playing=automatic.

cocktails=ウイスキーやブランデーやジンなどを基にして苦酒や砂糖を加へた混合酒。

A fig for......=I don't care a fig for......の意で、......はつまらない、無價値だと云ふ意。

the Sphynx, Shakespeare, and Michael Angelo! They did not elevate the lot of man. We are for invention, industry, and trade.' Far be it from me to run down any of those things, so excellent in moderation; but since I solemnly aver that man's greatest quality is the sense of proportion, I feel that if he neglects Beauty (which is but proportion elegantly cooked)—the 'result of perfect economy' Emerson had it—he sags backwards, no matter how inventive and commercially successful he may be.

But this is to become grave, which is detestable, even in a country which has just been taking its ticket for the Garden of Eden.

I believe I shall yet see (unless I perish of public speaking) America taking the long cut to Beauty—for there are no short cuts to Her, no cheap nostrums by which she can be conjured from the blue. Beauty and Simplicity are the natural anti-

---

the Giralda [hiːrálda]=giralda は西班牙で人間の彫像の風見のことを云ふが、固有名詞として用ゐられた場合は前出 Seville の大伽藍の鐘樓のこと、それには信仰の女神の像が風見として附いてゐるからである、有名な建築物で紐育の Madison 公園に在る塔はそれを模したものである。

the Sphynx=有名な埃及の Gizeh に在る巨像。

Michael Angelo [maikəlánjelo]=1475—1564. 有名な伊太利の畫家彫刻家、建築家、詩人。

be for=be eager for, long for の意。

Far be it from me to......=On any account would I never...... 私は如何なることがあつても決して......する積はない、......し度くない。

run down=くさす、けなす。

the result of perfect economy=收支の釣合の取れた狀が經濟であるが、凡ての力と形とが釣合つた狀態は、總て美だと云ふ人道主義的經濟學の見方である。

や沙翁や、ミケランヂエロなどが何になる。それ等は人間の狀態を向上せしめはしなかつた。我々は發明と、產業と、商賣とを熱望する」と。いかにも私は、これ等のもの丶孰れをもくさす樣な氣は毛頭ない。それ等は孰れも程合さへよければ誠に結構なものである。併し私は人間の最大の特質は均衡の感であると厳肅に斷言する者であるが故に、若しも人間にして美を（それは要するに優雅に料理された均衡たるに過ぎない）—— エマースンの云つた「完全なる經濟の成果」たる美を——等閑視するならば、如何に彼れは發明力に富み、商業的に成功してゐやうとも、彼れは退步してゐると私は感ずる。

併し、これは眞面目に重々しくなることであつて、恰度今エデンの園へ入る入場券を買つてゐる樣な國に於てすらも、忌むべきことである。

私は、他日自分が、米國は「美」に至る廻り路をしてゐることを悟る樣になるだらうと信じてゐる（私が講演の爲めに死にさへしなければ）—— 何故なれば「美」に至る近路は一つもない。即ち青空から「美」を呼び下し得る安價な妙藥は一つもな

Emerson had it=Emerson expressed it.

sag backwards=drift backwards.

no mather how inventive=however inventive.

even in a country......=米國の樣な國と云ふ意。

the Garden of Eden=人類の始祖A dam, Eve のゐた樂園であるが玆では全盛時代黃金時代位の意。

(unless I perish......) 命あらば（米國に藝術の花の開くの見られるらだう）位の輕い諧謔。

America taking the long cut to Beauty=直ちに美の生產と享樂とに行かないで、先づ金を作り富を積んでから美に向つて行くと云つた迂廻路のこと。

by which......from the blue=それに依つて美が天空から魔術で呼び下され得る所の、即ち美は安價な手段では得られるものではないとの意。

dotes to the feverish industrialism of our age. If only America will begin to take them freely she has it in her power to re-inspire in us older peoples, just now rather breathless and exhausted, the belief in Beauty, and a new fervour for the creation of fine and rare things. If on the other hand America turns Beauty down as a dangerous 'bit of fluff' and Simplicity as an impecunious alien, we over there, one behind the other, will sink into a soup of utilitarianism so thick that we may never get out.

Gentlemen, I long to see established between the English-speaking peoples a fellowship, not only in matters political and commercial, important as these are, but in philosophy and art. For after all those laughing-stocks, philosophy and art—the beautiful expression of our highest thoughts and fancies—are the lanterns of a nation's life, and we ought to hang them in each others' houses.

---

industrialism＝人間の活動を産業——資本主義的營利主義的產業に集中し凡ての價値の標準を物質的富の生產に置く遣り方。

turn down＝reject.

bit of fluff＝パッと爆裂して消えるもの、拙いが假に花火と意譯して置いた。

sink into a soup＝fall into difficulties. 深田に足を入れると云つた樣な意。

utilitarianism＝the greatest happiness of the greatest number（最

いからである。美と單純性とは、現代の熱病的產業主義に對する天然の解毒劑である。若しも米國がこれ等の解毒劑を惜氣もなく服用し初めさへすれば、恰度今幾分氣息奄々として力も盡き果てゝゐる我々舊國の國民の胸に、「美」の信仰と、美しく稀なる物の創造に對する新なる熱情とを再び皷舞することは、米國の能くする所である。若しも之れに反して米國が、美を危險な花火として、單純を貧乏な異邦人として退けるならば、海の彼方に居る我々は、次から次へと、功利主義と云ふ恐らく決して出ることの出來ない程、濃いスープの中に沈んで行くであらう。

諸君、私は英語國民の間に、啻に政治的及び商業的事物に於てばかりでなく、——尤もそれも重要ではあるが、——哲學や藝術に於ても亦、協力の成立せんことを熱望してゐる。何故なれば、色々と笑草にはされるものゝ、結局哲學と藝術とは——我々の最高の思想と空想との美しい表現である——哲學と藝術とは、國民生活の燈籠であつて、我々は宜しくお互の家の內にそれ等を掛くべきであるからである。

大多數の最大幸福）を善の標準とする倫理說で英國の Bentham や Mill 父子の唱道したものであるが、茲では左程深い意味でなく、唯だ物質的利益の奴隸になること位の意。

after all those laughing-stocks＝如何に笑ひ物にされても、如何に輕んぜられても。

lantern＝提燈と云へば日本語では提燈持ちと聯想され、燈籠と云へば盂蘭盆と聯想されて困るが、詰り國民生活を照す光明の意である。

IV

FROM A SPEECH TO THE SOCIETY OF ARTS AND SCIENCES, NEW YORK

I do not know what your chief thought is now; for me the overmastering thought is that of Creation —Re-creation. You know when we look at a bit of moorland where the gorse and heather have been burned—swaled we call it in Devon—how we delight in the green, pushing up among the black shrivelled roots. I long to see the green pushing up, the creative impulse at work in its thousand ways all over the world again; each of us on both continents in his own line doing creative work; and not so much that wealth and comfort, as that health and beauty may be born again.

But, confronting as I do to-night, the Arts and Sciences, let me divide my words. You sciences have no need to listen. You have never had such a heyday as this; in engineering, in chemistry, in surgery, in every branch except perhaps 'star-

---

swaled=burned.
Devon=Devonshire のことで英蘭西南の海岸に沿うた州。
shrivelled=萎びて縮つてゐる狀態。
not so much A as B=B than A.

第　四

紐育藝術科學協會に對する講演抄

私は諸君が今主として何を考へて居られるかは知らない。が私には、壓倒的に優勢な考は、創造——嚴密に云へば再創造に就いてのそれである。御承知の様に、我々が、はりえにしだやヒースが燒き拂はれた——デヴオン地方では私共はスウエールされたと云つてゐるが——一帶の荒野を眺める時に、黑く萎びた根からむくむくと萌え出てゐる若芽をばどんなに悅しく思ふことであらうか。私は、若芽が萌え出るのを、世界中到る處に創造的衝動が千趣萬態に再び動くのを見たい見たいと思つてゐる。歐米の兩大陸に於ける吾々銘々が、それぞれの方面で創造的の仕事をする——それも富と快樂とが再び生まれる爲にと云ふよりは寧しろ健康と美とが再び生まれる爲めに、創造的の仕事をするのを。

併し、藝術と科學と云ふ二つのものは、私が今夜對立させてゐる樣に相對立してゐるものであるから、私のお話に區劃を立てやう。科學の諸君は聽く必要はない。諸君は今日程の黃金時代を今まで有つたことがない。工學に於て、化學に於て、外科醫

---

be born again=be reproduced.
confronting as I do to-night, Arts and Sciences=Since Arts and Sciences confront as I do to-night.
divide my words=話を双方に分けて各々別々に述べる。

gazing,' you have been shooting ahead, earning fresh laurels, putting new discoveries at the service of bewildered Man. Science drags no lame foot, it dances along like the Pied Piper of Hamelin. I had better not pursue the simile. But the Arts, with faces muffled to the eyes, stand against the walls of life, and gaze a little enviously, a little mournfully at the passing rout. This is not their time for carnival; their lovers sleep, heavy with war and toil. It is to those poor wall-flowers the Arts, that I would speak: Drop your veils, have the courage of your charms; you shall break many a heart yet, make many a lover happy.

Ladies and gentlemen, you have all noticed as I have the difference between a town by daylight and a town by night; well, the daylight town belongs to the Sciences, the nightlit town to the Arts. I don't mean that artists are night-birds, though I have heard of such a case; I mean that the Arts live on Mystery and Imagination. Have you ever

star-gazing=昔の占星學で勿論これは科學とは謂はれないが併し天文學や力學がそれから發達して來たことは恰度錬金術から化學が生れたと同樣である、そこで astronomy のことを戯談に star-gazing と云ふ、玆では天文學の意であるが、天文學としては讀者の諧謔味が現はれないのでその儘文字譯にして置いた。天文學は諸科學中最も發達が遲れてゐると謂はれてゐる。

shoot ahead=come quickly to the front of competitors の意。

the Pied Piper of Hamelin=Hamelin は Hannover の一都市で中世紀の傳說に 1284 年その町に一人の斑服を着た笛手が現はれて、金を貰ふ約束の下に笛で當時その町が苦しんでゐた鼠を誘つて Weser 河に溺死させた、處が町人は約束の金を渡さなかつたので、彼れは復讐に又笛を吹いて 130 人の町の子供を Koppenberg と云ふ小山に誘ひ出しそ

學に於て、恐らく「占星學」を除いては有りと有らゆる部門に於て、諸君は、相手をずんずん追ひ越して、新しい月桂冠を得、新しい發見をばあつけに取られてゐる人類の用に供して來てゐる。科學は決して跛の足を引いてはゐない。それはハメリンの斑服が笛手の樣に踊りながら行つてゐる。私はこの比喩はこれ位で打切つた方がよいと思ふ。然るに藝術は、眼の所まで顏を包んで、人生の壁を背にして立つてゐる。そして過ぎ行く人群れを、稍や羨まし氣に、稍や悲し氣にぢつと見てゐる。今は藝術の大浮かれの時代ではない。その愛人は、戰爭と勞苦とに惱んで眠つてゐる。この可愛さうなあらせいとうである藝術に對してこそ私は、汝の面被を取れ、汝の魅力に自信を有て、汝は必ずや未だ幾多の心を悲しましめ、幾多の愛人を幸福ならしむるであらうと云ひたいのである。

淑女紳士諸君、諸君は皆、私と同樣に、晝見た町と、夜見た町との相違に氣付かれてゐるであらう。さて晝の町は科學に屬するものであり、夜の町は藝術に屬するものである。尤も私は藝術家は夜鳥だと云ふ積りではない。但しさうした人もあることは私も耳にしてはゐるが。私の意味は、藝術は神秘と空想とに依つて生きてゐると云ふのである。若しも吾々にして、霞のか

こに消えてその後杳として消息がないと云ふ、Brandenburg や Lorch にも同樣の傳說がある、Robert Browning の同名の詩はこれを題材としたもの。

stand against the wall=lean against the wall. ダンスなどの仲間はづれになることをも意味す。

carnival=謝肉祭、人皆浮かれ廻はるお祭騷ぎ。

heavy with=despondent with.

wall-flowers=あらせいとうの樣にくつ付いて人生の眞中にやう出來ないで香高き花を開いてゐる藝術。

well=well then.

night-bird=夜働く人を云ふ。

such a case=such an instance.

thought how we should get through if we had to live in a town which never put on the filmy dark robe of night, so that hour-in, hour-out we had to stare at things garbed in the efficient overalls of Science, with their prices properly pinned on? How long would it be before we found ourselves in Coney Hatch? Well, we are in a fair way to abolish Night—Mystery and Imagination are 'off,' as they say, and that way sooner or later madness lies.

It is time the Arts left off leaning against the wall, and took their share of the dance again. We want them to be as creative, nay, as seductive as the Sciences. We have seen Science work miracles of late; now let Art work her miracles in turn.

People are inclined to smile at me when I suggest that you in America are at the commencement of a period of fine and vigorous Art. The signs, they say, are all the other way. Of course you ought to know best; all the same, I stick to my opinion with British obstinacy, and I believe I shall see it justified.

---

hour-in, hour-out=day-in, day out と同様、二六時中との意。

things garbed......pinned on= 科學と云ふ利刀で分析され說明された明白な正札付のものばかりと云ふ意。

How long would it be=if it be so と云つた樣な假定法の句が省略されてゐる。

Coney Hatch=紐育の Coney Island 大通りのことで紐育の中以下

かつた暗い夜の衣を決して着けない町に住はなければならないとすれば、從つて明けても暮れても我々は、科學と云ふ能率の高い仕事服を着けて、それぞれの賣價が適當に札付けになつてゐるものばかりを見詰めてゐなければならぬとすれば、どうして我々は暮して行くだらうかを諸君はお考へになつたことがあつたか。若しさうであるとすれば我々が享樂の巷に入るまでには、どんなに長くかゝるであらうか。處で、世人は云ふ處に依れば、我々は夜を止めて了う見込が立派に立つてゐる。——神秘と空想は去つたさうである。而かもそこに早晩、狂氣が存在するのである。

今や藝術が壁に凭り掛ることを止めて、再びダンスの仲間入りをした時である。我々は藝術も亦、科學と同様に創造的で、否、魅惑的ですらもあつて欲しいと思ふ。吾々は近頃科學が奇蹟を行ふのを見て來てゐる。今度は代つて藝術にその奇蹟を行はせやう。

私が、アメリカに在る諸君は今や美はしい力強い藝術の時代の始まりに際會してゐると云ふことを諷すると、世人は私を見て微笑を漏らす傾がある。彼等の云ふ所に依れば、徵候は凡て他の方向に向つてゐるさうである。無論諸君は一番よく御承知の答である。それでも私は矢張り英國式の執拗さを以つて自說を固執する。そして私は他日卑見が正當化されることになるであらうと確信してゐる。

の大僧小僧の遊樂地。海岸ではあるが淺草式の見せ物や常設館が立ち並んでゐる。

be in a fair way to=......する方に明白に進んでゐる。

seductive=人を誘ひとろかす樣な。

in turn=交代して。

smile at=鼻先であしらふ意。

V

ADDRESS AT COLUMBIA UNIVERSITY

A doubter of the general divinity of our civilisation is labelled 'pedant.' Anyone who questions modern progress is tabooed. And yet there is no doubt, I think, that we are getting feverish, rushed, complicated, and have multiplied conveniences to such an extent that we do little with them but scrape the surface of life.

We were rattling into a species of barbarism when the war came, and unless we check ourselves shall continue to rattle now that it is over. The underlying cause in every country is the increase of herd-life, based on machines, money-getting, and the dread of being dull. Everyone knows how fearfully strong that dread is. But to be capable of being dull is in itself a disease.

And most of modern life seems to be a process of creating disease, then finding a remedy, which in its turn creates another disease, demanding fresh

---

the general divinity＝一般に貴むべきものであること。

is tabooed＝南洋の或る野蠻人の間に行はれる迷信で或る人や物を穢れたるもの乃至神聖なものとしてそれに接觸を禁ずる習慣がある、その人や物を taboo と云ふ。卽ち taboo にせられる、人から忌まれること

第　五

コロンビヤ大學に於ける講演

現代文明の一般の神性に就いて疑を挾む者は、「空論家」と云ふレツテルを附けられる。誰れでも近代の進步に疑を抱く者は人の口にすべからざることを口にしたものとして忌まれる。而かも尙私は、我々が現に熱病的に、猪突的に、複雜になりつゝあつて、種々の便利は非常に增しはしたが、それ等を用ゐて、人生の表面を引つ掻き廻はす以外には、殆んど何にも爲す所がない程にまでもなつてゐることは、少しも疑ふ餘地がないと思つてゐる。

我々は、大戰の起つた頃に、一種の野蠻狀態にどんどん進んでゐた。そして若し吾々にして自らを制することがなければ、大戰の終つた今日でも相變らずどんどん進んで行くだらう。凡ての國に於て根本的な原因は、機械と金儲けと沈滯した生活に對する恐怖心と集團生活の增大である。誰れも、さうした恐怖心が如何に恐るべき程强いものであるかを知つてゐる。併し元來沈滯した生活を爲し得ることは、それ自體一種の病氣なのである。

而して近代生活の大部分は、初めに病氣を造つて置いて、それからその治療法を發見する、その治療法が今度は別の病氣を

た云ふ。

to be capable of......a disease＝健全な狀態に於ては人間の生活は dull である筈がないとの意。

remedy, and so on. We pride ourselves, for example, on scientific sanitation; but what is scientific sanitation if not one huge palliative of evils which have arisen from herd-life enabling herd-life to be intensified, so that we shall presently need even more scientific sanitation? The true elixirs vitae—for there be two, I think—are open-air life, and a proud pleasure in one's work, but we have evolved a mode of existence in which it is comparatively rare to find these two conjoined. In old countries such as mine, the evils of herd-life are at present vastly more acute than in a new country such as yours. On the other hand, the further one is from hades, the faster one drives towards it, and machines are beginning to run along with America even more violently than with Europe.

When our Tanks first appeared, they were described as snouting monsters creeping at their own sweet will. I confess that this is how my inflamed eye sees all our modern machines—monsters running on their own, dragging us along, and very often squashing us.

We are, I believe, awakening to the dangers of

---

what if not......=......でなくて何であるか!......の外にはないではないか。

elixir vitae [ilíksə víte:]=仙藥。

hades [héidi:z]=普通 Hades と書く、希臘の神話にある冥府のこと、

遣つて、新治療法を要求する、それから又それを繰り返へすと云つた樣な過程であるらしく思はれる。例へば、我々は科學的衞生に就いて得意になつてゐるが、併し科學的衞生なるものも實は、集團生活を更に强度ならしめ得る所の集團生活から發生して來た害惡の一つの大な一時凌ぎの姑息手段であつて、從つて我々は軈て更に一層科學的な衞生をさへも必要とする樣なものに外ならないのである。眞の不老不死の靈藥は——複數にしたのは二つあると私は思ふからである——戶外の生活と自己の仕事に誇らかな愉快を感ずることとであるが、我々は、これ等二つのものが結合はされてゐるのを見出すのは比較的稀である樣な生存樣式を發達させて來てゐる。私の國の樣な古い國に於ては、集團生活の害惡が、現在の處、諸君の國の樣な新しい國に於てよりも、遙に激しい。他方に於て人は地獄から遠ざかれば遠ざかる程、益々速く地獄の方に向つて驅つて行く。そして機械は今や歐羅巴よりも一層猛烈にさへも、米國に伴ひて走り始めてゐるのである。

我國の裝甲自働車が初め現はれた時に、それは勝手放題に這ひ廻はる鼻の突き出た怪物として形容されてゐた。私は、今凡て我々の近代の機械が私の炊衝を起してゐる眼に映る姿は正にこれであることを告白する。——即ち機械は我々を引きずりながら、そして頻りに我々を押し潰しながら、思ふ存分に走つてゐる怪物なのである。

我々が「このガダラの豚の群の如くに走ること」の危險、即

玆の意味は人が文明の力で闇黑から遠ざかれば遠ざかる程、即ち文明が進めば進む程、闇黑に向つて行く、即ち人間が機械の奴隷になる。

at one's own sweet will=just as one please, at random.

snouting monster=豚や猪のやうに樣な鼻の突出した怪物。

this 'Gadarening,' of rushing down the high cliff into the sea, possessed and pursued by the devils of—machinery. But if any would see how little alarmed he really is—let him ask himself how much of his present mode of existence he is prepared to alter. Altering the modes of other people is delightful; one would have great hope of the future if we had nothing before us but that. The mediaeval Irishman, indicted for burning down the cathedral at Armagh, together with the Archbishop, defended himself thus: "As for the cathedral, 'tis true I burned it; but indeed an' I wouldn't have, only they told me himself was inside." We are all ready to alter our opponents, if not to burn them. But even if we were as ardent reformers as that Irishman, we could hardly force men to live in the open, or take a proud pleasure in their work, or enjoy beauty, or not concentrate themselves on making money. No amount of legislation will make us

---

'Gadarening'=Bible の故事から出た言葉、Matt. VIII. 28. Luke VIII. 26—33 參照。Gadara は今日では Um Keis と呼ばれてゐる the Sea of Galilee の東南約七哩ばかりの所に在る村である。昔は小都市を爲してゐたやうで、その住民を Gadarenes 或は Gergesenes と呼んでゐる、馬太傳の記事を揭げやう、(イエスガダラ人の地にゆき給ひしとき惡鬼に憑かれたる二人のもの墓より出できたりて之に遇ふ、その猛きこと甚しくそこの途を人の過ぎ得ぬ程なり、彼等叫びて言ふ「神の子よ、われら汝と何の關係あらん、未だ時到らぬに我等を責めんとてこゝに來たり給ふか」遙かにへだゝりし多くの豚の一群食しゐた

ち機械——と云ふ惡鬼に取憑かれ、追はれて、高い斷崖を驅け下りて海の中に這入ると云ふ危險に、今目醒めつゝあることは私も信じてゐる。併し誰れでも、自分が本當に危險を感じてゐることの如何に僅かであるかを知りたいならば——自分の現在の生存樣式をどれ程まで變更するだけの覺悟があるかを自問して見るがよい。他人の生存樣式を變更することは愉快である。苟くも我々の爲すべき事は他人の生存樣式を變へることだけに止まるものとすれば、將來に就いて大なる望が有たれもしやう。アルマーの寺院をそこの大僧正と一所に燒き拂つたと云ふ廉で起訴された中世紀時代の愛蘭人は、次の樣に辯明した「寺の方はいかにも私が燒きました。併し實際私は人は誰れも燒きたくはなかつたのです。唯だ大僧正が自分で勝手に寺の中に居つたさうです」と。我々は皆、相手を燒かないまでも、變更する積りをしてゐる。併しよし我々がその愛蘭人程熱烈な改革者であつたとしても、我々は人々を强制して、戶外に生活させたり、自分の仕事に誇らかな愉快を感ぜしめたり、美を樂しましめたり、金儲に全力を傾倒せしめない樣にしたりすることは先づ不可能であらう。如何に澤山の法律を作つても、我々をして

りしが、惡鬼請ひて言ふ「若し我等を逐ひ出さんとならば豚の群に入ることを許せ」彼等に言ひ給ふ「ゆけ」、惡鬼出て豚の群に入る Behold, the whole herd of swine ran violently down a steep place into the sea and perished in the waters.) この豚の群の如くに走つて滅亡に入ることを "Gadarening" と云ふ。

if we had nothing before us but that 自分の生存樣式のことは棚に上げて置くことが出來るならばの意。

be indicted [indáitid]=……の廉で起訴される、告發される。

an' I wouldn't have=I wouldn't have burned any.

"lilies of the field" or "birds of the air," or prevent us from worshipping false gods, or neglecting to reform ourselves.

I once wrote the unpopular sentence: "Democracy at present offers the spectacle of a man running down a road followed at a more and more respectful distance by his own soul." For democracy read rather the words modern civilisation which prides itself on redress after the event, foresees nothing and avoids less; is purely empirical if one may use so high brow a word.

I look very eagerly and watchfully to America in many ways. After the war she will be more emphatically than ever, in material things, the most important and powerful nation of the earth. We British have a legitimate and somewhat breathless interest in the use she will make of her strength, and in the course of her national life, for this will greatly influence the course of our own. But power

---

"lilies of the fiield" or "birds of the air"=Matt. VI. 26, 28, 29 The Sermon in the Mount の一節 "Behold the fowls of the air: for they sow not, neither do they reap, nor gather into barns; yet your heavenly Father feedeth them. Are ye not much better than they?" (天空の鳥を見よ播くことなく刈ることを爲ず倉に蓄ふることなし、然るに汝等の天の父は之れを養ひ給へり、汝等之れよりも大に勝れたる者ならずや) 又 "And why take ye thought for raiment? Consider the lilies of the field, how they grow; they toil not, neither do they spin: And yet I say unto you, that even Solomon in all his glory was not arrayed like one of these." (また何故に衣のことを思ひわづらふや野の百合花は如何にして育つかを思へ、勞めず紡がざるなり、われ汝等に告げんソロモンの榮華の極の時だにもその裝この花の一に及ばざりき)、この前後は基督が物質的富の追求に耽けることの愚なる所以を說いた有名な節で

「野の百合」乃至「空の鳥」たらしむるものでもなく、又我々をして僞の神々を崇拜したり、或は自己の改造を怠つたりすることを防止するものでもない。

私は曾て次の様な受の惡い文章を書いたことがある。曰く「民主々義は現在の處、人が道を急いて行く、その後をその人の魂が益々敬遠して遠方から隨いて行くと云つた樣な光景を呈してゐる」と。民主々義は寧ろ、事後の救濟を以つて自ら得たりとなし、何事も豫知せず、從つて回避することも少ない、若し極めて學者的な言葉を用ゐても差閊ないならば、純粹に經驗的である所の近代文明と云ふ言葉に解すべきものである。

私は幾多の方面に於て米國に對して、極めて熱心に又注意を怠らずに期待してゐる。大戰後米國は、物質的事物に於ては從來よりも一層强い意味に於て地球上最も重要で且つ有力な國民となるであらう。我々英國人は、米國が今後その力をどう云ふ風に利用するか、又その國民的生活はどう云ふ進路を取るかと云ふことに、當然の又多少手に汗を握る樣な關心を有つてゐる。何故なればこれは我々自身の進路に大に影響するからである。併し米國に於ける眞の光明となり指導となる力は、その物

ある。

be followed at a more and more respectful distance=人が急いで進めば進む程魂の方は益々遠ざかつて行く意。

For democracy read rather the words modern civilisation=民主々義と云ふ言葉は止めてそれに代へて……である所の近代文明と云ふ言葉を以つてせよ、玆の "read" は命令法である。例へば For black read red. (黑字は誤り赤字が正しい)。

empirical=主として哲學上の用語で殊に英國流の哲學は經驗哲學であるが故に尙更重大な意義を有つてゐる、玆では一定の原則に依つて、未來を洞察することなく、行き當つて後その仕末をすることを云ふ。

high brow=(American Slang) learned, scholastic, academic の意。

somewhat breathless=幾分いきを凝らしての。

for real light and leading in America will depend, not so much on her materal wealth, or her armed force, as on what her attitude towards life, and what the ideals of her citizens are going to be. Americans have a certain eagerness for knowledge; they have also, for all their absorption in success, the aspiring eye. They do want the good thing. They don't always know when they see it, but they want it. These qualites, in combination with material strength, give America her chance. Yet, if she does not set her face against "Gadarening," we are all bound for downhill. If she goes in for spreadeagleism, if her aspirations are towards quantity, not quality, we shall all go on being commonised. If she should get that purse-and-power-proud fever which comes from national success, we are all bound for another world flare-up. The burden of proving that democracy can be real and yet live up to an ideal of health and beauty will be on America's shoulders, and on ours. What are we and Americans going to make of our inner life,

for all=……にも拘はらず。
in success=物質的意味の成功。
the aspiring eye=向上、憧憬心。
her chance=her prospect 前途の見込。
set one's face against=oppose.
go in for=take as one's object or principle.
spreadeagleism=bombastic, or noisy patriotism.

質的富やその武力に依るよりは、寧ろその人生に對する態度、及びその國民の理想がどうならうとしてゐるかと云ふことにかゝるであらう。米國人は或る程度の熱心な智識慾を有つてゐる。彼等は又、成功に沒頭してゐるのにも拘らず、理想に對する憧憬をも有つてゐる。彼等は、事實、善事を欲求してゐる。彼等に善事が見へた時、彼等は必ずしも常にそれを知つてゐる譯ではないが、併しそれを欲してはゐる。これ等の諸性質が、物質力と結合して、米國にその見込を與へてゐるのである。併し、米國にして若し「ガダラの豚の群の如くに走ること」に顔をそむけることをしなければ、我々は皆必ずや衰運に向ふ。若しも米國にしてその大袈裟な愛國主義を目的とするならば、若しも米國の理想が品質ではなくて數量の方に向つてゐるならば、我我は皆益々平凡化の過程を續けて行くであらう。若しも米國にして萬一、國家的成功より生ずる所の彼の「金と力の自慢熱」に罹る様なことがあれば必ずや我々は皆、又再び世界的に火の手を上げる様になるに違ない。民主々義が眞正のものであり、而かも健康と美との理想を實踐し得ることを立證するの責任は、かゝつて米國の双肩に、又我々の双肩にもあるであらう。我々と米國人とは、我々の內的生活、我々の個人の考へ方をどうしやうとしてゐるのか。我々は何を崇敬し、何を輕蔑せんとしてゐるのか。我々は果して、單なる金と大砲とに於てゞはなく、精神と眞理とに於て先頭に立つ積りであらうか。英國は、

toward quantity, not quality=物質的に向つて精神的に向はない。
purse-and-power-proud fever= purse-proud (金自慢) と power-proud (力自慢) とをくつ付けたもの。
national success=國民として國家としての成功。
another world flare-up=再度の世界大戰。
live up to an ideal=put an ideal into practice.

of our individual habits of thought? What are we going to reverence, and what despise? Do we mean to lead, in spirit and in truth, not in mere money and guns? Britain is an old country, though still in her prime, I hope; America is yet on the threshold. Is she to step out into the sight of the world as a great leader? That is for America the long decision, to be worked out, not so much in her Senate and her Congress, as in her homes and schools. On America, now that the war is over, the destiny of civilisation may hang for the next century. If she mislays, indeed if she does not improve the power of self-criticism—that special dry American humour which the great Lincoln had—she might soon develop the intolerant provincialism which has so often been the bane of the earth and the undoing of nations. Above all, if she does not solve the problems of town life, of Capital and Labour, of the distribution of wealth, of national health, and attain to a mastery over inventions and machinery—she is in for a cycle of mere anarchy, disruption, and dicatorships, into which we shall all follow. The motto "noblesse oblige" applies as much to democracy as ever it did to the old-time

---

to be worked out=to be realised.
now that=since.
dry=淡々たる、洒脱な、執拗でない。
which the great Lincoln had=彼れの平生の寛容的態度殊に南北戰爭終了後戰爭中もさうであつたが——南軍の將卒並びに政治家に對

老國である。尤も私は、英國が尙、その働盛りの時代にある積りではゐるが。米國は未だ人世の入口に居る。米國は一大指導者として世界の舞臺に乘り出すことになるであらうか。それは米國に取つては長い間の決心であつて、その上院や下院に於てよりは寧ろ家庭や學校に於て實現せんとしてゐる所のものである。戰爭は總んだから、文明の運命は、來るべき一世紀間、米國の上にかゝつてゐるかも知れない。若し米國にして措置を誤るならば、苟も米國にして自己批判力——偉大なるリンカンが有つてゐたあの一種特殊なあつさりした米國氣分を發達せしむることがないならば、米國は早晩不寛容な割據主義を發達させる虞がないとは限らない。そしてそれはこれまで極めて屢々世界滅亡の因であり、諸國民の解體の源となつて來たものである。取り分け、若し米國にして、都市生活の問題、勞資の問題、富の分配の問題、國民健康の問題を解決し、そして發明と機械とを自由に驅使するに至らなければ米國は單なる無政府狀態と、分裂と、獨裁政治との輪廻に捲き込まれてゐる。そして我々も皆その中について行くことになるであらう。「高貴は義務を負ふ」と云ふ格言は、曾て往昔の貴族主義に當嵌つたと同じ程度に民主々義にも當嵌るものである。それは驚くべき程明白に米國にも當嵌る。血統と天然とは米國に偉大なる天與の贈物を與へてゐる。米國の背後には、良心と企業心と、獨立心と、材幹

して示して包容的態度は戰後の怨恨を一掃するに充分であつた。
be in for=be involved in.
noblesse oblige [nɔblés ɔblíːʒ] (F)=Nobility binds to noble conduct or Privilege entails responsibilty. 特權ある者には必然的に義務を伴ふ。

aristocrat. It applies with terrific vividness to America. Ancestry and Nature have bestowed on her great gifts. Behind her stand Conscience, Enterprise, Independence, and Ability—such were the companions of the first Americans, and are the comrades of American citizens to this day. She has abounding energy, an unequalled spirit of discovery, a vast territory not half developed, and great natural beauty. I remember sitting on a bench overlooking the Grand Canyon of Arizona; the sun was shining into it, and a snow storm was whirling down there. All that most marvellous work of Nature was flooded to the brim with rose and tawny-gold, with white, and wine-dark shadows; the colossal carvings as of huge rock-gods and sacrificial altars, and great beasts along its sides, were made living by the very mystery of light and darkness, on that violent day of Spring; I remember sitting there, and an old gentleman passing close behind, leaning towards me and saying in a sly, gentle voice: "How are you going to tell it to the folks at home?" America has so much, that one despairs of telling to the folks at home, so much grand beauty to be to her an inspiration and uplift towards high and free thought and vision. Great poems of Nature she has, wrought in the large, to make of her and keep her a noble people.

Ancestry and Nature=Anglo-Saxon 民族といふ優秀の民族の子孫であると云ふことゝ無盡藏の天然寶庫を惠まれてゐると云ふこと。

とが立つてゐる。——これ等は、最初の米國人の伴侶であつたし、今日に至るも米國市民の僚友なのである。米國には、有り餘る程の活動力と、類なき發見の精神と、半ば未開發の廣大な土地と、偉大なる天然の美とを有つてゐる。私は曾てベンチに腰掛けて、アマゾン河の大峽谷を見渡してゐた時のことを記憶してゐる。太陽は峽谷の中に照り込んでゐた。峽谷の下には吹雪が渦を卷いてゐた。あの最も驚くべき自然の工には凡て、バラ色と褐色を帶びた金色とが溢るゝばかりに漲つて、それに白色と葡萄酒の樣な暗紫色の影が差してゐた。巨大なる岩彫りの神と、犧牲の祭壇と、その側に大な獸が横はつてゐると云つた樣な尨大な彫刻が、此のあゝした暴れ狂ふ日に、明暗の神秘そのものゝ手で躍動させられてゐた。私がそこに腰掛けてゐると、私の直ぐ後を通る一人の老紳士が私の方に身を傾けて、ひそめた穩かな聲で「あなたはあれをお國の人達にどう云ふ風にお話しになる積りですか」と云つたことを私は記憶してゐる。米國には非常に澤山の美があるので、故國の人々に話すことを諦めねばならぬ程である。實に米國には高くして囚はれない思想と幻想に向つて米國を鼓舞し向上せしむるに足る程豐かに偉大なる美があるのである。米國は、その國民を高貴なる國民たらしめ、又たらしめて置くべき、大規模に作られた天然の大詩篇を有つてゐる。我が愛する英國には——それは全部を合せてもテキサス州の大さの半分にも足りないが、——米國の有つて

sly=低めた(聲)の意。
has so much=has so much beauty.

In my beloved Britain—all told, not half the size of Texas—there is a quiet beauty of a sort which America has not. I walked not long ago from Worthing to the little village of Steyning, in the South Downs. It was such a day as one seldom gets in England; when the sun was dipping and there came on the cool chalky hills the smile of late afternoon, and across a smooth valley-on the rim of the Downs one saw a tiny group of trees, one little building, and a stack, against the clear-blue, pale sky—it was like a glimpse of heaven, so utterly pure in line and colour so removed, and touching. The tale of loveliness in our land is varied and unending, but it is not in the grand manner. America has the grand manner in her scenery and in her blood, for in America all are the children of adventure, every single man an emigrant himself or a descendant of one who had the pluck to emigrate. She has already had past-masters in dignity, but she has still to reach as a nation the grand manner in achievement. She knows her own dangers and failings; her qualities and powers; but she cannot realise the intense concern and interest, deep down behind our provoking stolidities, with which we of the old country watch

all told=being all told. 皆數へられても。
Worthing=英蘭 Sussex の海濱の小市都。
the South Downs=Sussex の西、Hampshire 州に在る地方名で、このあたりは一帶に名の示す如く高原で羊牧地である。
against=……を背景にして、……に反映して。

ゐない一種の靜寂な美がある。遠からぬ以前に私は、ワージングから南ダウンズ地方のステイニングの小村まで歩いたことがある。その日は英國では滅多に見られない樣な日であつた，太陽が西に春いて、涼しさうな白堊の丘の上に夕暮の微笑が來た時、そして丘原の緣のなだらかな低地を渡つて、木の小叢や、一軒の小さな建物や、堆塚やが、碧く澄んだ色褪せた空に映へてゐるのが見へた時に、それは恰も天國の片鱗の樣で、輪郭と色彩とが澄み渡り、浮世を離れて切切として人に迫るものがあつた。私共の國の愛すべき點を云へば取り取り樣々ではてしもないが、併しそれは雄大なる風趣を具へてゐない。米國は、その風光に於て、又その血統に於て雄大なる趣を具へてゐる。と云ふのは米國に於ては、凡ての人が冒險家であり誰一人として、自身移住民か、乃至は移住するだけの勇氣を有つてゐた人の子孫かでないものはないからである。米國にはこれまで既に堂々たる鍊達堪能の偉材があつた。併し今後尙國民として業績に於て雄大な姿に到達しなければならない。米國は自己の危險な所と缺點とを知つてゐる。又その長所と力をも知つてはゐるが、併し我々舊國の人人が、米國の行動は凡ての國民に優つて吾々の上に反應を齎らすものであり、今後益々反應を齎らすだらうと云ふことを感じて、米國を注視してゐる所の、吾々の癪

the children of adventure=Men who love adventure.
past masters=舊棟梁、鍊達堪能の偉材、玆の意味は個人としては立派な人物があつたとの意。
her qualities=her fine qualities.

her, feeling that what she does reacts on us above all nations, and will ever react more and more. Underneath surface differences and irritations we English-speaking peoples are fast bound together. May it not be in misery and iron! If America walks upright, so shall we; if she goes bowed under the weight of machines, money, and materialism, we too shall creep our ways. We run a long race, we nations; a generation is but a day. But in a day a man may leave the track, and never again recover it! Nations depend for their health and safety on the behaviour of the individuals who compose them.

Modern man is a very new and marvellous creature. Without quite realising it, we have evolved a fresh species of stoic—even more stoical, I suspect, than were the old Stoics. Modern man stands on his own feet. His religion is to take what comes without flinching or complaint, as part of the day's work, which an unknowable God, Providence, Creative Principle, has appointed. By courage and kindness modern man exists, warmed by the glow of the great human fellowship. He

---

a generation=約三十年。

Nations depend for their health and safety on……=諸國民はその健全と安全とを……に仰いでゐる。

Stoic=Stoic は 308 B. C. 頃希臘の Zeus が建てた哲學の一派で、一切の感情慾求を斷滅した不動心 (Apatheia) の狀態を以つて善の極致と看做し、嚴格な理性的の生活を高唱した、結局東洋で云ふ克己的生活である。

に障る程の鈍感の後に奥深かく存在する强烈なる所の關心と興味とを理解し得ない。表面の意見の相違や憤激の下で我々英語國民は堅く結び合はされてゐる。希くばそれが不幸こ艱難の際に於てゞなからんことを祈る。若しも米國が直立して歩むならば吾々も亦直立して歩むであらう。若しも米國が機械や金錢や唯物主義に押されて屈んで行くならば、吾々も亦吾々の途を這つて行くであらう。吾々は——吾々諸國民は長い競走をやつてゐる。一代も一日に過ぎない。併し人は一日にして脫線して、決して二度と回復しないこともあり得る。國民の健康と安全とはそれを構成する個々人の行動にかゝつてゐるものである。

近代人なるものは極めて新しい、又驚くべき所造物である。吾々はそれを充分吞み込むことなしに、一新種の克己主義者を——想ふに往昔のストア派の哲學者すらよりも優つて克己的な克己主義者を發達せしめて來てゐる。近代人は獨立自營してゐる。彼れの宗教は、來たる物をば、ひるみもせず又こぼしもせずに、不可知の神、即ち天の攝理、創造の原理が命じたその日の仕事の一部として受け取ると云ふことである。勇氣と親切とに依つて近代人は生存してゐる。大なる人間同胞感の情熱に依

---

stand one's own feet=經濟的にも精神的にも獨立獨行する、即ち個人主義的である。

take what comes=何事が起らうとそれを甘受する意。

Providence=東洋で謂ふ所の「天命」。

Creative Principle科=學的に見て「宇宙を支配せる自然力」、茲の生活態度は一種の宿命論者の態度である。

has re-discovered the old Greek saying: "God is the helping of man by man"; has found out in his unselfconscious way that if he does not help himself, and help his fellows, he cannot reach that inner peace which satisfies. To do his bit; and to be kind! It is by that creed, rather than by any mysticism, that he finds the salvation of his soul, for, of a truth, the religion of this age is conduct.

After all, does not the only real spiritual warmth, not tinged by Pharisaism, egotism, or cowardice, come from the feeling of doing your work well and helping others; is not all the rest embroidery, luxury, pastime, pleasant sound and incense? Modern man is a realist with too romantic a sense, perhaps, of the mystery which surrounds existence, to pry into it. And, like modern civilisation itself, he is the creature of West and North, of those atmospheres, climates, manners, of life, which foster neither inertia, reverence, nor mystic meditation. Eassentially man of action, in ideal

---

"God is......by man"＝この古希臘の諺は神を極端に Humanistic に見たもので、世の中に幸福を與へる神なるものが別に存在する譯ではなく、人が人を助け自らを助けることに依つて幸福が與へられるのだ。神に祈るよりは同胞相助け又自らを助けよとの意である。自分を助けることは即ち獨立することである。

his bit＝his duty.

any mysticism＝何等かの神秘的な宗教、即ち基督の力とか神の力とか。

of a truth＝truely.

Pharisaism＝Pharisees（パリサイの人）は猶太教の傳說を墨守する

つて溫められて生存してゐるのである。近代人は「神とは人が人を助けることである」と云ふ往昔の希臘の諺の再發見をした。そして自ら意識的に、若しも人が自己を助け、その同胞を助けることをしないならば、自己に滿足を與へる所の內心の平和には到底到達し得ないと云ふことを見出したのである。自己の本分を盡すこと、そして親切であること。近代人が自己の魂の救ひを見出すのは、實に何等かの神秘的信仰に依るよりも、寧ろこの信仰に依つてゞある。何故なれば現代の宗教は實際は行爲に外ならないからである。

結局、僞善や、利己や、臆病やに色付けられてゐない唯一の眞の精神的の溫味は、自己の仕事をよくやり、他人を助けやうと云ふ感情から來るのではなからうか。そしてその餘のものは皆、裝飾であり、贅澤であり、娛樂であり、快よき音と香とではあるまいか。近代人は、恐らく生存を圍る所の神秘には到底探り込み得ない程までも、その神秘に就いてロマンティツクな觀念を抱いてゐる現實主義者である。そして近代人は、近代文明それ自體と同樣に、西方及び北方の所產物であり、無爲的傾向や、神を畏敬する念や、神秘的冥想やの孰れをも養成しない樣な人生の空氣、氣候、習慣から生れた物である。彼れは本質

保守主義の一團であるが、何時の保守主義にもあり勝ちの樣に彼等は言行表裏一致せず、エホバの神の美名の下に罪惡を行ふ僞善の徒が多かつたので基督は極力それを排擊した。爾來パリサイ主義は僞善を意味する樣になつた。

luxury＝無くても差支のない物と云ふ意。

West and North＝East and South 即ち、埃及、猶太、アラビヤ、印度、支那の非現實的な理想的な文明と對比すれば西歐、北歐の文明詳しく云へば Teuton 民族、Latin 民族の文明の特質が明かになる。

Essentially man of-action＝Being essentially......＝As he is essentially......

action he finds his only true comfort. I am sure that padres at the front have seen that the men whose souls they have gone out to tend, are living the highest form of religion; that in their comic courage, unselfish humanity, their endurance without whimper of things worse than death, they have gone beyond all pulpit-and-deathbed teaching. And who are these men? Just the early manhood of the race, just modern man as he was before the war began, and will be now that the war is over.

This modern world, of which we English and Americans are perhaps the truest types, stands revealed from beneath its froth, frippery, and vulgar excrescences, sound at core—a world whose implicit motto is: "The good of all humanity." But the herd life which is its characteristic, brings many evils, has many dangers; and to preserve a sane mind in a healthy body is the riddle before us. Somehow we must free ourselves from the driving domination of machines and money-getting, not only for our own sakes but for that of all mankind.

And there is another thing of the most solemn importance: We English-speaking nations are by chance as it were, the ballast of the future. It is *absolutely necessary* for the happiness of the world

padre [pɑ́:drei]=軍隊付牧師。
froth=foam. 泡沫の如き中空な狀態。
the ballast of the future=未來と云ふ船の安定を保つ船底の砂。

的には實行の人なので、理想的の行動にその唯一の眞の慰安を見出すのである。戰場にある從軍牧師達は、自分達がその魂を養はんが爲めに出掛けて來た所の人々が、實は最高級の宗教生活を送つてゐると云ふこと、彼等の喜劇的な勇氣、自己を離れたその人間味、死以上に苦しい事をすゝり泣きもせずに我慢するその忍耐力に於て、有らゆる說敎壇や臨終の床の敎誨も及ばない所までも行つてゐると云ふことを悟つたに相違ない。而してさうした人達は抑も誰れであらう。戰爭前にもあつたし戰爭後の今日にもあるであらう樣な國民の壯年者、即ち近代人に外ならないのである。

我々英米人が恐らくその最も眞正な典型である所のこの近代の世界は、泡沫や、虛飾や、俗惡なる贅物やの下から實相を示して、核心に於ては健やかに存在してゐる。——即ち「全人類の福祉」と云ふことがその暗默の標語である所の世界なのである。然るに近代世界の特質である所の集團生活は、幾多の害惡を齎らし、幾多の危險を孕んでゐる。そして健全なる身體に健全なる精神を保存することは、實は當面の謎なのである。吾々は吾々自身の爲めばかりでなく、全人類の爲めにも、どうにかして、機械と金儲けとの驅使的支配から吾々を解放しなければならない。

更に最も嚴肅な重要性を有つた事がも一つある。それは吾々英語國民が、偶然、未來の、謂はゞ底荷であると云ふことである。吾々が依然として結合してゐることは、世界の幸福の爲めに絕對的に必要である。吾々が只今感じてゐる戰友關係は永續

the test of magnanimity=度量の廣狹を試めすこと。
rise to=挺身する。

that we should remain united. The comradeship that we now feel must and surely shall abide. For unless we work together, and in no selfish or exclusive spirit—Goodbye to Civilisation! It will vanish like the dew off grass. The betterment not only of the British nations and America, but of all mankind is and must be our object.

From all our hearts a great weight has been lifted; in those fields death no longer sweeps his scythe, and our ears at last are free from the rustling thereof—now comes the test of magnanimity, in all countries. Will modern man rise to the ordering of a sane, a free, a generous life? Each of us loves his own country best, be it a little land or the greatest on earth; but jealousy is the dark thing, the creeping poison. Where there is true greatness, let us acclaim it; where there is true worth, let us prize it—as if it were our own.

This earth is made too subtly, of too multiple warp and woof, for prophecy. When he surveys the world around—"the wondrous things which there abound," the prophet closes foolish lips. Besides, as the historian tells us: "Writers have that undeterminateness of spirit which commonly makes literary men of no use in the world." So I, for one, prophesy not. Still, we do know this: All English-speaking peoples will go to this adventure of Peace

---

be it ......or......=whether......or......
warp and woof=たて糸とよこ糸。

しなければならぬし、又必ず永續するに違ひない。何故なれば若しも吾々が共同して、而かも何等利己的乃至排他的精神でなく、働かないならば——文明は永久に去るであらう。それは草から消へる露の如くに消滅するであらう。啻に英米兩國民ばかりでなく、全人類の改善進步と云ふことは吾々の目的であり又目的でなければならない。

今や吾々は皆の心から大きな重しが取られてゐる。あそこの野原には死の神がもうその戰鎌を揮はない。吾々の耳にあそこのざわめきも聞へなくなつてゐる。——今こそ凡ての國に於て襟度を試驗する時が來てゐる。果して近代人は、健全な、自由な、寛大な生活の規整に身を挺して立つであらうか。吾々は各自に自分の國を一番愛してゐる。それが小國であるか、世界第一の大國であるかは問はない。併し嫉妬は魔物、忍び寄る毒物である。眞の偉大さの存する所、吾々はそれを歡呼して迎へやうではないか。眞の値打の存する所、吾々はそれを賞讃しやうではないか。——恰もそれが、吾々自身のものであるかの如くに。

この地球は餘りに精妙に作られて居り、餘りに込み入つた經緯から織り成されてゐるので、豫言は到底不可能である。豫言者が、周圍の世界を見渡す時——「世に充ち滿てる不可思議なる物」を見渡す時に、彼れは馬鹿な豫言は止めて了う。加之、歷史家が吾々に云つてゐる樣に「筆の人には、普通に文人をして世の中に於て無用の長物たらしめる所の精神の不確定な所があるものである」。それだから私も、筆の人として、敢て豫言はしない。それにしても尙吾々はこれだけは承知してゐる。それは、全英語國民は、その胸に何にか或る大きな目的と精神の

---

in spite of all his=の his は modern man のことである。

with something of big purpose and spirit in their hearts, with something of free outlook. The world is wide and Nature bountiful enough for all, if we keep sane minds. The earth is fair and meant to be enjoyed, if we keep sane bodies. Who dare affront this world of beauty with mean views? There is no darkness but what the ape in us still makes, and in spite of all his monkey-tricks modern man is at heart further from the ape than man has yet been.

To do our jobs really well and to be brotherly! To seek health and ensue Beauty! If, in Britain and America, in all the English-speaking nations, we can put that simple faith into real and thorough practice, what may not this century yet bring forth? Shall man, the highest product of creation, be content to pass his little day in a house like unto Bedlam?

When the present great task in which we have joined hands is really ended; when once more from the shuttered mad-house the figure of Peace steps forth and stands in the risen sun, and we may go our ways again in the wonder of a new morning —let it be with this vow in our hearts: "No more of Madness—in War, or in Peace!"

Shall man......?=Is it well that man should......
Bedlam=ロンドンの St. Mary of Bethlehem 病院で日本の松澤病院

様なものを以つて、何にか或る囚はれない見識の様なものを以つて、この平和の大事業に參加するだらうと云ふことである。若しも吾々にして健全な精神を保つてゐるならば、世界は、凡ての人を入れるに足るだけ廣く、自然は凡ての人に滿足を與へるに足るだけ豐かである。若しも吾々にして健全な身體を保つてゐるならば、地球は美はしく、且つ享樂され得る筈である。誰れか敢てこの美の世界を、賤劣なる考を以つて侮辱する者があらうか。世の中に暗黑とては、吾々の中の猿が今にお作つてゐるものだけである。そして近代人は、如何に猿智慧があらうとも、精神に於ては、人間として未だ曾てなかつた程猿から遠去つてゐるのである。

眞によく自分の仕事をして、互に相愛すること。健康を求め美を來らしむること。若しも英國と米國とに於て、有らゆる英語國民に於て、吾々がこの簡單な信念を、本當に且徹底的に實行し得るならば、今世紀の齎らし得ないものは先づあるまい。創造の最高の所産物たる人間は、瘋癲病院向きの様な家の中でその短い生涯を過ごすことに安んずべきであらうか。

吾々がこれまで提携して來た當面の大事業が眞に終了した時、鎧戸の閉つた瘋癲病院から今一度平和の女神の姿が歩み出て、さし登る朝日の光の中に立ち、そして吾々が再び新しき朝の驚異の中に吾々の途を辿り得る時——かうした誓を吾々の胸に抱いて居りたいものである。曰く「二度と狂氣はしないこと——戰時も、平時にも」。

の様な所である、第十三世紀の中頃に創立されたもの、Bedlam は Bethlehem の轉訛。

VI

TO THE LEAGUE OF POLITICAL EDUCATION, NEW YORK

Standing here, privileged to address my betters—I, the least politically educated person in the world, have two thoughts to leave on the air. They arise from the title of your League.

I with I did feel, speaking in the large, that politics and education have but a bowing acquaintanceship in the modern State; and I wish I did feel that either education or politics had any definite idea of what they were out to attain; in other words, had a clear image of the ideal State. It seems to me that their object at present is just to keep the heads of the citizens of the modern State above water; to keep them alive, without real concern as to what kind of life they are being preserved for. We seem, in fact, to be letting our civilisation run us, instead of running our civilisation. If a man does not know where he wants to go, he goes where circumstances and the telephone take him.

standing here=As I stand here.
betters=先輩、長者。
leave on the air 吹聽する。
I wish I did not feel 私が感じなければよいのに、遺憾ながら感じられる。

第　六

政治教育聯盟に

私が今、私の先輩の方々にお話する特權を與へられて玆に立つに當つて、政治的には世の中で最も教育されてゐない私が申述べたい考へが二つある。それは諸君の聯盟の名稱から思ひ付いたものである。

大づかみに云へば、遺憾ながら、私には政治と教育とは、近代の國家に於てはほんの顔見知の關係しか有つてゐない樣に感ぜられる、そして遺憾ながら教育にしても、政治にしてもが、それ等が到達しようと求めてゐる目的物に就いて、何等確定した觀念を有つてゐる樣には感ぜられない。云ひ換へれば、理想の國家と云ふものに就いての明瞭な概念を有つてゐる樣には感ぜられないのである。現在教育や政治の目的は近代國家の國民をば唯だ飯の食へる樣にして置くだけ、即ち彼等に生を保たしめるのは抑も如何なる種類の生活を送らす爲めであるかと云ふことに關して、眞に關心する所なく、唯だ彼等を生かして置くと云ふだけのことの樣に私には思はれる。事實我々は、我々が文明を動かしてゐるのではなくて、却つて文明に吾々が動かされつゝある樣である。人が若し自分の行き度いと思ふ處を知ら

speaking in the large=概して云へば。
a bowing acquaintanceship=途中で會つて一寸と會釋する位の知合ひ、顔見知の關係。
be out to attain=(俗) engaged in seeking to attain.
keep one's head above water=avoid financial ruin.

Where do we want to go? Can you answer me? Have you any definite idea? What is the Ultima Thule of our longings? I suppose one ought to say, roughly, that the modern ideal is: Maximum production of wealth to the square mile of a country —an ideal which, seeing that a man normally produces wealth in surplus to his own requirements, signifies logically a maximum head of population to the square mile. And it seems to me that the great modern fallacy is the identification of the word wealth with the word welfare. Granted that demand creates supply, and that it is impossible to stop human nature from demanding, the problem is surely to direct demand into the best channels for securing health and happiness. And I venture to say that the mere blind production of wealth and population be no means fills that bill. We ought to produce wealth only in such ways and to such an extent as shall make us all good, clean, healthy, intelligent, and beautiful to look at. That is the end, and production whether of wealth or population only the means to that end, to be regulated accordingly. As things are, we confuse the means with the end, and make of production a fetich.

---

run=manage, conduct.

where circumstances......take him=事情や、人に誘はれるまゝに何處へでも。

the Ultima Thule [ʌ́ltima θjúːliː]=the farthest end.

Maximum production......of a country=簡單に云へば一國の最大限度の富の生產。

ないならば、その人は事情や電話がつれて行く處へ行く、一體我々は何處へ行き度いと云ふのであるか。諸君はこれに答へることが出來るであらうか。諸君は何等か確定した觀念を有つて居るであらうか。我々の憧憬の究極のはては何であらうか。想ふに人は當然、大體次の樣に云ふだらう。即ち近代の理想は「一國の各一平方哩宛最大限度の富の生產」と云ふことであると。——人間は當前は自分自身の必要に對して餘分の富を生產するものであることを考へると、詰りこの理想は論理的には各一平方哩宛最大限度の人口と云ふことを意味することになる。そして現代の一大錯誤は、富と云ふ言葉をば、福祉と云ふ言葉と同一視することである樣に私には思はれる。需要は供給を作るものであり、そして人間の天性に要求を止めさせることの不可能であることは固よりのことであるから、問題は確かに要求を導いて健康と幸福とを獲得さる爲めの最善の水路に入らしめることである。そして私は富と人口との單なる盲目的生產だけでは決してさうした要求を滿たすものではないと敢て斷言する。吾々は、吾々一同を必ず善良にし、清潔にし、健全にし、聰明にし、見ても美しくする樣な、さうした方法に於てのみ、又さうした程度にだけ、富を生產すべきものである。さうすることが詰り目的であつて、富の生產であらうと、人口の生產であらうと、要するにその目的に對する手段であつて、それに從つて規整さるべきものたるに過ぎない。現狀では、吾々はその手段をば目的と混同して、生產を以つて偶像となしてゐるのである。

---

granted that=As it is granted that.

fill the bill=(米俗) do all that is required.

as things are=In the present state of things.

make of production a fetich=生產から即ち生產といふものを用ゐて物神を作る、生產といふことを崇拜の對象とする。

Let me take a parallel from the fields of Art. What kind of good in the world is an artist who sets to work to cover the utmost possible acreage of canvas, or to spoil, the greatest possible number of reams of paper, in deference to the call from a vulgar and undiscriminating market for all he can produce? Do we admire him—a man whose ideal is blind supply to meet blind demand?

The most urgent need of the world to-day is to learn—or is it to re-learn?—the love of quality. And how are we to learn that in a democratic age, unless we so perfect our electoral machineries as to be sure that we secure for our leaders, and especially for our leaders of education, men and women who, themselves worshipping quality, will see that the love of quality is instilled into the boys and girls of the nation.

After all, we have some common sense, and we really cannot contemplate much longer the grimy, grinding monster of modern industrialism without feeling that we are becoming disinherited, instead of—as we are brought up to think—heirs to an

---

acreage=エーカー數、坪數、廣さ。
reams=連、紙の束を勘定する時の單位。
in deference to=in compliance with; out of respect for.
for all he can produce=in spite of what he can produce, whatever he can produce.
perfect=make perfect.
electoral machineries=議會や地方自治體の議會の議員を選出する機關。
so perfect......as to be sure that=......確實である程までに完全にする、完全にして......が確實であるまでに至る。

美術の方面から一つの類例を取つて見やう。如何なるものを自分が製作し得やうとお構ひなく、一圖に、俗惡にして物を見分ける力のない市場からの要求に從つて、出來るだけ廣く畫布をぬたくり、乃至は出來るだけ澤山に紙を汚ごさうと云ふので仕事に取り掛る樣な美術家は、一體何と云ふ代物であらうか。吾々は果して彼を讃美するであらうか。——盲目的需要に應ずる爲めの盲目的供給を以つてその理想としてゐる樣な人物を。

今日の世の中で最も緊急な必要事は、品質を愛することを覺えることである。——否、恐らく、も一度覺え直すことだらう。そして民主的な時代に於て、若し吾々にして吾々の選擧の諸機關を完全にして、斯くして吾々が、その人自ら品質を崇拜する所から、品質愛が國民の少年少女達の頭に必ず注入されることに心を配るやうな人々を、吾々の指導者として、殊に吾々の敎育の指導者として手に入れることが確實になるまでに至らなければ、どうして吾々は、その品質愛を覺えることにならうか。

兎に角、吾々は多少の常識を有つてゐる。それで實際吾々は近代産業制度と云ふ垢じみた、人間を挽き碎く怪物を餘り長く觀てゐない內に、吾々は必ず、絕えず增加し行く財產の相續者——實は吾々はさう考へる樣に育てられてゐるのだが——では

---

will see that=will take care that, will make sure that.
cannot contemplate...... without feeling=感ぜずに見てゐない。見て居れば必ず感ずるに違ひない。
contemplate=view mentally. 心の眼で見る意。
become disinherited=廢嫡される。
evolution or revolution=進化は徐々たる漸次的發達、革命は急激な上下轉顚の變化。
what does it matte=**r**何の關する所があらう。it は whether 以下。
hold the reins=政權を握る。

ever-increasing fortune.

It seems to me that no amount of political evolution or revolution is going to do us any good unless it is accompanied by evolution or revolution in ideals. What does it matter whether one class holds the reins, or another class holds the reins, if the dominant impulse in the population remains the craving for wealth without the power of discriminating whether or not that wealth is taking forms which promote health and happiness.

A new educational charter—a charter of taste, affirming the rule of dignity, beauty, and simplicity, is wanted before political change can turn out to be anything but cheap-jack nostrums, and a mere shuffling around.

I would just cite three of the many changes necessary for any advance:

(1) The reduction of working hours to a point that would enable men and women to live lives of wider interest.

(2) The abolition of smoke—which surely should not be beyond attainment in this scientific age.

(3) The rescue of educational forces from the grip of vested interests.

---

charter=元來は國王が個人や會社に土地の開墾や營業を許可する文書であるが、玆では人心開拓の特許權が確立すること。

is wanted before......can=......し得る前に必要である......あつて後初めて......し得る。

turn out to be=prove to be......たることが明かになる。

anything but=決して......でない。

なくて、それから廢嫡されてゐる樣な感じがするに相違ない。

如何程澤山政治上の進化乃至革命があつても、若しそれに理想に於ける進化乃至革命が伴はなければ、吾々には何等の利益も齎らすものでない樣に私には思はれる。若し國民の內に在る優勢な衝動にして、依然として富に對する渴望——その富が果して健康と幸福とを增進する樣な形態を取りつゝあるかどうかを辨別する能力もない單なる富に對する渴望である限り、甲の階級が支配權を握るか、乙の階級が支配權を握るかと云ふことは、何の關する所もないのである。

一つの敎育上の新特許狀——即ち威嚴と美と單純性との規則を肯定する所の趣味性の特許狀が與へられて後にこそ初めて、政治上の變化も、決して行商人の山師藥でも、單なる混ぜ返しでもないことが明かになり得るのである。

私は玆に、苟も進步に必要な幾多の變化の中で唯だ三つだけを擧げて置き度い。

第一、一般男女をして一層廣汎な興味の生活を送ることを得しむる點にまで勞働時間を短縮すること。

第二、煤煙の除去——これは今日の樣な科學の時代に於ては、確かに企及し得られないことではあるまい。

第三、金權閥の手から敎育軍を救出すこと。

私は有らゆる敎育施設を國家の手で賄つて貰い度いが、凡て

---

cheap-jack=travelling hawker.

nostrum=籔醫の藥、がまの油と云つた樣なもの。

be beyond attainment=到達の範圍を越えてゐる。

educational forces=學校は固より新聞雜誌その他一般社會の敎育に關係ある諸機關。

vested interests=旣得金權團、金權を握つてゐる階級。

I would have all educational institutions financed by the State, but give all the *directing* power to heads of education elected by the main body of teachers themselves. I would not have education dependent on advertisement or on charity. I would not even have newspapers, which are an educational force—though you might not always think so—dependent on advertisements. A newspaper man told me the other day that his paper had printed an article drawing attention to the deleteriousness of a certain product. The manufacturers of that product sent an ultimatum drawing the editor's attention to the deleteriousness of their advertising in a journal which printed such articles. The result was perfect peace. What chance is there of rescuing newspapers, for instance, until education has implanted in the rising generation the feeling that to accept money for what you know is doing harm to your neighbours, is not playing the game. Or take another instance: Not long ago in England a College for the training of school-teachers desired to make certain excellent advances in their curriculum, which did not meet with the approval of the municipal powers controlling the College. A short, sharp fight, and again perfect peace.

I suppose it would be too sweeping to say that a vested interest never yet held an enlightened

---

main body＝中心團體。

dependent on＝……に依つて生きて行く。

の支配權は教師自身の中堅から選ばれた教育の首腦者に與へる様にし度い。私は教育を、廣告や、寄附金に依存せしめ度くない。私は新聞——諸君は必ずしも常にさうは考へないかも知れないが、これは矢張り教育上の一動力である。——これが廣告に依存することさへもさせ度くない。或る新聞記者が先日私に話したことであるが、その新聞に、或る生産品の有害であることに世間の注意を引く一論說を揭げたことがあつた。その生產品の製造者等は斯樣な論文を載せる新聞に自分達が廣告することは有害であると云ふことに、その主筆の注意を促した一つの最後通牒を送つた。その結果は圓くおさまつて了つた。例へば教育が青年に、隣人に危害を加へてゐることを自ら承知してゐるものに對して金錢を貰ふのは立派な振舞ではないと云ふ感じを植え付けて了ふまでは、新聞を救濟する見込が果してあるだらうか。更にも一つ例を取らう。餘り前のことではないが、英國で、學校教師を養成する某大學が、學生の課程に或る卓越した改正を加へ度いと希望した。處でそれはその大學を管理する市當局の贊成を得なかつた。一寸の間激烈な論爭があつたが、又再び圓くおさまつて了つた。

如何なる金權閥でも未だ曾て進步した見解を抱いたことがないと斷言するのは、餘りに十束一からげ的だらうと想ふが、彼

---

play the game＝behave honorably.

sweeping＝一掃的、總括的。

view, but I think one may fairly say that their enlightened views are rare birds.

How, then, is any emancipation to come? I know not, unless we take to looking on Education as the hub of the wheel—the Schools, the Arts, the Press; and concentrate our thoughts on the best means of manning these agencies with men and women of real honesty and vision, and giving them real power to effect in the rising generation the evolution of ethics and taste, in accordance with the rules of dignity, beauty, and simplicity.

---

one may fairly say=人は云つても不當ではない。
rare birds=珍鳥から珍しい掘出し物の意。

等の進步した見解は珍しい見付け物だ位のことは充分云ひ得ると私は考へてゐる。

然らば、苟も解放なるものは如何にして來るものであらうか。吾々が教育をば——即ち學校や、藝術や、新聞やをば車の樞軸と看做す樣にならなければ、そして、これ等の機關に眞の誠意と理想とを有つた人達を就かしめて、その人達に威嚴と美と單純性の規則に一致した論理と趣味の進化を青年に實現するだけの實權を與へる最善の手段に就いて吾々の考を集中するのでなければ、私はそれが如何にして來るかを知らないのである。

---

take to=fall into the habit of.
hub=こしき(轂)

VII

TALKING AT LARGE

It is of the main new factors which have come into the life of the civilised world that I would speak.

The division deep and subtle between those who have fought and those who have not fought —concerns us in Europe far more than you in America; for in proportion to your population the number of your soldiers who actually fought has been small, compared with the number in any belligerent European country. And I think that so far as you are concerned the division will soon disappear, for the iron had not time to enter into the souls of your soldiers. For us in Europe, however, this factor is very tremendous, and will take a long time to wear away. In my country the, as it were, professional English dislike to the expression of feeling, which strikes every American so forcibly, covers very deep hearts and highly

---

so far as you are concerned=他の國民のことは別として米國民だけに就いて云へば。

the iron had not time......of your soldiers=米國の將卒が非常な苦痛を嘗める時間がなかつた。the iron entered into one's soul（非常な苦痛を味つた）to have the iron enter into one's soul（斷腸の思がす

第七

大衆に語る

私が今お話し度いと思つてゐることは、文明社會の生活に新に這入つて來た所の主要なる諸要素に就いてゞある。

戰爭に直接たづさはつた人達と、たづさはらなかつた人達との間の深刻にして微妙な差別は、米國に於ける諸君よりも、歐羅巴に於ける吾々に關する所が遙かに多い。何故なれば米國の人口に比して實戰に參加した米國の將卒の數は、これを歐羅巴の孰れの交戰國に於ける數に較べても、少數であつた。加之諸君の關する限りに於ては、その差別も軈ては消失するだらうと思ふ。何故なれば、錬獄の苦痛が米國の將卒の胸にしみじみとこたへるだけの時間がなかつたからである。これに反して歐羅巴に在る吾々に取つては、この要素は極めて著しく、從つてそれが消え去るのにも長い時間がかゝることであらう。私の國では、感情の表白に對する英國人一流の謂はゞ得意の嫌惡の念があつて、それは凡ての米國人に極めて强く響くものであるが、さうした傾向が極めて深刻な心と非常に敏感な神經とを掩つてゐる。普通の英人は今日では決して心の奧底から無感覺な譯で

る）など云ふ。

the, as it were, professional English dislike=專門的とも謂ふべき英國人の嫌惡の情。

strike=驚かせる、異樣の感を抱かせる。

sensitive nerves. The average Briton is now not at all stolid underneath; I think he has changed a great deal in this last century, owing to the town life which seven-tenths of our population lead. Perhaps only of the Briton may one still invent the picture which appeared in *Punch* in the autumn of 1914—of the steward on a battleship asking the naval lieutenant: "Will you take your bath before or after the engagement, sir?" and only among Britons overhear one stoker say to another in the heat of a sea-fight: "Well, wot I say is—'E ought to 'ave married 'er." For all that, the Briton feels deeply; and on those who have fought the experiences of the battlefield have had an effect which almost amounts to metamorphosis. There are now two breeds of British people—such as have been long in the danger zones, and such as have not; shading, of course, into each other through the many who have just smelled powder and peril, and the very few whose imaginations are vibrant enough to have lived the two lives, while only living one.

Perhaps only......invent the picture=It is perhaps only of the Briton that one may still invent the picture......

overhear=聽くともなしに聞へて來る。小耳に挾む。

in the heat of=in the midst of.

Nell, wot (what) I say is=本當に、實を言へばの意。

'E ought to 'ave married 'er=He ought to have married her.

For all that= 死生の境に身を置きながらそれを感じない程鈍感な所があるにも拘らずの意。

amount to=......に達する、......に等しい。

はない。想ふに、英人は過去一世紀間に非常に變化して來てゐる。それは英國民の十分の七が送つてゐる都市生活の爲めである。一九一四年の秋パンチ誌に出てゐた漫畫であるが——戰鬪艦の炊事係が副長に向つて「湯には戰爭の前にお入りですか濟んでからですか」と訊いてゐる畫——さうした繪が今でも尙思ひ付かれ得るのは、恐らく英人に就いてのみのことではあらう。又海戰の眞最中に一人の火夫が今一人の火夫に「實を云やあ、彼奴も彼女と結婚して置けばよかつたになあ」と話し掛けてゐるのが小耳に挾まれ得るのも、いかにも英人の間だけのことではあらう。併しそれにも拘らず、英人は今や深刻に物に感ずる。實戰を經て來た人達に對して、戰場の體驗は、殆ど變形にも等しい影響を齎らしたのである。現在の處英國民に二種類ある。危險地帶に長くゐたことのある連中と、ゐたことのない連中とである。尤もその兩者の間にはほんの、火藥や危險の臭を嗅いたばかりと云つた位の者が大勢あり、又極めて少數ではあるが、想像力が鋭敏で、實は唯だ一方の生活を送つたのみであるが、兩方の生活を送つたと同じ位に想像力が震動してゐる者もあつて、濃淡様々な階段を爲してゐるのは云ふまでもない。

---

metamorphosis=昆蟲の幼蟲から成蟲に形態を一變する如き變形。

breed=家畜などの種類。

shading into each other through the many......and the very few......=......の多くの者と......の極めて少數者とを通じて前者の要素を具へながら後者に近いものや、後者の要素を具へながら前者に近いものなど色取り取りである。 shading は花瓣などの色の赤から白とか、黄から赤とかに次第にぼかされてゐることを云ふ。

two lives=二種の生活。

while only living one=while they were only living one life.

In a certain cool paper called: "The Balance-sheet of the Soldier Workman" I tried to come at the effect of the war; but purposely pitched it in a low and sober key; and there is a much more poignant tale of change to tell of each individual human being.

Take a man who, when the war broke out (or had been raging perhaps a year), was living the ordinary Briton's life, in factory, shop, and home. Suppose that he went through that deep, sharp struggle between the pull of home love and interests, and the pull of country (for I hope it will never be forgotten that five million Britons were volunteers) and came out committed to his country. That then he had to submit to being rattled at great speed into the soldier-shape which we Britons and you Americans have been brought up to regard as but the half of a free man; that then he was plunged into such a hideous hell of horrible danger and discomfort as this planet has never seen; came out of it time and again, went back into it time and again; and finally emerged, shattered or unscathed, with a spirit at once uplifted and enlarged, yet

"The Balance-sheet of the Soldier Workman"=曾つて兵士であつて戰後職工となつた者の長所、短所の比較と云つた様なものに就いての論文。

come at=discover.

pitch=express in a particular style.

a much more poignant tale=この論文に述べたものよりも遙かに深刻な話。poignant=piercing.

私は曾て「兵卒勞働者の貸借對照表」と題する冷やかな一論文で、戰爭の影響を突き止めて見やうと試みたことがあつた。尤も態とそれを低い冷靜な調子でと述べて置いた。それで個々の人間各自に就いて語るべき變化の話は、これよりもずつと深刻なのがある。

今、戰爭が始つた頃（或は始つてから一ケ年位經つた頃か）に、工場や、商店や、家庭に於て、普通の英人の生活を送つてゐた人を例に取つて見やう。今假りに、その人が、家庭愛と利害感との引力と、國家の引力との間の、あの深刻な激烈な胸の悶えを通り拔けて（と云ふのは五百萬の英人が志願兵となつたことは決して忘れてはならぬと思ふからである）遂に彼れの國に身を委ねる決心が付いて出て來たとする。それから彼れは、大速力でがちやがちやと仕込まれて所謂軍人型——從來吾々英人も諸君米人も共に、自由人の半人前しかないと看做す様に育てられて來てゐる所の軍人型に仕上げられることに甘んじなければならなかつたとする。それから彼れは、地球上未だ曾てなかつた様な、あの戰慄すべき危險と不安との恐しい地獄にほり込まれて、再三再四それから出て來ては、再三再四又その中に戻る。そして終には、負傷の有無は別として、兎に角昂揚され擴大されながらも、同時に昔の平和な生活に歸へることの出來ない様に打ち潰され、狂はされた精神を抱いて現はれて來たと

the pull=attraction.

be rattled into=大騒して仕込まれる。

as but the half of a free man=自由人の半分しかないものとして。

time and again=many a time, time after time.

shattered or unscathed=whether......or......

at once=at the same time.

bruised and ungeared for the old life of peace. Imagine such a man set back among those who have not been driven and grilled and crucified. What would he feel, and how bear himself? On the surface he would no doubt disguise the fact that he felt different from his neighbours—he would conform; but something within him would ever be stirring, a sort of superiority, an impatient sense that he had been through it and they had not; the feeling, too, that he had seen the bottom of things, that nothing he could ever experience again would give him the sensations he had had out there; that he had lived, and there could be nothing more to it. I don't think that we others quite realise what it must mean to those men, most of them under thirty, to have been stretched to the uttermost, to have no illusions left, and yet have, perhaps, forty years still to live. There is something gained in them, but there's something gone from them. The old sanctions, the old values won't hold; are there any sanctions and values which can be made to hold? A kind of unreality must needs cling about their lives henceforth. This is a finespun way of

---

ungeared=歯車がはづされて、狂はされて。
bear oneself=振舞ふ。
conform=世間並のことをして行く。
an impatient sense=隔靴掻痒と云つた様な感。
be stretched=張詰めさせられる。
sanction=道德や習慣や良心などの制裁。
value=善や美のこと。
unreality=現實を離れた幻影的な感。

假定する。斯樣な人が、驅られて、燒かれて、磔にされたことのない人達の中に戾されたのを想像して見るがよい。彼れは何と感ずるだらうか。どう云ふ風に振る舞ふだらうか。表面上は無論彼れは、自分が隣人とは異つた感じを有つてゐる事實を隱すだらう、——即ち、世間と一致するだらう。併し彼れの胸の內には常に、或るものがムクムクと動いてゐる。即ち一種の優越感、自分はそれを通り拔けて來たが、彼等はさうでないと云ふ一種のもどかしい感じが動いてゐるのである。更に又、自分は事物のドン底を見て來たと云ふ感じ、今後再び經驗し得る樣な事は如何なる事でも、到底あそこに行つて經驗した感覺は與へないと云ふ感じ、自分は既に人生を送つて了つた、これ以上吾が生に加ふべきものは到底あり得ないと云つた感じも動いてゐるのである。私は、それ等の人達に取つて——彼等の大部分は三十歲以下であるが——極度に張り詰めた氣持にされ、人生の夢があとに一つも殘されてゐない、而かも未だ多分四十年の餘命があると云ふことが、果して何を意味するだらうかと云ふことが、吾々他人にもよく吞み込めるなどゝは思つてゐない。彼等には得たものもあるが、又失つたものもある。舊來の制裁、舊來の價値は、到底持ちこたへない。と云つて何等か持ちこたへる樣にせられ得る制裁と價値とがあるであらうか。必ずや一種の非現實感が、今後の彼等の生活に附纏ふに相違ない。これは聊か微妙な云ひ表はし方ではあるが、併し私は、根本に

---

putting it=expressing it.

what had become to him the ultimate reality=軍人に取つては戰爭が究極の目的即ち實在であつてそれまでに至る有らゆる生活は手段方便であり從つて a sham に過ぎないとの意。

has been not so much a war as a prolonged piece of very horrible carnage=has been rather a prolonged piece of very horrible carnage than a war.

putting it, but I think, at bottom, true.

The old professional soldier lived for his soldiering. At the end of a war (however terrible) there was left to him a vista of more wars, more of what had become to him the ultimate reality—his business in life. For these temporary soldiers of what has been not so much a war as a prolonged piece of very horrible carnage, there succeeds something so mild in sensation that it simply will not fill the void. When the dish of life has lost its savour, by reason of violent and uttermost experience, wherewith shall it be salted?

The American Civil War was very long and very dreadful, but it was a human and humane business compared to what Europe has just come through. There is no analogy in history for the present moment. An old soldier of that Civil War, after hearing these words, wrote me an account of his after-career which shows that in exceptional cases a life so stirring, full, and even dangerful may be lived that no void is felt. But one swallow does not make a summer, nor will a few hundreds or even thousands of such lives leaven to any extent the vast lump of human material used in this war. The spiritual point is this: In front of a man in ordinary civilised existence there hovers ever that moment in the future when he expects to prove

---

be salted=be seasoned.
compared to=compared with. 較ぶれば。
one swallow does not make a summer=(諺)例外で以つて全體を推斷することは出來ないとの意。

於て眞實だと思つてゐる。

舊來の本職の軍人は、自分が軍人としての仕事をすることの爲めに生活してゐた。戰爭は終つても（それが如何に戰慄すべきものであつたとしても）彼れには、まだまだ戰爭があると云ふ見通しが殘されてゐた。即ち彼れに取つては究極の實在となつてゐるもの——人生に於ける彼れの仕事が、未だあると云ふ見通しが殘されてゐたのである。處で、戰爭と云ふよりは、寧ろ極めて恐るべき殺戮の長期に亘る一悲劇とも云ふべきものに參加してゐたこれ等の一時的の軍人に取つては、感覺に於ては極めて穩和であつて、唯だ空虚が充たされないと云つた程度の或るものが、戰後に續いてゐる。人生の珍味が、激烈にして極端なる體驗の爲めに、その風味を失つた曉には、何を以つてそれは調味さるべきであらうか。

米國の南北戰爭は、極めて長く且つ極めて恐るべきものではあつたが、併し、歐洲が今通り拔けて來たばかり戰爭に較べると、それは人間味あり人情味ある所の仕事であつた。今度の戰爭に對しては差當り歷史上比類がないのである。その南北戰爭に從軍した一老軍人が、これ等の話を耳にして後に、彼れの戰後の經歷の話を書いた手紙を私に呉れた。その話に依れば、例外の場合としては、何等の空虛も感じられない程活躍した。充實した、危なかしいとさへも思はれる程の生活が送られ得るものだと云ふことが分かる。併し一羽の燕では夏になるものではない。そして又斯樣な人の生活が數百、否、數千あつたとて、今度の戰爭に用ゐられた人間の莫大な群を、多少でも醱酵させるものでもあるまい。精神的の要點は詰りかうである。普通の文明の生活を送つてゐる人にあつては、その人がこれまで立證し

---

leaven=活躍せしむること。
to any extent=何等かの程度に、云ふに足る程に。
the vast lump of human material=人間的材料の莫大な塊。

himself more of a man than he has yet proved himself. For these soldiers of the Great Carnage the moment of probation is already in the past. They *have* proved themselves as they will never have the chance to do again, and secretly they know it. One talks of their powers of heroism and sacrifice being wanted just as much in time of Peace; but that cannot really be so, because Peace times do not demand men's lives—which is the ultimate test—with every minute that passes. No, the great moment of their existence lies behind them, young though so many of them are. This makes them at once greater than us, yet in a way smaller, because they have lost the power and hope of expansion. They have lived their masterpiece already. Human nature is elastic, and hope springs eternal; but a *climax* of experience and sensation cannot be repeated; I think these have reached and passed the uttermost climax; and in Europe they number millions.

This is a veritable portent, and I am glad that in America you will not have it to any great extent.

---

just as much in time of Peace=その後に as in time of War がある積りで讀む。

with every minute that passes=過ぎ行く有らゆる瞬間と共に、時々刻々に。

in a way=in a certain sense.

て來た以上に、自分が一個の男子たることを立證しやうと期待する様なさうした時機が、何時でも、將來にかゝつてゐるものである。處で今度の大殺戮劇に參加したこれ等の軍人に取つては、さうした試錬の時機は既に過去となつてゐるのである。彼等は將來決して二度と立證する機會を有たないのであるから、彼等は既に自己を立證して了つてゐる。而かもそれを彼等は心私かに承知してゐるのである。人はよく、彼等の任俠と犧牲との力が、平時に於ても戰時と正に同じ位に社會から要求されてゐることを口にするが、併し事實は到底さうあり得ない。何故なれば、平時は、時々刻々に、人々の生命を要求すること——それが即ち究極の試金石であるが——をしないからである。否、實に、彼等の生存の重大時機は彼等の過去に存してゐる、彼等の大多數は未だ若いにも拘らず。このことが彼等をして、吾々よりも偉大ならしむると同時に、而かも又或る意味に於ては吾々よりも小さからしめてゐる、と云ふのは彼等は膨脹の力と見込とを失つて了つてゐるからである。即ち彼等は既にその出世作たる生活を送つて了つたのである。いかにも人性には彈力性もあり、希望は永久に萠へ出るものではある。併し經驗と感覺との極點は、到底再び繰り返へされ得るものではない。想ふにこれ等の人達は、既に究極の頂點に到達してそれを通り越えたものである。そして歐羅巴に於ては、彼等の數は幾百萬にも上つてゐる。

これは實に紛ふべくもない兇兆である。そして米國に於ては諸君がさうした兆候を何等大した程度に有つ様にならないことを私はお悦び申し上げる。

---

masterpiece=傑作、元來は中世紀の職業組合 (guild) に於て journeyman (職人) が master (棟梁) になる時の作品を云つたものである。

climax=最高潮。

number millions=數百萬を以て數へられる。

Now how does this affect the future? Roughly speaking it must, I think, have a diminishing effect on what I may call loosely —Creative ability. People have often said to me: "We shall have great writings and paintings from these young men when they come back." We shall certainly have poignant expression of their experiences and sufferings; and the best books and paintings of the war itself are probably yet to come. But, taking the long view, I do not believe we shall have from them, in the end, as much creative art and literature as we should have had if they had not been through the war. Illusion about life, and interest in ordinary daily experience and emotion, which after all, are to be the stuff of their future as of ours, has in a way been blunted or destroyed for them. And in the other provinces of life, in industry, in trade, in affairs, how can we expect from men who have seen the utter uselessness of money or comfort or power in the last resort, the same naïve faith in these things, or the same driving energy towards the attaining of them that we others exhibit?

We shall certainly have......=It is true we shall have.
taking the long view=when we look at the distant future.
as we should have had......through the war=彼等が戰爭を經なかつ間と假定した場合に吾々が彼等から與へられるであらう創造的な文學や藝術やと同じ。

さて、これが將來にどう云ふ風に影響するであらうか。大づかみに云へば、それは、私が大ざつぱに創造的能力とでも名付けて得るものに對して減殺的效果を齎らすに相違ないと思ふ。世人は屢々私にかう云つたことがある。「これ等の若い人達が歸つて來た暁には、吾々は彼等から偉大なる文學や繪畫を與へられるであらう」と。いかにも吾々は、彼等の經驗と苦惱の辛辣な表白は確かに與へられるに相違ない。從つて戰爭そのものに就いての最良の文學や繪畫やは、蓋し今後に待つべきものであらう。併し目先のことを考へずに長い目で見ると假りに彼等が戰爭を經なかつたとした場合に吾々に與へてくれたであらうものと同じ位に創造的な藝術や文學やは、結局の處、吾々は彼等からは與へられさうにもないと私は信じてゐる。人生に就いての夢や、有りふれた日常の經驗や情緒に對する關心やは、兎に角、吾々の未來を形作る素材であると同樣に彼等の未來をも形作る素材であるべき筈ものであるが、それ等が、或る意味に於て彼等に對しては鈍くされ、破壞されて了つたのである。そして人生の他の方面、即ち工業や、商業や、政治に於ても、最後の手段としては、金錢でも、快樂でも、權力でも全然無用であることを悟つた人達から、吾々他の人々が示してゐるのと同樣なこれ等の事柄に對する素朴な信仰、乃至はそれ等を獲得せんとする同樣な原動的精力を、吾々はどうして期待することが出來やうか。

---

other provinces of life=other fields or departments of life.
in the last resort=as the final attempt when all else has failed. 即ち戰爭のこと。
naïve (na:i:v) faith=單純に無批判に信ずること。
driving energy=人を動かし働かせる精力。

It may be cheering to assume that those who have been almost superhuman these last four years in one environment will continue to be almost superhuman under conditions the very opposite. But alack! it is not logical.

On the other hand I think that those who have had this great and racking experience will be left, for the most part, with a real passion for Justice; and that this will have a profoundly modifying effect on social conditions. I think, too, that many of them will have a sort of passion for humaneness, which will, if you will suffer me to say so, come in very handy; for I have observed that the rest of us, through reading about horrors, have lost the edge of our gentleness, and have got into the habit of thinking that it is the business of women and children to starve, if they happen to be German; of creatures to be underfed and overworked if they happen to be horses; of families to be broken up if they happen to be aliens; and that a general carelessness as to what suffering is necessary and what is not, has set in. And, queer as it may seem, I look to those who have been in the thick of the worst suffering the world has ever seen, to

---

in one environment=爰では戰爭のこと、從つてその反對は平和の狀態。

you will suffer me=you will permit (allow) me.

come in=serve a purpose.

the edge=the sharpness.

get into the habit of=……の癖になる。

最近四年間、或る一つの環境に於て、殆ど超人的であつたあの人達のことだから、それとは正反對の境遇の下に於ても、矢張り殆ど超人的であるだらうと假定して置くのは、いかにも景氣のいゝことかも知れない。併し悲しい哉、それは論理に合はないのである。

併し又他方に於て、この身を引き千切る樣な大體驗をして來た人達は、大槪は、その後になつても矢張り正義に對する眞の熱愛を有つてゐることになり、そしてそれが社會狀態の上に深刻な變化を齎らす樣な影響を及ぼすことになるだらうとも考へられる。そして又彼等の多くは人情味と云ふことに對して一種の熱愛を抱く樣になつて、それが若し諸君がかうした言ひ方を私に許さるゝならば——極めて手頃に役立つ樣になるだらうとも私には考へられる。何故なれば、私の觀察した所では、吾々の中で彼等以外の連中は、樣々な悲慘事の記事を讀むことに依つて、吾々の柔和性の敏感を失つて了つて、婦人や子供が、偶々獨逸人であれば、餓ゑるのは當然であり、生物が、偶々馬であれば、充分に食はせずに過度にこき使はれるのは當然であり、家族は、偶々外人であれば、別かれるのは當然だと考へる癖になつて了つてゐる。そして如何なる苦痛は必然的で、如何なるものはさうでないかと云ふことに關する一般の無頓着が起つて來てゐる樣に見へるからである。そして奇妙に思はれるかも知れないが、私は、之迄にない最も甚しい苦惱の眞唯中にゐた人

---

it is the business of=it is the natural course of events of.

of creatures, of families=の前に it is the business が省略されてゐる。

queer as it may seem=though it may seem queer.

look to=expect.

in the thick of=in the midst of.

set us in the right path again, and to correct the vitriolic sentiments engenderd by the armchair and the inkpot, in times such as we have been and are still passing through. A cloistered life in times like these engenders bile; in fact, I think it always does. For sheer ferocity there is no place, you will have noticed, like a club full of old gentlemen. I expect the men who have come home from killing each other to show us the way back to brotherliness! And not before it's wanted. Here is a little true story of war-time, when all men were supposed to be brothers if they belonged to the same nation. In the fifth year of the war two men sat alone in a railway carriage. One, pale, young, and rather worn, had an unlighted cigarette in his mouth. The other, elderly, prosperous, and of a ruddy countenance, was smoking a large cigar.

The young man, who looked as if his days were strenuous, took his unlighted cigarette from his mouth, gazed at it, searched his pockets, and looked at the elderly man. His nose twitched, vibrated by the scent of the cigar, and he said suddenly:

"Could you give me a light, sir?"

The elderly man regarded him for a moment, drooped his eyelids, and murmured:

---

engendered by the armchair and the inkpot＝新聞や書物に依つて生ぜしめられた所の。

A cloistered life＝隱遁的世活、學者や文士や記者の樣な書齋を云ふ僧院に閉ぢ籠つた生活。

like a club full of old gentlemen＝老紳士で一杯になつてゐるクラブには新に若い紳士の這入る餘地はないと同じ樣にこれまで既に

達に對して、吾々が今日まで經過して來た、そして現に尙經過しつゝある樣な時代に於て、吾々を再び正しき途に戻して、安樂椅子とインキ壺とに依つて釀成された殘忍な感情を匡正せんことを期待してゐる。書齋生活は今日の樣な時代に於ては癇癪を生ずるものである。私は現に實際常に生じてゐると思ふ。單なる兇暴は老紳士で一杯になつてゐるクラブの樣に、もうそれを容れる餘地はないことに諸君も氣付かれるであらう。私はお互の殺し合ひから歸つて來た人達が再び元の友愛へ歸へる途を吾々に敎へて吳れることを期待してゐる。それもその要求の起らない以前にと云ふのではない。苟も同一國民に屬する限り、凡ての人は兄弟だと思はれてゐた戰時の一小實話をお話して見やう。大戰の第五年目に、或る鐵道の客車の中に男が二人きり腰を掛けてゐた。一方の色の靑さめた、年の若い、稍や疲れた樣な男は、火の附いてゐない紙卷煙草を口にくわへてゐた。今一方の相當年輩の、裕福な、赭ら顏の男は、大きな葉卷をふかしてゐた。

若い男は、その生活に苦勞が多かつた樣な顏付であつたが、自分の火の付いてゐない紙卷を口から取つて、それをじつと見詰めて、ポケツトを探がし、それから年とつた男を見た。彼れの鼻は、葉卷の香でピクピクと震へた。突然彼れは云つた。

「火を附けさせて下さいませんでせうか。」

年輩の男は、暫らく彼れを見てゐたが、眼瞼をおとして、つぶやいた。

兇暴の限りを盡して來たので單なる兇暴な行爲は起る餘地がない。

And not before it's wanted＝要求もないのに親切の押賣は困るとの意。

as if his days were strenuous＝相當骨の折れる生活を送つて來た樣な。

"I've no matches."

The young man sighed, mumbling the cigarette in his watering lips, then said very suddenly:

"Perhaps you'll kindly give me a light from your cigar, sir."

The elderly man moved throughout his body as if something very sacred had been touched within him.

"I'd rather not," he said; "if you don't mind."

A quarter of an hour passed, while the young man's cigarette grew moister, and the elder man's cigar shorter. Then the latter stirred, took it from under his grey moustache, looked critically at it, held it out a little way towards the other with the side which was least burned-down foremost, and said:

"Unless you'd like to take it from the edge."

On the other hand one has often travelled in these last years with extreme embarrassment because our soldiers were so extraordinarily anxious that one should smoke their cigarettes, eat their apples, and their sausages. The marvels of comradeship they have performed would fill the libraries of the world.

The second main new factor in the world's life is the disappearance of the old autocracies.

In 1910, walking in Hyde Park with a writer friend, I remember saying: "It's the hereditary autocracies in Germany, Austria, ane Russia which

---

I'd rather not=I would rather not give you a light from my cigar.

「マッチを持つてゐません。」

若い男は、唾で濕つた唇で紙卷をもぐもぐしながら溜息を吐いた。それから唐突に云つた。

「どうかあなたの葉卷から火を附けさせて頂けませんでせうか。」

年輩の男は、胸の中の何か極めて神聖なものに觸られでもしたかの樣に、全身を動かした。

「出來ることなら御免を蒙り度い。」

十五分計り經つた。その間に若い男の紙卷は濕つて來る。年とつた男の葉卷は段々短かくなつて來た。その時年とつた男は身動きした。半白の口髭の下からその葉卷を取つて、それを仔細に眺めた。そしてその一番燒け殘つてゐた側を前に向けて、相手の方に少し差し出して云つた。

「あなたが端の方から附け度いと云ふと困るのだが。」

これに反して、近年人が旅行をする時に、吾國の軍人が、人に自分の煙草を喫はせやう、自分の林檎や腸詰を食べさせやうと余り極端に心使ひするので、却つて非常に迷惑することが屢々ある。彼等がこれまで振舞つて來た戰友扱ひの珍談は、世界の圖書館に一杯になるだらう。

世界の生活に於ける第二の主要なる新要素は、舊專制政治の消滅である。

一九一〇年に、著述家の一友人とハイド・パークを歩いてゐた時に、私は「戰爭の危險を醸するのは、獨逸、墺土利、露西亞に於ける世襲的專制政治だ」と云つたこと記憶してゐる。尤

---

if you don't mind=if you have no objection.
critically=隅から隅まで。

make the danger of war." He did not agree—but no two writers agree with each other at any given moment. "If only autocracies go down in the wreckage of this war!" was almost the first thought I put down in writing when the war broke out. Well, they are gone! They were an anachronism, and without them and the bureaucracies and secrecy which buttressed them we should not, I think, have had this world catastrophe. But let us not too glibly assume that the forms of government which take their place can steer the battered ships of the nations in the very troubled waters of to-day, or that they will be truly democratic. Even highly democratic statesmen have been known to resort to the way of the headmaster at my old school, who put a motion to the masters' meeting and asked for a show of hands in its favour. Not one hand was held up. "Then," he said, "I shall adopt it with the greater regret." Nevertheless, the essential new factor is, that, whereas in 1914 civilisation was on two planes, it is now, theoretically, at least, on the one democratic plane or level. That is a great easing of the world-situation, and removes a chief cause of international misunderstanding. The rest depends on what we can now make of democracy. Surely no word can so easily be taken in vain; to have

---

no two writers......at any given moment=著述家と云ふものは皆々個々別々の意見を有つてゐるもので何時でも他人の云つたことに反對するものだとの意。

with the greater regret=全部反對は一部の反對よりは一層遺憾ではあるが、全部反對しても決行する位なら初から相談せぬがよい、併

も友人はそれに賛成しなかつた。——併し如何なる二人の著述家でも、或る與へられたる時期に於いて、決して互に相一致するものではない。「若し諸々の專制々度が、此度の戰爭と云ふ難船で沈沒しさへすればなあ」とは、大戰が勃發した當時に私が書き留めた殆ど最初の考であつた。さて今日では愈々それ等は沈沒して了つてゐる。それ等は時代錯誤の代物であつた。若しもそ等れとそれを防護してゐた官僚政治と秘密主義とがなかつたならば、吾々は今度の世界的慘劇に逢ふこともなかつたであらうと私は思つてゐる。併しそれ等に代つて表はれてゐる政治形態が、今日の極めて風波の荒い海で、諸國民の打ち壞はされた船を操縱して行くことが出來るとか、或はそれ等の政治形態が眞に民主的なものとなるだらうとか云ふことを、吾々は余りに輕々に假定してはいけない、非常に民主的な政治家ですらもが、私の出身の學校に於ける校長の遣り口を遣つてゐることが明かにされて來た。その校長と云ふのは、教員會議に一つの動議を提出して、賛成の人に擧手を乞ふた。處で一も手は上がらなかつた。「では、私は一層遺憾の情を以つてそれを採用します」と云つたのである。それでも、一九一四年には文明が二つの平面の上にあつたものだが、今日ではそれが、少くとも理論的には、民主的と云ふ一平面乃至水平線上にあると云ふことは、矢張り本質的な新要素である。このことは、世界の情勢を非常に楽にするものであり、國際間の誤解の主なる原因を除くものである。その餘の事は、吾々が今日民主主義をどんなものに作り上げ得るか

し民主々義の形だけ整へる爲めに相談だけはするがその結果は自己の意志の遂行に何等影響しない、唯だ遺憾の度が強いだけだ。

easing=楽にすること。

The rest=前の二つの事項以外のこと。

be taken in vain=輕々に濫用される。

got rid of the hereditary principle in government is by no means to have made democracy a real thing. Democracy is neither government by rabble, nor government by caucus. Its measure as a beneficent principle is the measure of the intelligence, honesty, public spirit, and independence of the average voter. The voter who goes to the poll blind of an eye and with a cast in the other, so that he sees no issue clear, and every issue only in so far as it affects him personally, is not precisely the sort of ultimate administrative power we want. Intelligent, honest, public-spirited, and independent voters guarantee an honest and intelligent governing body. The best men the best government is a truism which cannot be refuted. Democracy to be real and effective must succeed in throwing up into the positions of administrative power the most trustworthy of its able citizens. In other words it must incorporate and make use of the principle of aristocracy; government by the best—*best in spirit*, not best-born. Rightly seen, there is no tug between democracy and aristocracy; aristacracy should be the means and machinery by which democracy works itself out. What then can be done to increase in the average voter intelligence and honesty, public spirit and independence? Nothing save by education. The Arts, the Schools, the

---

every issue......him personally=自己の利害の觀點のみから有らゆる問題を見る。

ultimate administrative power=民主制度に於ては選擧民が究極

と云ふことにかゝつてゐる。確かに民主主義と云ふ言葉程輕々に濫用され易い言葉は他にあり得ない。政治に於ける世襲の原則から免れたと云ふことは、決して民主々義を本物にしたと云ふことではない。民主々義とは、決して彌次馬の手で行はれる政治でもなければ、黑幕の幹部連に依つて行はれる政治でもない。世を益する原則としての民主々義の政策は、普通の選擧民の聰明と正直と公共心と獨立心との政策である。一方の眼は盲目で、今一方の眼は籔睨で投票所に行く、從つて如何なる問題でもはつきりと見えないで、凡ての問題を唯それが自分一身に影響する限りに於てのみしか見ない樣な選擧民は、正しく、吾々の要求してゐる類の究極の行政權ではないのである。聰明にして正直、公共心あつて獨立の選擧民にして、正直にして聰明なる政府を確保する。「最善の人民に最善の政治あり」と云ふことは拒否し得べからざる自明の眞理である。民主制度が本物であり有効である爲めには、行政權を握る地位に、その有爲なる國民中の最も信用するに足る人物をかつぎ上げることに成功しなければならない。云ひ換へれば、それは貴族主義の原則をば、即ち最善の——生れに於て最善と云ふのでなく、精神に於て最善の——人々の手に依つて行はれる政治をば織り込み、それを利用しなければならない。本當の處を云へば、民主々義と貴族主義との間には何等の衝突もない。詰り貴族主義は、民主々義が依つて以つて自己の成績を擧げる爲めの手段であり機關であるべきものである。然らば、普通の選擧民に、聰明さと正直と公共心と獨立心とを增す爲めに爲され得ることは何であらうか。それは敎育に依るの外はない。即ち藝術と、學校と、新聞とに

の行政權を握つてゐる、何故なれば行政府である內閣の死命を制するものは議會の頭數の即ち選擧の投票數であるから。

Press. It is impossible to overestimate the need for vigour, breadth, restraint, good taste, enlightenment, and honesty in these three agencies. The artist, the teacher (and among teachers one includes, of course, religious teachers in so far as they concern themselves with the affairs of this world), and the journalist have the future in their hands. As they are fine the future will be fine; as they are mean the future will be mean. The burden is very specially on the shoulders of Public Men, and that most powerful agency the Press, which reports them. Do we realise the extent to which the modern world relies for its opinions on public utterances and the Press? Do we realise how completely we are all in the power of report? Any little lie or exaggerated sentiment uttered by one with a bee in his bonnet, with a principle, or an end to serve, can, if cleverly expressed and distributed, distort the views of thousands, sometimes of millions. Any wilful suppression of truth for Party or personal ends can so falsify our vision of things as to plunge us into endless cruelties and follies. Honesty of thought and speech and written word is a jewel, and they who curb prejudice and seek honourably to know and speak the truth are the only true builders of a better life. But what a dull world if we can't chatter and write irrespon-

---

It is impossible to overestimate=we cannot estimate the need too high=如何程高く見てもよい、測るべからざるものがある。

依るの外はないのである。これ等三つの機關に、力强さ、博大さ、抑制、高尙な趣味、敎養、正直が必要であることは、如何に高く見積つても高過ぎることは決してない。藝術家と、敎育者(敎育者の中には、宗敎家も現世の事柄に干與する限りに於て含まつてゐるのは云ふまでもない)と新聞記者とは未來をその掌中に握つてゐる。彼等にして立派であれば、未來も立派になる彼等にして野卑であれば、未來も野卑になる。この重責は殊に所謂公人なる者と、公人の言動を報道する所の彼の最も有力な機關即ち新聞紙との双肩に在る。近代の社會が、その輿論を作る上に、如何なる程度にまで公表された意見と新聞とに據る所あるかと云ふことが果して吾々に解つてゐるであらうか。吾々皆が、如何程完全に報道の爲め左右されてゐるかと云ふことが果して吾々に解つてゐるであらうか。何處か氣の變になつてゐる人とか、或は主義なり、何にか爲めにする所ある目的なりをもつてゐる人とかが、云つた一寸とした虛言、若しくば誇張された感情にして、若しも巧みに表現され流布せられるならば、幾千、否時としては幾萬の人の見解を歪めさせるだけの力がある。政黨若しくば一身上の目的の爲めに、故意に事實を隱蔽することは、吾々をして殘忍な行爲や愚劣な行動をはてしもなく爲さしむる程に、吾々の物の見方を誤らしむるだけの力を有つてゐる。思想と、言論と、文章との正直は寶玉である。偏見を抑へ付け、眞實を知り且つ語らんと誠意を以つて努めてゐる人達を措いて他に、よりよき人生の眞の建設者はないのである。併し(或は云ふかも知れない)若しも吾々にして無責任に喋つたり書いたりすることも出來ず、憎しみを以つて存分に云ひまくるこ

---

one with a bee in his bonnet=a man who is mad on some point.

sibly, can't slop over with hatred, or pursue our own ends without scruple! To be tied to the apron-strings of truth, or coiffed with the nightcap of silence; who in this age of cheap ink and oratory will submit to such a fate? And yet, if we do not want another seven million violent deaths, another eight million maimed and halt and blind, and if we do not want anarchy, our tongues must be sober, and we must tell the truth. Report, I would almost say, now rules the world and holds the fate of man on the sayings of its many tongues. If the good sense of mankind cannot somehow restrain utterance and cleanse report, Democracy, so highly vaunted, will not save us; and all the glib words of promise spoken might as well have lain unuttered in the throats of orators. We are always in peril under Democracy of taking the line of least resistance and immediate material profit. The gentleman, for instance, whoever he was, who first discovered that he could sell his papers better by undercutting the standard of his rivals, and, appealing to the lower tastes of the Public under the flag of that convenient expression "what the Public wants," made a most evil discovery. The Press is for the most part in the hands of men who know what is good and right. It can be a great agency for levelling up. But whether on the whole it is so or not, one continual-

slop over=喋り散らす。
vaunt=boast.

とも出來ず、遠慮なく自己の目的を追求することも出來ないものとすれば、世の中は何と云ふ面白味のないものであらう。眞實と云ふ前掛けの紐に縛り付けられるか、さもなければ沈默の寢帽を頭からかぶせられるか。このインキや雄辯の安價な時代に誰れかそんな運命に甘んずる者があらうかと。併し、若しも吾々にして更にこの上七百萬の非業の死者、八百萬の不具者、跛者、盲者の出ることを欲しないならば、そして吾々にして無政府狀態を欲しないならば、是非とも吾々の舌は眞面目であり吾々は眞實を語る必要があるのである。新聞の記事は今や世界を支配して、人間の運命をば、その幾多の舌の先きに摑んでゐるとまでも私は云ひ度い。若し人類の思慮分別にして、何とかして言葉を抑制し記事を淸掃することが出來なければ、太鼓を敲き立てられてゐる民主々義も吾々を救うことにはならないであらう。そして凡ての言葉巧みに述べられた約束は、雄辯家の喉に發表されずにゐたのも同然であらう。吾々は民主制度の下に於ては常に、最少の抵抗と直接の物質的利益との方向を取る危險の下にある。例へば競爭相手の標準よりも下に出て、所謂「社會の要求する所」と云ふあの便利な表白の旗の下に、社會の劣等な趣味に訴へ、以つて自分の新聞の賣行をよくすることが出來ると云ふことを最初に發見したお方は、その人の何人であるかを問はず、實に惡い發見をしたものである。現在新聞は大部分、正善の何たるかを承知してゐる人達の掌中に在る。それは一般の水準を向上せしむる一大原動力となり得るものである。

might as well have lain unuttered=云はれなかつたも同然、いくら云はれてもその甲斐がない。

ly hears doubted. There ought to be no room for doubt in any of our minds that the Press is on the side of the angels. It can do as much as any other single agency to raise the level of honesty, intelligence, public spirit, and taste in the average voter, in other words, to build Democracy on a sure foundation. This is a truly tremendous trust; for the safety of civilisation and the happiness of mankind hangs thereby. The saying about little children and the kingdom of heaven was meant for the ears of all those who have it in their power to influence simple folk. To be a good and honest editor, a good and honest journalist is in these days to be a veritable benefactor of mankind.

Now take the function of the artist, of the man who in stone, or music, marble, bronze, paint, or words, can express himself, and his vision of life, truly and beautifully. Can we set limit to his value? The answer is in the affirmative. We set such limitation to his value that he has been known to die of it. And I would only venture to say here that if we don't increase the store we set by him, we shall, in this reach-me-down age of machines and wholesale standardisations, emulate the Goths

---

is on side of the angels＝善に味方する。

The saying about little children and the kingdom of heaven＝基督が幼兒を愛し幼兒の如くにならなければ天國に入るを得ずと說いてゐたことは福音書の諸所に出てゐる。

the store we set by him＝彼れに對する吾々の尊重心。 **set store by** は reckon precious or important の意。

reach-me-down＝(slang) ready-made. 出來合の。

然るに全體として事實果してさうであるかどうかが疑はれてゐるのを人は斷へず耳にしてゐる。元來新聞が善に味方すると云ふことは、吾々の間に疑ふ余地があつてはならぬ筈である。それは一般の選擧民の正直と聰明と公共心と趣味との水準を高める爲めに、云ひ換へれば、民主々義をば確實なる基礎の上に建設する爲めに、他の如何なる單獨の機關にも劣らず貢する所あり得るものである。これは實に非常な信任である。何故なれば文明の安全と人類の幸福とがそれにかゝつてゐるからである。幼兒と天國とに就いての諺は、單純な人々を左右するだけの力を有つてゐる凡ての人達に聞かせる爲めのものであつた。善良にして正直な編輯者たり、善良にして正直な記者たることは、當代に於ては、紛ふべくない人類の恩惠者たることである。

さて今度は、藝術家の機能、即ち石や、音樂や、大理石や、青銅や、繪具や、言葉などに、自己と自己の人生の幻とを如實に且つ美はしく表現し得る人の機能を考へて見やう。吾々は彼れの價値に制限を置くことが出來るであらうか。答は肯定である。吾々彼れの價値に非常な制限を加へてゐるので、彼れはその爲めに死ぬることがあると云はれてゐる。そして私が玆に敢て云ひ度いのは、若し吾々にして、彼れを一層重じなければ、吾々は、この機械と大量的規格統一との既成品時代に於て、曾ては羅馬の美術を破壞することに全力を盡して置いて、十數世紀

---

wholesale standardisation＝卸賣的に大量生產し、そしてその生產物を一定の標準に合致せしめて、そこに個人的技能の働くことを許さない、これを經濟用語として規格統一或は直譯して標準化と云つてゐる。

emulate＝爰では愚を競ふ意。

Goths＝三世紀から五世紀に亘つて東西兩羅馬帝國に侵入したゲルマニヤ民族の一派で伊太利や佛蘭西や西班牙に國を建てた蠻民である、羅馬の文物の破壞者であるが、今日の獨逸人英國人はその子孫である。

who did their best to destroy the art of Rome, and all these centuries later, by way of atonement, have filled the Thiergarten at Berlin and the City of London with peculiar brands of statuary, and are always writing their names on the Sphynx.

I suppose the hardest lesson we all have to learn in life is that we can't have things both ways. If we want to have beauty, that which appeals not merely to the stomach and the epidermis (which is the function of the greater part of industrialism), but to what lies deeper within the human organism, the heart and the brain, we must have conditions which permit and even foster the production of beauty. The artist, unfortunately, no less than the rest of mankind, must eat to live. Now, if we insist that we will pay the artist only for what fascinates the popular uneducated instincts, he will either produce beauty, remain unpaid and starve; or he will give us shoddy, and fare sumptuously every day. My experience tells me this: An artist who is by accident of independent means can, if he has talent, give the Public what he, the artist, wants, and sooner or later the public will take whatever he gives it, at his own valuation. But very few artists, *who have no independent means,*

---

all these centuries later＝十五六世紀程も後に。

by way of atonement＝贖罪の積りで。

the Thiergarten＝獨逸語の動物園であるが爰では廣く museum の意。

are always……on the Sphynx＝發見した古物に自己の名を書き

程も經つて今更、罪滅しの積りで、伯林や倫敦市の博物館に、彫刻の奇體な燒殘りを一杯並べ立てゝ、常にスフィンクスに自分達の名前を書き付けてゐるゴート人と競爭することになるだらう。

想ふに、吾々一同が人生に於て必然に學ぶ所の最も冷嚴な教訓は、吾々は物事に二途かけることは出來ないと云ふことである。若しも吾々が、美を持ちたいと云ふならば、即ち啻に胃の腑や表皮に訴へる（それは產業主義の大半の機能であるが）ばかりでなく、人間と云ふ有機體の內部にずつと深かく存在するもの、即ち胸や頭にも訴へるものを持ち度いと云ふならば、吾々は美の生產を可能ならしめ、更に助長さへもする所の狀態を有たなければならない。不幸にして、藝術家とても、他の人類と同樣、生きる爲めには食はなければならない。今若し吾々が俗惡にして敎化されない本能を魅する物に對してのみ藝術家に報酬を與へやうと云ふ決心を固執するならば、藝術家は美を生產して報酬を貰はずに餓死するの待つか、それとも、綿入りの擬ひ物を吾々に與へて、自分は每日贅澤三昧に暮すか孰れかをすることになる。私の經驗の敎ゆる所はかうである。偶々獨立の資產を有つてゐる藝術家にして、若しその人に材能があれば彼れは自分の即ち藝術家の欲するものを社會に與へることが出來る。そして社會は早晚、彼れの與へるものは何でも、それを彼れ自身の評價のまゝに信用する樣になるのである。然るに何

込んで悦んでゐる意。

have things both ways＝二兎を追ふこと。

the heart and the brain＝the feeling and the intellect.

no less than＝……に劣らず。

shoddy＝綿混りの毛織物、安價な僞物のこと。

have enough character to hold out until they can sit on the Public's head and pull the Public's beard, to use the old Sikh saying. How many times have I not heard over here—and it's very much the same over there—that a man must produce this or that kind of work or else of course he can't live. My advice—at all events to young artists and writers—is: 'Sooner than do that and have someone sitting on *your* head and pulling your beard all the time, go out of business—there are other means of making a living, besides faked or degraded art. Become a dentist and revenge yourself on the Public's teeth—even editors and picture dealers go to the dentist!' The artist has got to make a stand against being exploited, and he has got, also, to live the kind of life which will give him a chance to see clearly, to feel truly, and to express beautifully. He, too, is a trustee for the future of mankind. Money has one inestimable value—it guarantees independence, the power of going your own way and giving out the best that's in you. But, generally speaking, we don't stop there in our desire for money; and I would say that any artist who doesn't stop there is not 'playing the game,' neither towards himself nor towards mankind; he is not standing up for the faith that is in him, and the future of civilisation.

---

sit on......the Public's beard=社會公衆を自己の意のまゝに左右すること。

Sikh=紀元 1500 年頃に北方印度に起つた宗教で印度敎と回々敎とを折衷した道德的色彩の强い一神敎である。

等獨立の生計を有つてゐない藝術家であつて、昔のシーク敎の諺を用ひて云へば、社會の頭に乘つかつて、社會の髯を引つ張ることが出來るまで、ちつと持ちこたへるだけの性格を有つてゐる人は極めて稀である。人はこれこれの種類の作品を作らねばならぬ、さもなければ勿論生きて行かれないとは、これまで私がこちら（米國）でどんなに度々耳にしたことであらう——それはあちら（英國）でも少しも變りはない。私の忠告——兎に角靑年美術家及び作家に對する忠告はかうである。「諸君はそんなことをして、誰れかに自分の頭に乘つかられて、始終自分の髯を引つ張られてゐるよりは、寧ろ商賣をよして了ひなさい——ごまかし藝術乃至墮落藝術以外に、生活を立てる途は前にいくらもある。齒醫者にお成りなさい。そして社會の齒に仇打をしてやりない——編輯者や繪畫商人でも齒醫者の處へは行きますよ」と。藝術家は旨い汁を吸はれることには飽くまでも反對しなければならぬ。そして又、物をはつきりと見、心から感じ美はしく表現する機會を自分に與へる樣なさうした生活を送りもしなければならぬ。彼れは又人類の未來を委託された者でもある。成程金は一つの測るべからざる價値を有つてはゐる——それは、獨立、即ち自分の思ふ存分をやつて行き、そして自分の內に在る最善のものを出すだけの力を保障するものではある。併し槪して云へば、吾々が金を得たいと云ふ慾望はその程度で止まるものではない。私は、如何なる藝術家でも、その程度で止まらない人は、自己に向つても亦人類に向つても「立派な振舞をして」ゐるものではない、即ち彼れは自己の內に在る信念と文明の將來との爲めに戰つてゐるものではないと云ひ度いのである。

---

being exploited=搾取されること。
play the game=act honourably.
stand up for=fight for.

And now what of the teacher? One of the discouraging truths of life is the fact that a man cannot raise himself from the ground by the hair of his own head. And if one took Democracy logically, one would have to give up the idea of improvement. But things are not always what they seem, as somebody once said; and fortunately, government 'of the people by the people for the people' does not in practice prevent the people from using those saving graces—Commonsense and Selection. In fact, only by the use of those graces will democracy work at all. When twelve men get together to serve on a jury, their commonsense makes them select the least stupid among them to be their foreman. Each of them, of course, feels that he is that least stupid man, but since a man cannot vote for himself, he votes for the least dense among his neighbours, and the foreman comes to life. The same principle applied thoroughly enough throughout the social system produces government by the best. And it is more vital to apply it *thoroughly* in matters of education than in other branches of human activity. But when we have secured our best heads of education, we must trust them and give them real power, for they are the hope—well nigh the only hope—of our future.

---

if one took Democracy logically......=要の意味は民主々義は大衆が指導中心になるものであるから、個人的卓越は認められない、從つて或る優秀な個人に指導されて一般民衆の向上する樣な現象は見られないことになる。

saving graces=saving gifts.

さて次に教師に就いてはどうであらうか。人をしてがつかりさせる人生の眞理の一つは、人間と云ふものは自分自身の頭の毛では、地面から自分の身體を引き上げることが出來ないと云ふ事實である。それで若しも人が民主々義を論理的に解した場合には、人は改善進步の考を止めて了はねばなるまい。處で事物は、曾て或る人が云つた樣に、必ずしも常に見へる通りのものではない。そして幸にも、「人民の爲めに人民に依つて行はれる人民の」政治は、實行上、人民があの救世の天の贈物である所の常識と選擇力とを利用することを妨げはしない。事實、この二つの天の贈物を利用することに依つてのみ、民主々義も漸く作用を爲すものである。十二名の人が、陪審官としての役目を盡す爲めに集つた時に、彼等の常識は、彼等をして自分達の中で一番間拔けでない人を、陪審長に選ばしめる。無論彼等銘銘は各自に、自分こそはその一番間拔けでない人だと感じてはゐる。併し人は自分自身に投票する譯には行かないから、その人は他の人達の中で一番愚鈍でない人に投票する。かくて陪審長が生れて來るのである。社會組織全體を通じて、充分に徹底して適用せられた同一の原則は、最善者に依つて行はるゝ政治を生ずる。そしてこの原則を教育の事に徹底的に適用することは、人の活動の他の部門に於けるよりも一層肝要である。併し吾々が一旦吾々の教育の最善の首腦者を手に入れた曉には、吾々は彼等を信任し、彼等に實權を與へねばならない。何故なれば彼等こそは、吾々の未來の希望——否殆ど唯一の希望だからである。彼等のみが、その部下の選擇と指導訓練、及び彼等の

---

twelve men......=英國の陪審官は十二名より成る。

foreman=陪審長。これが陪審官を代表して裁判長の諮問に答申する。

dense=stupid.

They alone, by the selection and instruction of their subordinates and the curricula which they lay down, can do anything substantial in the way of raising the standard of general taste, conduct, and learning. They alone can give the starting push towards greater dignity and simplicity; promote the love of proportion, and the feeling for beauty. They alone can gradually instil into the body politic the understanding that education is not a means towards wealth as such, or learning as such, but towards the broader ends of health and happiness. The first necessity for improvement in modern life is that our teachers should have the wide view, and be provided with the means and the curricula which make it possible to apply this enlightenment to their pupils. Can we take too much trouble to secure the best men as heads of education—that most responsible of all positions in the modern State? The child is father to the man. We think too much of politics and too little of education. We treat it almost as cavalierly as the undergraduate treated the Master of Balliol. "Yes," he said, showing his people round the quadrangle, "that's the Master's window;" then, picking up a pebble, he threw it against the window pane.

---

in the way of=in the direction of.

the body politic=政治體即ち國家。

to apply this enlightenment to their pupils=先づ教師自ら啓蒙してこれをその子弟に適用し以つて子弟を啓蒙せしむることを云ふ。

Can we take too much trouble=するのに吾々が餘りに骨を折り

定むる教程に依つて、一般の趣味と行爲と學問との標準を高める上に、何等か實のある貢獻を爲し得るものである。彼等のみが、一層大なる威嚴と單純の方に向つて行く最初の一推しを與へ、均衡愛と美の憧憬とを增進し得る者である。彼等のみが、教育は富そのもの、若しくは學問そのものに對する手段ではなくて、健康と幸福と云ふ一層廣汎な目的に到る手段だと云ふ理解を、漸次國家の中に注入し得る者である。近代生活に於て第一に改善を要することは、吾々の教師に博大なる見識を有たしめ、そして子弟にこの啓蒙を適用すことを可能ならしむるだけの資力と教程と彼等に供給することである。教育の首腦者即ち近代國家の有らゆる地位の中で最も責任の重い地位にある教育の首腦者として、最良の人物を手に入れるのには、如何程骨を折つても尙足りないものがあらう。子供は大人の父である。吾々は政治のことを餘り重じ過ぎ、教育のことを餘り輕んじ過ぎてゐる。吾々は、バリヨル大學の學生がその學長を取扱つたと殆ど同じ位に威張つた態度でそれを取扱つてゐる。その學生と云ふのは自分の內の人をつれて學校の中庭を案內し乍ら云つた。「あゝ、あれが學長の窓だよ」それから小石を拾ひ上げて、その窓ガラスに投げ付けた。そして窓から人の顏が出た時に云つた。「あれが學長だよ」と。民主々義は旣に來てゐる。そして實に

過ぎることが出來やうか、いくら骨を折つても折り過ぎることは不可能だ、即ち骨折は尙不足だと云ふ意。

Balliol=Oxford 大學中最古の college で第十三世紀に創立されたもの。

his people=彼の家族や親類のこと。尙部下、手下と云ふ意もある。

"And that," he said, as a face appeared, "is the Master!" Democracy has come, and on education Democracy hangs; the thread as yet is slender.

It is a far cry to the third new factor: Exploitation of the air. We were warned, by Sir Hiram Maxim about 1910 that a year or so of war would do more for the conquest of the air than many years of peace. It has. We hear of a man flying 260 miles in 90 minutes; of the Atlantic being flown in 24 hours; of airships which will have a lifting capacity of 300 tons; of air mail-routes all over the world. The time will perhaps come when we shall live in the air, and come down to earth on Sundays.

I confess that, mechanically marvellous as all this is, it interests me chiefly as a prime instance of the way human beings prefer the shadow of existence to its substance. Granted that we speed up everything, that we annihilate space, that we increase the powers of trade, leave no point of the earth unsurveyed, and are able to perform air-stunts which people will pay five dollars apiece to see—how shall we have furthered human health, happiness, and virtue, speaking in the big sense of these words? It is an advantage, of course, to be able to carry food to a starving community in some desert; to rescue shipwrecked mariners; to have a letter from one's wife four days sooner

---

It is a far cry=It is a long way.
It has=It has done more.

教育の上に民主々義の運命はかゝつてゐる。但しその絲は未だ未だ細い。

第三の新要素、即ち空中の開拓には今の處程遠い。吾々は、一九一〇年頃にサー・ハイラム・マキシム氏から、戰時の一兩年は平時の數年よりも空中の征服に資する所遙かに多いであらうと云ふ警告を聞いたことがあつた。果してさうであつた。吾々は今日、九十分で二百六十哩をを飛行した人の話とか、太西洋を二十四時間で飛行した話とか、三百噸の浮揚能力を有つことになる飛行船の話とか、全世界に渡る飛行郵便線路の話とかを耳にしてゐる。或は他日、吾々が主に空中に生活して、偶々日曜日の休みに地上に降りて來ると云つた時代が來るかも知れない。

實を云ふと私は、凡てこれ等のことは機械的には如何にも驚くべきことではあるが、それは主として、人間が生存の實質よりは生存の影を擇ぶ行き方の立派な一例として私の興味を引いてゐると云ふことを自白する。假りに吾々が萬事に速度を早め、空間を絶滅せしめ、通商力を増加し、地球上如何なる地點も殘らず踏査し盡し、人々が見物の爲めに一人五弗を拂ふ様な空中曲藝を爲すことが出來ると假定して、さて吾々は、廣義に云ふ所の人間の健康と幸福と美德とをどんなに増進したことになるであらうか。いかにも、どこかの砂漠の中で餓へてゐる一隊に食物を運ぶことが出來るとか、難破した船員を救助することが出來るとか、妻君から飛行機に據らない場合よりか四日も早く手紙を受取ることが出來るとか、總じて吾々の商品の交易と吾々の爲す旅行とに於て時間を省くことが出來ると云ふのは、一

Granted that=假りに……として。

than one could otherwise; and generally to save time in the swopping of our commodities and the journeys we make. But how does all this help human beings to inner contentment of spirit, and health of body? Did the arrival of motor cars, bicycles, telephones, trains, and steamships do much for them in that line? Anything which serves to stretch human capabilities to the utmost, would help human happiness, if each new mechanical activity, each new human toy as it were, did so run away with our sense of proportion as to debauch our energies. A man, for instance, takes to motoring, who used to ride or walk; it becomes a passion with him, so that he now never rides or walks—and his calves become flabby and his liver enlarged. A man puts a telephone into his house to save time and trouble, and is straightway a slave to the tinkle of its bell. The few human activities in themselves and of themselves pure good are just eating, drinking, sleeping, and the affections—in moderation; the inhaling of pure air, exercise in most of its forms, and interesting creative work—in moderation; the study and contemplation of the arts and Nature—in moderation; thinking of others and not thinking of yourself—in moderation; doing kind acts and thinking kind thoughts. All the rest seems to be what the prophet

---

than one could otherwise=飛行機などのない場合に受取ることが出來るよりも。

take to=begin, fall into the habit of.

つの利益ではある。併し凡てこれ等のものが、果してどれ程人間がその精神の內的滿足と肉體の健康とを得るのに助けとなるものであらうか。自動車や、自轉車や、電話や、汽車や、汽船などの到來は、果してさうした方面に於て人類に益する所大であつたのか。抑も人間の能力を極度にまで伸張することに役立つものは何事でも、若しも各々の新しい機械的活動、謂はゞ各々の新しい人間の玩具にして、吾々の精力を害ふ程にまでも、吾々の均衡の觀念を奪ひ去る樣なことさへなければ、人間の幸福を助けるものであらう。例へば何時でも馬に乘つて行くか步いて行く習慣であつた人が、自動車に乘り始める。彼れはそれに凝つて了つてもう今では、決して馬に乘ることも步くこともしない。——さうすると彼れ腓はぐにやぐにやになり、肝臟は肥大して來るのである。又人が時間と面倒とを省く爲めに、自分の家に電話を架ける。さうすると忽にしてそのベルの音の奴隷になつて了ふ。一體人間の活動の中でそれ自體に於て、又それ自體獨りでに純粹善である活動と云へば、先づ、適度に——食ふこと、飮むこと、眠ること、愛すること、適度な——純粹な空氣を吸ふこと、その肢體の大部分のものに於ける運動、興味ある創造的な仕事、適度な——藝術及び自然の硏究と觀照、適度に——他人のことを考へ、自分自身のことを考へないこと——親切な行動を爲し、親切な考を抱くこと、位のものである。これ以外の事は悉く、昔豫言者が「空なる哉、空なる哉、凡て空なり」と云つた時に、心に抱いてゐたものと同一物の樣に思はれる。或は云ふ、いやいや偉大なる活動が一つある。即ち冒險

---

it becomes a passion with him=自動車に乘ることが彼れに取つて一つの棄て難い道樂となる。

of oneself=他に原因なく獨りでに。

had in mind when he said: 'Vanity, vanity, all is vanity!' Ah! but the one great activity—adventure and the craving for sensation! It is that for which the human being really lives, and all his restless activity is caused by the desire for it. True; yet adventure and sensation without rhyme or reason lead to disharmony and disproportion. We may take civilisation to the South Sea Islands, but it would be better to leave the islanders naked and healthy than to improve them with trousers and civilisation off the face of the earth. We may invent new cocktails, but it would be better to stay dry. In mechanical matters I am reactionary, for I cannot believe in inventions and machinery unless they can be so controlled as to minister definitely to health and happiness—and how difficult that is! In my own country the townsman has become physically inferior to the countryman (speaking in the large), and I infer from this that we British—at all events—are not so in command of ourselves and our wonderful inventions and machines that we are putting them to uses which are really beneficent. If we had proper command of ourselves no doubt we could do this, but we haven't; and if you look about you in America, the same doubt may possibly attack you.

But there is another side to the exploitation of

'Vanity, vanity, all is vanity'＝舊約傳道之書 (Ecclesiastes) の劈頭 (I. 2)に在る the son of David, Preacher の言葉 Vanity of Vanities; all is vanity. (空の空なる哉凡て空なり) を取つたもの、從つて the prophet はダビデの子のこと。

心と感覺追求慾とである。人間が眞に生きてゐるのはそれの爲であり、人間の有らゆる不休の活動は、それに對する慾望に依つて惹き起こされてゐると。いかにもその通りである。併し韻律若しくは理智を伴はない冒險心や感覺やは、不調和と不釣合とに至るものである。吾々は文明を南洋諸島まで持つて行くことも出來るが、併し土人をヅボンと文明とで改良して地球の表面から無くするよりは、彼等が裸體で健康である儘にして置いた方がよい。吾々は新味のコクテールを發明することも出來るが、併し寧ろ酒を飲まずにゐる方がよい。機械的の事柄に於ては、私は反動的である。何故なれば私は、發明や機械は、確實に健康と幸福に寄與する樣に統制され得るのでない限り、それ等を信仰することは出來ないし——而かもその統制は極めて困難であるからである。私の國では(おゝまかに云へば)都會の人は田舍の人よりも、肉體的に劣つて來てゐる。それで私はこの事實から、吾々英國人は——兎に角——吾々自身と吾々の驚くべき發明品や機械とを充分に統制してゐないので、吾々は眞に有益な用途にそれ等を用ゐてはゐないと推斷してゐる。若し吾々にして吾々自身を適當に支配してゐるならば、さうすることも出來るであらうが、實は吾々は支配してゐないのである。そして若し諸君が米國に於て諸君の身邊を見るならば、恐らく同樣の疑念が諸君を襲ひはしまいかと思ふ。

併し空中の開拓には今一つの方面がある。それは歐羅巴に於

Ah! but……＝以下は反對者の言である。
rhyme＝韻律とは調和位の意である。
reactionary＝進歩に反對する意。

the air which does not as yet affect you in America as it does us in Europe—the destructive side. Britain, for instance, is no longer an island. In five or ten years it will, I think, be impossible to guarantee the safety of Britain and Britain's commerce, by sea-power; and those who continue to pin faith to that formula will find themselves nearly as much back-numbered as people who continued to prefer wooden ships to iron, when the iron age came in. Armaments on land and sea will be limited; not, I think, so much by a League of Nations, if it comes, as by the commonsense of people who begin to observe that with the development of the powers of destruction and of transport from the air, land and sea armaments are becoming of little use. We may all disarm completely, and yet—so long as there are flying-machines and high explosives—remain almost as formidably destructive as ever. So difficult to control so infinite in its possibilities for evil and so limited in its possibilities for good do I consider this exploitation of the air that, personally, I would rejoice to see the nations in solemn conclave agree this very minute to ban the use of the air altogether, whether for trade, travel, or war; destroy every flying-machine and every airship, and forbid their costruction. That, of course, is a consummation which will remain devoutly to be wished. Every day one reads in one's

back-numbered＝雑誌などの月後れ即ち時代遅れのこと。

ける吾々に影響してゐる程に、亞米利加に於ける諸君には未だ影響してゐない方面で——即ち破壞的方面である。例へば英國はもう島國ではない。五年十年と經てば、英國及び英國の商業の安全は、海軍力を以つてしては到底保障することが不可能となるだらうと思ふ。そして海軍力に依る保障と云ふ公式に相變はらず信仰を釘付けにしてゐる人達は、鐵の時代が來てゐる時に、鐵船よりは依然として木造船を擇んでゐる人達と殆ど同じ位に時代遲れになつてゐることを悟る樣になるであらう。陸上並びに 海上の 軍備は制限されるだらう。想ふに それは、國際聯盟が具體化しても、その手に依つてと云ふよりは、寧ろ空中からの破壞及び輸送の能力の發達に伴れて、海陸の軍備は餘り用に立たなくなりつゝあると云ふことに氣が付き初める世人の常識の力に依つて行はれるだらう。吾々が皆完全に軍備を徹廢し得ても——飛行機と强力な爆藥の存する限りは——殆どこれまでと同樣に依然恐るべき破壞力を有つてゐることも出來る。私は、この空中の利用は、統制に極めて困難であり、害惡を爲すその可能性に於ては殆ど無限であり、福利を爲すその可能性に於ては極めて制限されてゐると考へるので、私は諸國民が嚴肅なる會議に於て、即時、空中の利用は、その商業の爲めであると、旅行の爲めであると、戰爭の爲めであるとを問はず、一切嚴禁することにし、有らゆる飛行機と有らゆる飛行船とを破壞し、そしてその建造を禁止することに一決する樣になれば欣快の至だと思つてゐる。無論それは一個の理想であつて、今後吾々が衷心から希ふことになるであらう。世人は毎日新聞紙上で、某々の國が空中に於て第一位を占めることになると云つた樣な記事

a consummation＝an ideal.

paper that some country or other is to take the lead in the air. What a wild-goose chase we are in for! I verily believe mankind will come one day in their underground dwellings to the annual practice of burning in effigy the Guy (whoever he was) who first rose off the earth. After I had talked in this strain once before, a young airman came up to me and said: "Have you been up?" I shook my head. "You wait!" he said. When I do go up I shall take great pains not to go up with that one.

We come now to the fourth great new factor—Bolshevism, and the social unrest. But I am shy of saying anything about it, for my knowledge and experience are insufficient. I will only offer one observation. Whatever philosophic cloak may be thrown over the shoulders of Bolshevism, it is obviously—like every revolutionary movement of the past—an aggregation of individual discontents, the sum of millions of human moods of dissatisfaction with the existing state of things; and whatever philosophic cloak we drape on the body of liberalism, if by that name we may designate our present social and political system—that system has clearly not yet justified its claim to the word evolutionary,

---

a wild-goose chase=大空の雁を追ふ樣な當てもない追求。
be in for=be involved in.
burn in effigy=burn his image.
the Guy=英國に每年十一月五日 gunpowder plot の記念日としてその張本人 Guy Fawkes の奇怪な肖像を作り町內を引き廻はして夜に入つてそれを燒きすてる習俗があつた。從つて Guy の樣な憎むべき人を the Guy と云ふ。

を讀んでゐる。何と云ふ途方もない追求に吾々は引つかゝつてゐることであらう。私は心から信じてゐる、人類は他日その地下の住居で、最初に地上から飛んだガイ（それは誰れであつたかを問はない）の身の代を燒く年中行事をやる樣になるだらうと。私が曾て以前にかうした調子で話をした後で、一人の年若い飛行家が私の處までやつて來て、「あなたは飛行して見たことがありますか」と云つた。私は頭を振つた。「それまでお待ちなさい」と彼れは云つた。若し本當に私が飛行機に乘る場合には、その人と一所には飛ばない樣に大に骨を折らう。

さて次は第四の偉大なる新要素——即ち過激主義と社會的不安である。併し私はこれに就いて何にか意見を述べることは遠慮し度い氣持である。何故なれば私の智識と經驗とは不充分だからである。それで私は一觀察を述べるだけに止めて置き度い。過激主義の肩の上に如何なる哲學的な上衣をかぶせることが出來るとしても、それは明白に——過去の有らゆる革命運動と等しく——個人的不滿の一集合體、即ち幾百萬の人間が現存の社會狀態に對して抱く不滿の氣分の總計に外ならない。そして自由主義の體の上に如何なる哲學的な外套をかぶせることが出來るとしても、若しも吾々がその自由主義と云ふ名稱に依つて、吾々の社會及び政治の現在の制度を指稱してもよいとすれ

---

in this strain=かうした論調で。
You wait!=自ら飛行の經驗をするまで結論を待てとの意。
take great pains=大に骨を折る。
justify one's claim to=……に對するその要求權を正當化する……するだけの權利があることを立證する。

so long as the disproportion between the very rich and the very poor continues (as hitherto it has) to grow. No system can properly be called evolutionary which provokes against it the rising of so formidable a revolutionary wave of discontent. One hears that co-operation is now regarded as *vieux jeu.* If that be so, it is because co-operation in its true sense of spontaneous friendliness between man and man, has never been tried. Perhaps human nature in the large can never rise to that ideal. But if it cannot, if industrialism cannot achieve a change of heart, so that in effect employers would rather their profits (beyond a quite moderate scale) were used for the amelioration of the lot of those they employ, it looks to me uncommonly like being the end of the present order of things, after an era of class-struggle which will shake civilisation to its foundations. Being myself an evolutionist, who fundamentally distrusts violence, and admires the old Greek saying: "God is the helping of man by man," I yet hope it will not come to that; I yet believe we may succeed in striking the balance, without civil wars. But I feel that (speaking of Europe) it is touch and go. In America, in Canada, in Australia, the conditions are different, the powers of expansion still large, the individual hopefulness much greater. There is little analogy

---

cannot properly be called=本來謂はれ得ない、謂ふのは適當でない。

vieux jeu (vju:ʒø)=(佛) old play. 今は流行しないもの。

ば、極富者と極貧者との間の不均衡が（これまでさうであつた様に）今後も相變はらず增大し行く限り、その制度は明かに、自ら進化的だと稱するだけの權利があることを未だ立證してはゐない。如何なる制度でも、それに對して斯くも恐ろしい革命的な不滿の波の高潮を惹き起こす樣な制度は、進化的とは到底謂はれ得ないものである。協同は今日では陳腐だと看做されてゐると云ふことは人の耳する所である。若し果して然りとせば、それは協同がこれまで、人と人との間の自然の友愛と云ふその眞の意味に於て一度も試みられたことがなかつたからのことである。恐らく一般の人間性は、さうした理想にまでは決して向上し得ないものかも知れない。併し若しもそれが向上し得ないものとすれば、即ち若し產業主義が、人情の變革を成就し、斯くして結局使用主か自分達の（極めて適度の割合以上の）利潤をば、使用人の生活狀態の改善の爲めに用ゆることを自ら進んで爲す樣になり得ないものとすれば、私には、文明をその根柢にまで震撼させる所の階級鬪爭の時代を經て、現社會秩序の終焉に了ることが極めてありさうにも見えるのである。私自身は進化主義者であつて、暴力を根本から信じない者であり、そして「神とは人が吾を助けることである」と云ふ古代希臘の諺を讃美してゐる者であるから、私は未ださうしたことにはならないだらうと思つてゐる。未だ吾々は內亂を起さずに、淸算することに成功し得るだらうと信じてゐる。併し私は、歐洲に就いて云へば事情は觸れゝば破裂する狀態だとは感じてゐる。亞米利加や、加奈陀や、濠洲では、事情が異つて、擴張の餘力は未だ大

---

like=likely.

strike the balance=差引勘定する、問題を片付ける。

touch and go=危機一髮の。